日露戰爭を語る

外交、財政の巻

時事新報社編

666
219

複写

666-219
1200501574091

時事パンフレット第十三輯

日露戰爭を語る

昭和三十年顧

政財・交外の巻

時事新報社編

666-219

戰前外交

樞密顧問官〔當時駐露公使〕
子爵　栗野慎一郎

栗野慎一郎氏

日露戰争に至るまでには、日露間で隨分いろ〳〵な外交上の折衝をしたものだ。處が、これらの交渉が不調となつたゝめ、とうとう止むなく日露戰争となつたものである。日露戰争が何うして起つたかを知るには、どうしても一應當時のロシヤの内情を知つてゐないと都合が悪いから先づそのことを一言しよう。

日露戰争前のロシヤの内政事情は隨分複雜であつて、ニコラス皇帝をめぐる所謂宮廷派は極東侵略の野心に燃えてはゐたものゝ、ロシヤ政府自體の對日感情は餘程よかつた。戰前滿洲を占據してゐた露軍の撤兵交渉は東京で行はれることとなつたが、あれも露都でやつたならば或は話はもつと圓滑に行つたのではない

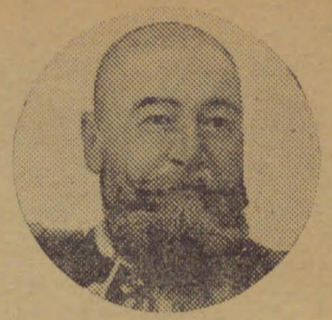
かと感ぜられる。當時のロシヤ政府には、外相ラムスドルフ、藏相ウイツテ、陸相クロパトキンなどの巨頭がゐたが、外相ラムスドルフは日露撤兵交渉が開始されるに當つて當時駐露公使をしてゐた私に、駐日公使イズウオルスキーはどうも日本の氣受がよくないから、ローゼン男に代へようと相談された程、日本の事に氣をつかつてゐた。そこでローゼン男は日本にながく居つて日本人にも友達もあるし、談判上都合がいゝと云ふことで結局ローゼン男が折衝に當る事となつた。

ウイツテ藏相

大體日露戰前のロシヤは、宮廷派と政府方との軋轢が激しく、これを繞つて極東政策についてもいろいろな經緯があつた。元來極東經營はロシヤに於て十三年間藏相の地位にあつたウイツテの苦心した所で、ウイツテは極東開拓に就ては全權をもつてゐた。ところが宮廷派はこれを自分の掌中に收めようとして、ウイツテには一應の相談もなく極東に總督を設けることを勝手にきめてしまつた。そこでウイツテは憤慨して皇帝に辭表を提出した。それが早速聽許されてウイツテは下野することになつた。ウイツテに代つたものはニコラス皇帝の妹婿で、當時ロシヤ宮廷派の頭目であつたアレキサンドル公爵の意のまゝに動くアレキシエフ大將や、ベゾブラゾフで此の一派が極東のことに當ることとなつた。

ウイツテと前後して外相ラムスドルフも、外交のことを外相である自分に相談もなく處分したことに不滿で皇帝に辭表を提出した。併しラムスドルフは溫厚な人で、皇帝の信任も頗る厚かつたから、皇帝は自ら

『外交のことは皆アレキシエフに委任した譯ではない。重要なことになると余に裁可を乞はなければならない。さうなつたら無論、君に相談するからまあやつて居れ』と申されて引止められたので、遂にラムスドルフは外相の地位に留ることになつた。



アレキシエフ大將

陸相クロパトキンも辭表を提出した。これに對しても皇帝は『まあ一ケ月暇をやるから考へよ』と云はれた。けれども面白く行かなかつたから結局クロパトキンは辭職した。クロパトキンの辭職の動機については面白い話がある。

クロパトキン陸相に對して、宮廷派のアレキシエフ大將は、はじめ『極東總督のことは貴方に賴む』と持ちかけてゐた。そこでクロパトキンもその氣で安心して露都から極東視察に出かけ、愈々その結果を報告のため露都に引返すことになつた。するに同じくウラヂオに來て形勢を窺つてゐたベゾブラゾフは、クロパトキンにやらせてはならぬといふので、一夜の中に別仕立の急行列車で露都に馳せ戻り、直接皇帝に拜謁してクロパトキンをだしぬいてアレキシエフ大將を極東總督に任命してしまつた。クロパトキンは露都に歸つてそれを知り、地團駄を踏んで口惜しがり、失望の餘り辭表を提出したものである。

私は駐露公使として在任中、ウイツテにも、クロパトキンにも、ラムスドルフにも會つていろ〳〵話したが、彼等のいふ所は何れも都合がよかつた。例へばウイツテは『どうしても極東のことは日本と提携していかなければならぬ。日本と手を握つてやるには滿洲占領地域から露軍は引揚げなければいかぬ』といふのが

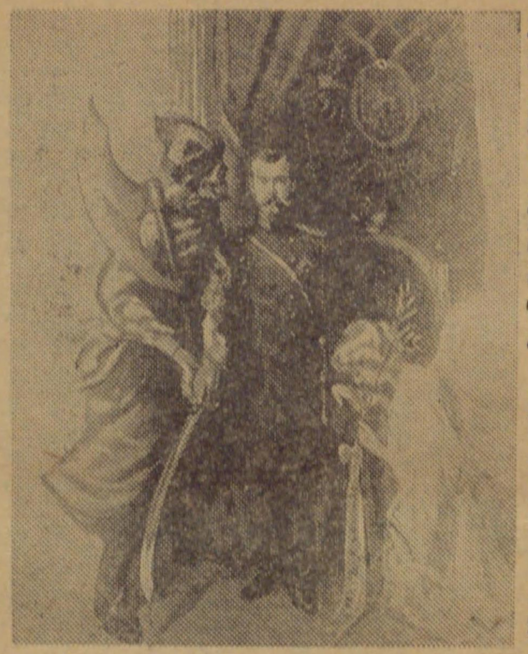
ウイッテの議論であつた。それからクロパトキンは『露軍引揚といふ譯にはいかぬけれど、極東のことについては日本を敵にしてはいけない。日本と協力して極東におけるロシヤの大望を達しなければいかぬ』といふことを頻りと云つて居つた。これらは幾分お世辭か知らぬが、實際ウイッテの回顧錄やクロパトキン傳にその通りチヤンと書いてある所を見ると、日本を敵にしてはロシヤの望みは達する譯には行かぬと、眞に彼等も考へてゐたと見ても間違ひではあるまい。

ウイッテは、李鴻章がロシヤに來たとき、李鴻章に賄賂をやつて露清密約を結んだ程の辣腕家であるから、私も彼の眞意については疑なきを得なかつたのだが、ウイッテの回顧錄を讀んで、やつぱりウイッテにも日本と手を握つてやる氣があつたことを知つた。初めからウイッテを相手に戰前の日露交渉をやつたならば、或は話はまとまつたかも知れない。併しロシヤの政治上には叙上の如く宮廷派といふ癌があり、遂に强硬派のなすにまかせたため事態は日露開戰にまで導かれることゝなつた。今日になつて見ると、戰爭になつた方が結果はよかつたかも知れぬ。日露戰爭によつて支那の分割を救つただけでも大に効果があつたと思つてゐる。

國交斷絶！その日の露都

飛電を秘めてツアーの觀劇會へ

東京における滿洲撤兵交渉が遂に決裂に終つて愈々日露國交斷絶の密電がセントピータースブルグの日本公使館に飛來したのは、明治三十七年二月五日午後のことであつた。私はいよ〳〵事こゝに至つたかと愕然とした。暗號電報は四つに區切つて國交斷絶と公使引揚げの訓令を傳へたが、その後半は續電で訓令するとあつたので、私は今か〳〵と緊張して東京から後電の來るのを待つてゐた。ところが折悪しくその夜は九時からロシヤ皇帝ニコラス陛下が宮中で觀劇會を催されることになつてゐた。國交斷絶はまだ極秘に附せられてゐたから招待を受けてゐる以上日本公使たる私が出懸けない譯には行かない。



平和か戰ひか露帝の惱み（英誌グラフイック所載）

滿洲の風雲急迫を告げ、國交斷絶だといふのに皇帝の宴に行くことは快くもないし、行きたくはないけれども、行かぬとすると具合が惡いので私も遂に意を決して定刻ギリ〳〵に馬車を宮中に走らせた。宮中に特に設けられた劇場は、外交團や政府大官のいかめしい禮裝や、その夫人、令嬢連のはなやかな夜會服に彩られて一段ときらびやかに美しかつた。私はその間をわけて定めの席に近づいて見るとどうも樣子がをかしい。接待役として政府の大官は

何れも出席はしてゐるが、外相が陸相とヒソヒソ話をしてゐるかと思ふと、藏相が外相に耳うちをするなど何となく物々しく、あはたゞしい空氣を私は感じた。

――日露の國交斷絶はまだ誰も知つてゐる筈はないが、どうもこれは唯事ではないぞ――と私は直感した。すると私の傍へつか〳〵と支那公使がやつて來て『栗野公使、日露間に何か非常にえらいことでも起りましたか？　何ですあの外相と陸相の物々しい相談振りは……』と聞いた。私はまさか國交斷絶の暗號電報を洩す譯にも行かぬから『――さあ何でせうな。私も知らないが……』と言葉を濁して逃げた。すると今度は入れ代つてフランス代理公使が私に近づいてきた。此のフランス代理公使とは、私は特に昵懇の間柄であつたから、向ふも打解けて何でもよく話した。

彼はその時一言『……もう何も彼にもおしまひですね』と云つてぢつと私の顏を見た。こいつ斷交を知つてゐるのかなと思つて、私は内心ギョッとしたが、さあらぬ態に『ええ、何が一體おしまひなんです』と、聞きかへした。流石に外交官の彼は『これはいひ過ぎたな』と感づいたのだらう、あたふたと逃げる樣に自席へ歸つて行つた。『……をかしいな。今度の日本政府の處置が未だ外に判つてゐる筈はないのだが――ハテナ、ひよつとすると日本の暗號電報をロシヤに盜まれてゐるのぢやないかしら……』と、私は裏切られた樣な暗い疑惑が心の底にうごめいて來るのを感ぜずにはをられなかつた。あの時のいやな氣持といつたらなかつた。私はもう早く公使館に歸りたくてならなかつた。併しかういふ招待の宴にはいつも中幕頃に皇帝自身、外交團に挨拶をされることになつてゐるので、私も來た以上、中座することはできない。さうかうしてゐる中にやつとその時が來た。

ニコラス皇帝は本當に好人物であつた。風采も立派な方であるし、御會ひした感じは非常にいい。その頃ツアーといへば世界を威服せしめる大した勢ひであつたが、私共に會はれるときは皇帝は横柄なところは一つもなく、我々と話をされることがお好きである樣に見受けられた。この夜、皇帝は謁見の時が來ると、特に私のところへ御出でになつて大變ゆつくり、お話しになつた。それは實に丁寧に挨拶をされ、お話しをなさつた。そこで私が御言葉を賜つて後、イギリス大使がわざ〳〵私のところへ來て『けふは皇帝はあなたと大變よく懇談をなされた樣だが、何か特別のお話でもあつたのかね』と訝つて聞きに來た程である。

あの夜皇帝が日露國交斷絶のことを既に知つてをられたのかどうかは分らない。併し私としては偶然あれが最後のお別れの言葉をかはされたものであると思はれてならない。

私は斷交の飛電を受取つてから五日後の十日に露都を引揚げ、急遽歸國の途についた。仁川で日本の軍艦がロシヤの軍艦に砲撃を加へたのが二月の七日であつたから、私は日露開戰後二日間も敵國の首府に外交官として留まつてゐた譯である。

日露斷交が當時在露各國代表にどういふ響きを與へたかを示すよい例がある。私は斷交の訓令を受けてから當時外交團首席だつたイギリス大使スコット氏に、引揚前に外交團その他露國の友人に對し別れの訪問をしたものかどうか、それに關する習慣などをたづねに行つた。すると私から日本はいよいよロシヤと一戰を交へる覺悟であると聞くや否や、スコット氏はサツと顏色をかへて、しばらくは物がいへなくなつた。おそ

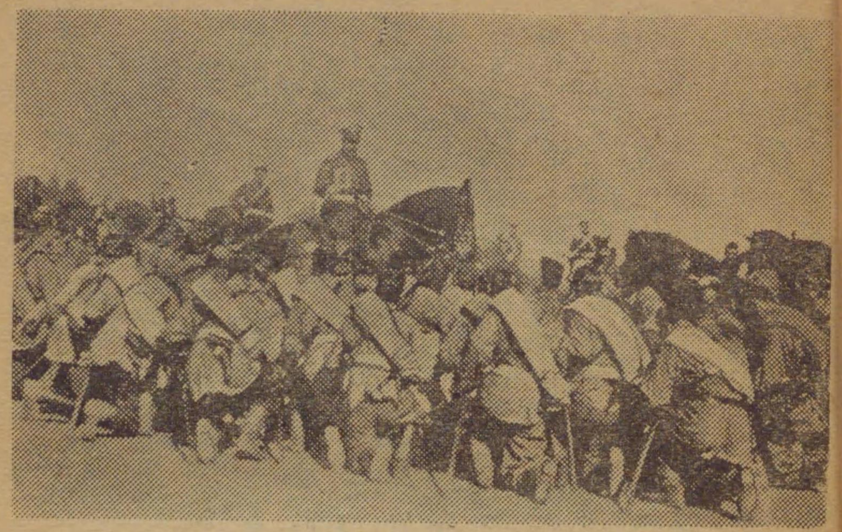
らく今時世界第一の强國であるロシヤを相手に小さな日本が戰爭をするなどといふことは、螳螂が龍車に向ふよりも大それたことだと思つたのであらう。

私は三十分ばかり氏と會談をしてゐる中に、スコット氏のやうに日本と非常に親密な關係のある人でさへ、日露戰爭をはじめたら日本は潰れてしまふ樣に心配してゐることを看取した。こんな風で要談は一向手につかぬ有樣だつたので、私は止むを得ず參事官のスプリングライス氏と、訪問問題の要談をすませた。開戰當初、世界の日本を見ることは斯くの如きもので、日本が勝つなどと考へたものは外國人の中には一人もないと云つてもいい位だつた。アメリカで賭が行はれたとき、タツタ一人、日本が勝つと賭けて大儲けをした者があつたと聞く。まあそんな形勢であつたのだ。

盛んなるかなスパイ跳梁

日本政府の暗號、何んと賣物に

ロシヤ宮廷派の重鎭ベゾブラゾフには、私が駐露公使をしてゐる間に政府に內々で日本公使館で二度會見したことがある。ベゾブラゾフは私に『自分は日本に反對のやうに傳へられ、日本の敵のやうに見られてゐるが、それは大變違つてゐる。私は日本と一緒にやらなければ私共の仕事は出來ないと思つてゐる。私は日本と手を握らなくてはいかぬといふ持論である。今の政府方は役にも立たぬ當局の惡口を云つて居るけれどもそれは間違ひである』と、繰返し語つたところがその會見後しばらくしてベゾブラゾフから私に『外



露日て出に頭街 ゝくなも兵衛護が帝皇ヤシロは眞寫
戰爭に對す るの民國るす熱を煽る モデルスンソヨシーレ

務省（ロシヤ）に居る私の探偵からの報告に依ると、私とあなたと會見したことがすつかり政府方に分つてゐる』と、えらいことを知らせて來た。

その次、私とベゾブラゾフとが再會したとき、ベゾブラゾフは私に向つて『栗野さん、日本の暗號が出來たやうですね』と云つた。

私はその頃暗號が洩れてはいかぬと思つて日露交渉のことで毎日あつちこつちに行つて、歸つて來てから本國へ暗號電報を出すことにしてゐた。發電は大抵午前二時頃までもかゝつてゐる。難しい暗號を使用すると夜通しかかつても終らないことがある。それだから『ロシヤ側に日本の暗號が分る譯はない』と云つてや、つた。ところがたしか一月の末頃か二月のこと、私が政府方のウイツテを訪ねたことがあつた。するとウイツテは形を改めて『私はもうあなたと日露問題についてお話することは出來ない。あなたはベゾブラゾフと

いふ狂人と會つたではないか』と詰めよつた。

そこで私は『あなたは狂人と仰しやるけれど、彼は日本とは非常に關係してゐるので、會ひたいから會つたのである。公使たる私としては當然のことではないか』と言つた。

するとウイツテも『日本の一切の暗號はちやんと分つてゐるからねえ』とおどかす樣に浴せて來た。私はあれこれ思ひ合せて訝しく思つたが『ははあ、さうですか。あなた方に日本の暗號が分つてゐるといふことはどういふ意味か私には分らぬ。私はあなた方が知らない積りでやつてゐるのだ』と、いひかへした。

ウイツテはくりかへし『いや分つてゐる』といふ。そして『――私があなたと話をしてゐることをあなたが本國政府へ暗號電報でうつなり、郵便でいつてやるなりすると、直にロシヤの外務省にその內容が知れてしまふ。それではあなたのためにもならぬし、私のためにもならぬ。だから私はもう交渉中の問題についてあなたとお話をする事は出來ない』と斷つた。

私はそれを抑へて『日本の政府ではあなたに重きを置いてゐる。あなたの御意見は非常な參考の種となるから是非話をつづけて貰ひたい。無論あなたと私の會見については本國政府に電報で知らせなければならないが、今後は決してロシヤ領內から出すことはない。必ず外國に行つて發電するから安心してくれ』と云つた。

ウイツテはなほも『日本の暗號は分つてゐる』との言明をくりかへしたが、結局『それでは今後注意して一つ難しい奴でやらうぢやないか』といふことになつた。ベゾブラゾフといひ、ウイツテといひ、官廷方も政

府方も、互に密偵を放ち、暗號を盜むことに狂奔し、互に相手をやつつけようと企んでゐる。これがロシヤの內情であつた。

日露戰爭前、日本の暗號がロシヤに分つてゐたといふは一大事である。どうしてロシヤ側がそれを手に入れたかは深い疑問となつてゐたが圖らずも一年後に本野フランス公使の手からそれが分つた。

或る時本野公使のところへ變な男がたづねて來て『日本の暗號を持つてゐるから買つてくれないか』と云ひ出した。

本野公使は最初『そんなことがあるものか』と云つて取り合はなかつた。するとその男は『いや慥に自分は暗號を持つてゐる。お疑ひなら日本暗號、第何號第何々號の暗號を拵へて來いといへばすぐに拵へてくる』と云つた。

そこで本野公使がためしに『それでは△△號から△△號まで作つてこい』と原文を渡してやつたらちやんと原文を暗號に直して作つて來た。見ると文章も的確で、本物と寸分變らない。そこで『これはいけない。不穩當だ』といふことが判つて、幾らか金を出してこれを買上げたといふ話である。

一體此の男は何者であるかといふと、もとロシヤの探偵をしてゐた者である。初めはロシヤ側も日本の暗號だといふので彼に金を與へて之を買取つてゐたが、後には分つたので何も出さなくなつた。そこで彼も金に窮し、遂にそれを逆に日本側へ賣付けに來たものである。ではどんな風にして日本の暗號をぬすんだかといふとそれはきはめて巧妙な方法で行はれた。

寢室に虚を衝かれた某公使

むざ〳〵露國給仕に暗號盗まる

日露戰爭前のことである。某國駐在公使は外交の機密である暗號電報を晝は肌身はなさず自分がもつて歩き、夜は自分の寢室の枕元の机の抽斗にその暗號電報をしまつておいた。その公使が果して之で絶對に暗號を盗まれる心配はない、安心である――と思つたかどうか知らぬが、とに角これが一代の不覺の種となつた。此の公使館に一人の實直な僕長がゐた。僕長はいつも公使の身邊に近づいて何くれと世話を燒いてゐたが、これが又意外にもロシヤの密偵で公使に忠實を盡すのはその實、暗號の在所を知らうとする手段に過ぎなかつた。彼は公使の行動をよく注意をしてゐる間に、公使がいつも寢る前に大切さうに紙片を机の抽斗に入れるのを見て『これが暗號だな』と見てとつた。そしていろいろ苦心したものと見えてとうたう巧妙な盗み出し方を考へた。

それは毎夜公使の寢息をうかゞつてひそかに部屋に忍び入り、合鍵で机の抽斗を開けて暗號電報をぬすみ出し、別の所で素早くそれを寫眞に撮り、公使の寢てゐる間にそつとそれを元の位置に戻しておくことであつた。

公使は夜が明けて机の抽斗をあけて見ると別段の異狀がない。それで氣がつかなかつたのだが、密偵の方では、毎晩それをくりかへしてゐる中に、とう〳〵日本の暗號を一つの立派な本に拵へ上げてしまつた。

そしてそれをロシヤ政府に賣り込んだのである。

そんな風にして暗號が盗まれたことが端なくも發覺したのは、前述したやうに本野駐佛公使の所へ賣り込みに來た者があつたからである。

扨ていよ〳〵日露國交斷絶して二月十日私は露都を出發して日本へ引揚げることゝなつた。が、さういふ工合になつても、何も私共に對する反對運動などは見えない。公使館員は毎日出歩いてゐる。各國の大公使館員は三、四度も遊びに來る。夜遲くまでゐるが誰一人面倒をかけたことがない。

また公使館で使つてゐたロシヤ人の中には別れる時にオイ〳〵聲を出して泣いた者もある。之は職に離れるといふ心配もあつたのだらうが、大體そんな空氣であつた。

また日露戰爭が始まつた後も、ロシヤ人は一向に感じない。元來ロシヤ人の八、九分通りは無學であるから、滿洲は何處にあるのか、戰爭は何處で行はれてゐるのか知らない。現に私が東京へ引揚げてから駐露英大使館參事官スプリングライス氏（此の人は駐日英公使館書記官として日本にも長く居つた）が私の所へ次の樣な意味の通信をよこした。

『……ロシヤ政府側では頻りに人氣を引立たせるやうなことをやつてゐるが一向に國民の人氣が引立たぬ。戰爭が始まつたのは二月初めであるが、それが五月頃になつて、やつと國民がロシヤが今戰爭をやつてゐるのだなといふ考になつたやうだ』

と。日露戰爭當初の數ケ月はロシヤでは一向に國民は氣が引立たなかつたのは事實である。

一體日露戰爭をはじめるに當つて日本側で計算した所では、ロシヤはシベリヤ鐵道一線で來るから軍隊の輸送上非常に不便であるから、ロシヤの極東に對する兵力は恐るゝに足らずといふ考であつた。一線の鐵道で來ると日に八回の運轉が出來る。それでは二十萬の露兵を維持することは出來ぬ。之に反し日本側は二十萬から三十萬の兵を送れるから必ず勝てる。ロシヤが滿洲の野で敗戰すればロシヤ內部に於ては一揆が起る。朝廷がつぶれる。さうすれば此の戰爭もえらい大きくならずに片付く――といふのがどうも參謀本部で觀て居つた意見らしい。

それがどうしたかと云ふと、ロシヤは機關車は別だが安い材料で貨車の安いやつを澤山拵へて一遍きりにして薪に使つてしまつた。詰り參謀本部で計算したのは往き來するから日に八回しかいけないと見て居つたのが十四回も來て居る。十四回も來てゐるから戰爭末期にはリネウイツチの五十萬の露兵が北滿に集る樣なことゝなり、日本も最後の勝利を得るには三月十日の奉天戰後にも更に幾師團の增援をしなければならないといふ問題が起ることになつた。

恰度その頃一方に於てルーズヴエルト大統領の盡力の結果、日露講和となつたから、そのことは滿足に運んだが、あれがなかつたならばなか〳〵難しいことになつたであらう。

私が聽いた話に、日本軍も隨分辛い所まで行つて、いよ〳〵いけないかと思つてゐると、何時もロシヤの方から先に白旗を揭げてくる。之は全く天佑だといふことであつた。

日本軍の輸送にしても、大連までは船で行けるからうまく行くけれども、それから先は支那の馬車位では到底運輸がうまく行かない。日本軍の或る部隊は寒いときにも跣足であつた。靴は船で到着してゐるけれども、船から戰線まで靴を運んで行けないといふ狀態に陷つたのである。

かういふ工合で日本側にも大分違算があり、なか〳〵苦勞は絕えなかつた。

ツアーとカイゼル野心比べ

日本の戰勝が支那分裂を救ふ

日露戰爭前の歐洲の形勢はヨーロツパでも、イギリス、フランス、ドイツなどは、みんなロシヤと云ふ國に重きを置いた。軍備の擴張から何からロシヤには一目を置いた。ヨーロツパの政策に就いてはロシヤの意見が通つた位、ロシヤはえらいものであつた。だから日本を輕蔑するのは當然だつた。アメリカの新聞に、ロシヤのアジヤ局長が寄稿して『日本と事が起れば日本を潰す位のことは、まるで譯ない話だ、砂のやうに踏み挫ぐのは譯ない』と豪語したのも當時としては不思議ではなかつた。

一體ロシヤは、財政的には健全な國で、ウイツテが十三年間、藏相をやつてゐる間に、すつかり强固な基礎を作つた。ウイツテはロシヤは大業を前途に持つてゐる、その前途の大業を果すにはロシヤは外債を募集出來なければいかぬと考へた。そこでウイツテの在職中は國の經濟といふことに重きを置いて財政の健全化につとめた。それで私共がロシヤに居つて使ふ金は金貨であつて、五十ルーブル以上が紙幣となつてゐた位である。そこで私は露都から東京へ歸つて來てから桂首相や小村外相にもこのことを話した。

此の樣にロシヤは世界一の强國と見られてゐたから、從つてロシヤが勝つといふ豫想の下にひそかに戰勝の分け前を期待して居つた國のあるのは當然であつた。當時におけるドイツ皇帝の態度を見るとその期待が明かに見えてゐる。元來カイゼルは露帝ニコラスと殆ど兄弟の樣に手紙や電報のやりとりをしてゐた間柄であつた。カイゼルは露帝に親書をおくつて『東洋でお前が仕事をやつてゐる間はヨーロツパでは何事も起さぬ樣に抑へるから思ひ切つて東洋において をおやりなさい』といふ激勵の書簡を書き保證を與へてゐる。

露艦上に於ける露獨兩皇帝の密議（左が露國皇帝）

それから戰爭中の兩帝の往復文を見ると、ドイツ皇帝はえらい野心を持つて居つた。日本が日露戰爭に敗けて居つたら、ロシヤは無論のことドイツもその野心を伸ばし、支那は分割されて居つたに違ひない。之等を考へると日本が勝つたからこそ、支那の獨立領土保全も出來てゐるのだと考へられる。卽ち義和團事件以來支那に對する列國の爪牙は次第に伸び、既にイギリスは威海衛を、フランスは廣州灣を租借してゐたが、ドイツは山東省の膠州灣を狙ひ、ロシヤが滿洲延いては韓國までをその勢力範圍にとり込むならば、ドイツはロシヤと心を合せて、支那に於いて自國の勢力を扶殖しやうとカイゼルは考へてゐたの

だつた。

日露講和問題は日本海々戰後アメリカ大統領ルーズヴエルトの斡旋で成立したが、ルーズヴエルトが講和を首唱したのは世界平和といふ建前もあるが、つまり之から先き戰爭を續ければロシヤの爲にもいかず、日本のためにもならぬといふことになるのを心配したのである。日本軍は奉天の陸戰と對馬沖の海戰で大勝利を占めたが、ロシヤには北滿にリネウイツチの軍が五十萬待機してをり、之から先戰ひを續けるには日本にも隨分犧牲がいる。一方ロシヤとしても若し日本軍がシベリヤに侵入することになると、講和條件が喧しくなるから、今の中に名譽を損せず談判をした方がいゝ。今がやり時だとつゝいたので、敗戰で嫌氣がさしてゐる折柄之に傾いて來たのである。

小村外相は對露行動を目當に日英同盟を計畫されたが、之は伊藤公もいふ通り、第三國が戰爭に參加しないとイギリスは動かないのだから餘り世間でいふ程期待できるものではない。フランスは日英同盟に對抗して露佛協定を急造したが、此の間にあつてカイゼルは最初はロシヤをけしかけ、後に日露兩國が永く戰爭をつゞけ双方ともヘトヘトになれば結局自國には得だと考へる樣になり、日本に對して好意を示さず、專ら自己の野心をのばす機會をねらつてゐたのであつた。

此の樣な形勢から見ると、日本が勝つて講和條約を締結した事は誠に幸であつた。若し日本が敗けた場合を想像したならば隣邦支那はどうなつたか。今滿洲國がどうのかうのと云はれてゐるが、そんなどころの騒ぎではなかつたであらう。支那を分割から救つたものは實に日本であつた。

卅年前の非常時財政

當時大藏次官　男爵　阪谷芳郎

◇當時の阪谷芳郎氏

日露戰爭當時の財政と云ふことに就ては、これは既に日清戰爭以後からも引續いてゐると云つても差支へないと思ひます。何故かと云ふと日清戰爭は明治廿八年五月に講和談判が成立した。私は其時分陛下の御供をして大本營附として廣島に居りました。大藏省の出張員として居つた譯で、當時中將であつたが兒玉源太郎さんも陸軍次官として廣島に居られ又內閣總理大臣の伊藤公も居られた。時は二十萬の大軍が旅順に集つて、內地の方は、陸海軍共殆ど出拂ひ、極めて手薄になつて居つたところであつた。そこへ三國干涉が勃發して來た。

そろそろ干涉が始まつたから至急逢ひたいと兒玉さんから私を呼びに來た。すぐに私は出かけて行つた。兒玉さんの云はるゝには三國干涉に對しては國防上多少の準備をしなければならぬが、差向き國民軍を編成する金がいるから考へておいてくれとのことであつた。然しながら兎に角三國を相手にして戰端を開くと云ふことは重大な事であるから能く熟考しようと云ふことになつた。其中に大本營を京都へ移した方がよからうと云ふことで、大本營は京都の方へ戻つて來た。そこで京都へ來てからいろ〳〵廟議の結果遼東半島還付と云ふことになり、樞密院會議を開いた結果、その詔勅が出た。

その時は日本全國民はみな泣いて口惜しがつて、殊に陸海軍、外務省、大藏省等軍事外交財政に關係ある人々は、折角得たものを三國干涉に依つて、その成果を奪はれるといふことを、非常に殘念に思つた。所謂恨骨髓に徹すると云ふ譯で、卽ちこれが臥薪嘗膽に變つて來た。これでは日露戰爭は到底避けられないと云ふことを吾々は考へた。況や陸海軍はいつかは日露戰爭が起るであらうと云ふことを覺悟して居つた。凡べての財政計畫はこの日露戰爭でも起つた時に備へると云ふ所謂、非常時に備へると云ふ覺悟で進めていつた。

ところが十年經つて三十六年夏から日露間に談判が始まつた。さうして何うもその談判の模樣が芳しくないと云ふところから大藏省ではこれは到底この談判は破裂する云ふ覺悟を持つた。その時の大藏大臣は曾禰荒助さんで私が次官をしてゐました。當時その準備にかゝるに就て日本銀行總裁が遠からず滿期となつてゐる、當時は山本達雄さんがやつて居られた。立派な總裁ですが、何しろ戰時財政になればもう大藏省が日本

銀行を乘取つて終ふ覺悟でなければ不可ないと云ふ議論で、山本さんに辭めて貰つて後任總裁に當時大藏省の理財局長をしてゐた松尾臣善氏になつて貰ひ、日本銀行を大藏省の自由にして終ふ覺悟をした。

何も山本さんに缺點はないが山本さんは財政關係の方のことはまだ經驗のない人であつた。その前には郵船會社に居られ、川田總裁の時日本銀行へ入つて來た人であつたので、國家財政に通じてゐる人がよからうと云ふので明治三十六年十月二十日松尾氏に代つて貰つた譯である。それと同時に民間の有力者澁澤子爵其他の人々に覺悟して貰ふやう大藏省でそろ〳〵話を進めた。それでないと愈よ談判が破裂した時分に實業家の反對があつたり何かすると具合が悪いからさう云ふ重な人々に話をした。後で聞けば兒玉源太郎さんも自ら澁澤さんの所へ行つて今度は談判が難しいと云ふことを話して、諒解を求められたと云ふことであつた。

血の出るやうな擧國一致
――無けなしの金で兩軍艦購入

ところへ卅六年十二月日進、春日の二軍艦を買はうか何うしようかと云ふ問題が起つた。さう云ふ時であつたから私は金貨を積むことを考へて、倫敦へ出來るだけ爲替を買つて金を積んで置いた。そこへもつて來て海軍省から春日、日進を買つて呉れと云ふ話があつたので大分金貨を取られるのであるから、これは隨分考へものだと云ふのでいろ〳〵議論があつたのですが、結局まあ戰爭は避けられない、露國が反省して呉れて戰爭が避けられゝばそれ程幸福なことはないのですが、さうは行かない情勢であるので日進、春日を買つた方がよからうと云ふことになつた。卽ち日本の決心が露國に通じてゐないからこの軍艦二隻を買ふことに依つて、日本の決心を示したら或は戰爭がなくて濟むだらうと財政緊急勅令案を起草、十二月下旬內閣の議を經て樞密院に御諮詢になり、同月二十八日同院御前會議に上つたものですが、其時顧問官の川村純義さんが大變激論をされて『何を愚圖々々して居るか』と怒鳴られる程でしたが、會議が濟んでから吾々の決意のあるところを話したところ『大變出過ぎたことを云つた』と申されたのですが、軍艦の一隻や二隻を買ふとか買はぬとか云つてゐるやうな時ぢやないと、ひどく當局の奮發の足りないことを罵倒されたのでした。ところがそれでも露國が何うしても反省しない。もう一遍もう一遍と繰返して反省を促したが、どうも滿足な返事が來ないので遂に翌年二月九日開戰になり、旅順の攻擊が始まつた。

すると直に大藏省では――その時は大命に依り、松方さんと井上さんが大藏大臣の顧問と云ふことになつて大臣の他に元老が二人顧問で居られた――私は大藏省で直に緊急勅令を以て租稅を增徵しようと云ふ議論をした。その時の財政の考へは今度の戰爭は世界第一の大きな國と戰さをするのだから却々難しい戰爭である。戰さに敗けたら財政と云ふものは算盤がとれやう筈はない。その時には不換紙幣を出すなりその他凡ゆる極端な手段を執らなければならぬが、戰さに勝てば兌換を停止せずに行くと云ふ考へを持つた。

何故兌換を停止しないかといふと戰爭になれば兌換を停止するのが當然であるが、その當時の日本の工業は大きな戰爭をする程にまだ發達してゐない。何うしても軍需品は海外から買はねばならぬ。日本が戰さに勝てば太平洋は開け放しになつてゐるから中立國からでもどこからでも軍需品は取ることが出來る。併し軍

需品はただでは寄越さない。金が要る、日本銀行の準備金なんか到底足りない。そこで外國債を募集しなければならぬ。外國債を募集して爲替のバランスをとつて置かなければならぬ。それには日本の財政が强固であると云ふことを外國人に諒解して貰つて外債の募集に都合好くしなければならぬ。それでなければ不可んと云ふ考へであつた。

そこで直に緊急勅令でもつて稅を取らうと云ふことになつた。これに依つて公債を起す時にこちらに償還の財源があると云ふことを示さなければならない。併しいきなり緊急勅令でやると云ふことに廟議は殆ど決定してゐたのであるが、その時衆議院議員の方からこの場合これは擧國一致で決めるべきである。何うか議會の議を經てやつて貰ひたいと云ふ。緊急勅令でやつても國民は不平はないが、併し代議機關があるのにその機關を經ずに緊急勅令でやるのは如何にも遺憾であるから、議會を開いて與れと政府に請求があつた。それに就て何うであるかと大藏省へ相談があつたが、何うも憲法の規定通りに四十日か五十日の間を置いて議會を開く樣な愚圖々々は不可ん、一日も猶豫せずに緊急勅令でやつて我が決心を示す必要がある。よし議會を開くにしても政府の原案に對し修正案等が出て疵を附けたりなんかすると、國論の不統一を暴露してまづい。大藏省としては斷然卽刻に緊急勅令出して貰ひたいと力說したので、總理大臣の桂さんも大分心配して大藏省を怒らしても困るし衆議院を怒らしても困る。そこで桂さんが井上さんに相談し、井上さんが私共を招き議會の召集には憲法の規定をふまずに短時日に召集する。そうして大藏省が提案した場合決して疵を附けない　前以て疵を附けないと云ふ話は可笑しいが全院一致で卽刻通す樣にするから何うかそうして貰ひたい。大藏省でもそれで折合つて貰ひたい。斯う云ふことで又召集は三月中旬にすると云ふので、そう云ふことなら僅か四五十日間の違ひであるから、何うも待てないと云ふことも出來ないので承知したのです。

そこで議會は三月十八日召集と云ふことになつた。議會への提出案が入きな案で總體で五億七千六百萬圓であつた。之を內譯すると、

『借金大使』には誰がなる？

大軍事費と共に煙草專賣法

臨時事件費

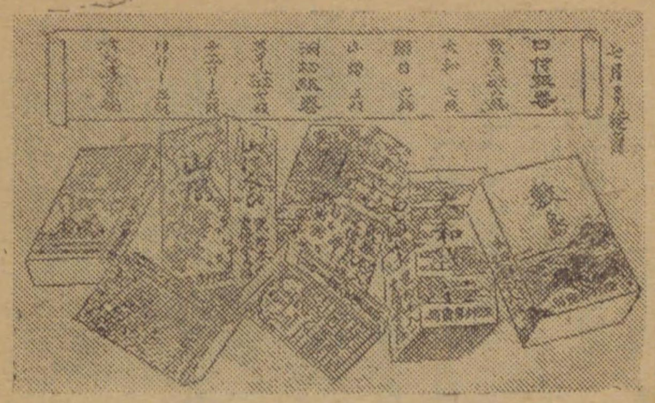
一、金一億五千六百萬圓　勅裁濟支出額
一、金三億八千萬圓　臨時軍事費
一、金四千萬圓　臨時事件豫備費
計五億七千六百萬圓

右支辨財源

一、金六千八百萬圓　增稅收入
一、金四千七百萬圓　歲計剩餘金

一、金五千萬圓
二、金四億千百萬圓
計　五億七千六百萬圓

特別會計資金繰替
公債及一時借入金



◇官煙の賣出し

非常時財源の一部として煙草專賣法が成立した結果煙草は民營から官營となり本居宣長の歌に因んだ敷島大和、朝日、山櫻の口付ものと、スター、チェリー、リリーと當時としてはハイカラな名をつけた兩切が夏になつて賣出され、其の後になつてゴールデンバットが現はれた、此中大和や山櫻、スターなどは不賣れで消滅した。（寫眞は時事新報に出た官煙賣出しの廣告）

つまり眼目は一ケ年約二億圓の經常歳入を作らうと云ふのであつて、これが前後二回全會一致殆ど質問なしで通過して終つた。そしてその時に煙草專賣法も一緒に出してそれも通過して終つた。それでこれならは先づ約二億圓を利子に充てゝ年五分として大分大きな公債が募れる。即ち三四十億の公債を募つても利息だけは拂へる譯だから公債を募つても二三年は安心である。然しどれだけ軍費が要るか判らない。兎に角あれだけの陸海軍を動かしたことは日本では初めてゞ、これまで日清戰爭だけの經驗しかない。日清戰爭は二ケ年二億圓計りで濟んだが今度はその十倍と見

て二十億は要るだらうが、兎に角借金をするだけの財源は出來たと云ふ安心が私は出來た。

この上は內國と外國で國債を募らなければならぬ。內國債は日本銀行を使へばくいらでも出來るが外國債は外國人が信用してくれなければ出來ない。そこで直に人を外國へ出さうと云ふことになつた。

其時今の大藏大臣高橋是清さんを煩はすと云ふことになつた。

んを煩はさねばならぬと云ふ意見であつた。曾禰大藏大臣は多少反對論を有つて居られたやうで井上侯は、『何うだらう早川千吉郎がいゝぢやないか』と云ふ。早川さんは其頃三井に居つた。井上さんが大藏大臣の時は秘書官をしてゐたのでよく本人を知つて居られたので、早川がよくあるまいかと云ふことであつたが、松尾日銀總裁と私とは斷じて高橋さんより他に適當な人がないと云ふ譯で高橋さんを推したのです。

ところが、其以前に日本銀行と正金銀行とに歐米の情勢を探らしたが、どちらも今度の戰爭は日本の方が敗けだらうと、歐米で考へて居るので、外債募集などは思ひも寄らぬと云ふ情報であつた。そこで日本興業銀行の添田壽一さんにも賴んだ。日本興業銀行と云ふと少し見當違ひのやうであるが、添田さんは倫敦で大分友達を持つて居りオースチン・チエンバレーンも亦友達の一人であつたので添田さんの手を以て探つて居た。高橋さんが大藏省の希望通り命を受けて行くと云ふ時になつて、添田さんにも斯う云ふことを話してあると話をすると、高橋さんが大變おこり出され、自分は一人命を受けたと思つてゐたが、他に添田君などがあつては變な風に互に仕事を毀すやうなことになつても不可ぬから、それでは一層のこと添田君をやつた方がいいぢやないかと云ひ出して、高橋さんを宥めるのに大いに困つたと云ふエピソードもあつた。

何しろ内地では日々兌換に依り金貨の引出しが烈しい、段々金貨がなくなつて終つて、金の地金を造幣局へ廻して鑄造させるが何分造るよりも引出される方が早いので、松尾さんも心配して何うしようと云つて來る。私は何うしようたつて仕方がない。どん〳〵交換してやるんだグヅ〳〵すると餘計足許を見られて困るだから無くなるまでやれ、と云ふ騷ぎなんだから早く外國債を成立たしたい。それでなければ爲替の出合がつかない。そこで八方手を張つたが正金銀行、日本銀行でも一向に途がないと云ふので、添田さんの方にも頼んでやつて貰ふことにした。ところが愈よ使節が出掛るやうになつて不平が出るのであつた。

併しそれは添田さんに全然手を引かせると云ふことで問題は片が附いて、高橋さんがロンドンへ行つて當つて見ると僅か百萬磅や二百萬磅でも難しいと云ふやうな有樣で殆ど見込みがなかつたのです。最初はそこで松尾さんはもう兌換を止めた方がよからうと云ふ。井上さんも頻りに早く止めろ、戰爭をして兌換を止めないと云ふことはないと云はれる。私は『高橋さんを倫敦へやつて金を借りようと云ふのに、ここで兌換を止めては日本は財政が破綻してゐると觀られる、それでは金を貸す人がない、なければ爲替の出合もつかない。これから戰さは何年かゝるか判らない軍需品が買へない許りか財政は破綻しなければならぬ。併し幸ひにも東郷艦隊は旗色がよい。旅順攻陷は大變難しいが恰度鴨綠江方面の黑木軍が五月には露軍と戰ひを交へると云ふことになるから、もう少し待つ方が好くはないか。五月まで兎に角待つて鴨綠江軍が敗れでもしたら到底駄目だが、それまで見てゐやう。それに今から兌換を停止して見ても金貨の兌換は知るべきのみ』と云ふと、松尾さんは承知しました。松方さんは『お前方の考へでやつたらよからう』と云はれたのですが井上さんは却々承知しない『勝つか敗けるか判らない敗けた時に何うする』と云はれるので、私は『敗けた時には凡べての財政は毀れるが、阪谷は戰さを勝つものとしてやつてゐる』と云つたものである。

海軍大臣の山本權兵衞さんも恰度宣戰布告の少し前に心配して『阪谷君財政は大丈夫か』と聞くので私は山本さんの顏を見て『あなたの方の海軍は大丈夫ですか』と云ふと『海軍が大丈夫であるかとは何う云ふ譯です』といふから『海軍が敗ければ到底財政はやつて行けません、財政、軍事、外交と三つが賭けをしてゐるやうなものです。私は財政の方から國家をあやまるやうなことはないと確信を有つてゐる。あなたは軍事の爲め國家をあやまることはないと云ふ確信を御有ちになるか。私の方では陸海軍が勝ちさへすれば財政は大丈夫と觀てゐる。あなたの問はあなたが答へなければならぬ』と云ふと山本さんは頭を撫でて『海軍はまあ半々位だね、全勝とは考へられないこつちの軍艦も半分先方の軍艦も半分の打擊を受ける程度に行くだらう』と斯う云ふので、『その位なら財政もかつ〳〵に行きます、兎に角あなたの方で勝つて下さい。勝戰になれば公債も募れるし、又兌換も停止しないで行ける。さうすれば兵器でも軍艦でも何でも買へる』と云つたのであるが、一番三月、四月が心配であつた。

内債應募者には特典あり
日銀が金を貸す ▽▽苦肉の策

ところが五月になつて見ると、鴨綠江の戰爭が意外に大勝利であつた。そこでロンドンへ鴨綠江

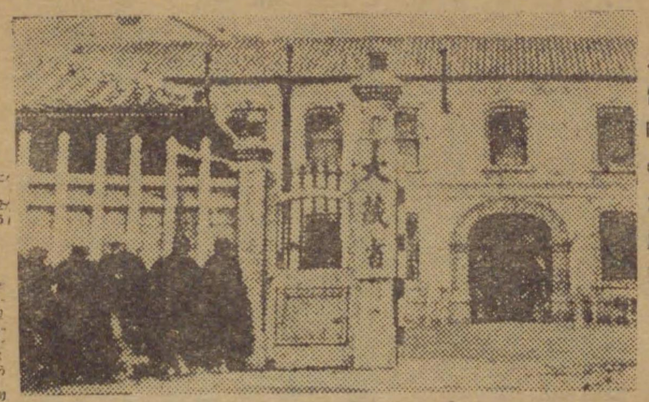
軍大勝利と云ふ電報が行くと、忽ち高橋さんの話が纏まつて終つた。公債引受けは英國は勿論米國でも引受ける。佛國も露國との關係があるので戰爭中は公に引受けないが戰爭が濟めばこれも引受けると云ふやうになつて來た。それから先は大變樂になつて來た。

内國の公債はその前に第一回の軍事公債一億圓の公債を募つたが却々民間で反對があつた。頻りに先づ五千萬圓に止めよと云ふのであつた。日本ではそれまで一億圓の公債を一時に募つたことはない。當時と今日と比較して見ると、今日は實に金融界が大きくなつたものである。併し當時軍事公債を募る時には、直ぐさま澁澤さんや島田三郎さん等に全國に行脚して貰つて、國民の愛國心に愬へて公債の募集に應じさせた。又裏面に於ては日本銀行が働いて軍事公債の募集に應ずる人には日銀から資金を融通した。そうしなければ、どんな富豪でも金が遊んでゐる譯はないのだから、そうやつて大きな口を引受けさせたが、一億の軍事國庫債券が三倍以上四倍になつたと思ふ。これは日本の國力を示す一つの手段として、内債が出來だん〳〵軍事費の支拂ひが多くなると、二回三回と段々國庫債券を發行した。今日の高橋さんのやつてゐる公債の發行とは方法が少し違ふ。今高橋さんのやつてゐるのは公債を日本銀行に持たせるのであるが、私のやつたのは一般から募つて、金は日本銀行が應募者に貸した譯です。軍需品の支拂ひが增加すれば從つて公債を引受ける力が民間に出來て來る。爲替は外國債で向ふでバランスがとれる。それでずつと進んでいつて二年の戰爭を無事に終へた譯である。

議會を通過した煙草の專賣法の實施は却々一年や二年で出來ることではないが、數年前から準備してゐた

當時煙草の專賣は仁尾維茂君、橋本圭三郎君、佐々木善次郎君などを擔當主任として外國に取調べに行き内内詳細の準備が數年かゝつて出來て居つたところへ戰爭が始まつた。それで煙草の專賣は議會を通過して三、四ケ月後に實施した。そんなことは何處の國でも出來るものぢやない。平生の準備があつたからで、何うしても今後は露國と戰爭は避けられぬ。それには大きな財源が要ると云ふことを覺悟して、その時は煙草の專賣をしなければならぬと考へ準備が整つて居つた。是等に依つて難儀な戰爭であつたが、財政上に於ては耐へることが出來たものと考へる。

兎に角、擧國一致と云ふことが、能く保たれてゐたので、そんなに不平もなしに專賣法も議會を通過して、その實施が出來た譯である。現在我國の財政は非常に赤字が多いが、明治廿年頃からこつち赤字はないやうにしてゐた。公債を起す時には必ず何か收入のある殖産的の事業でなければやらない。日清戰爭の時は仕方がない。軍事公債を起したが僅かで直ぐ償金を支那から取つて償金と軍事公債と振替へたが、日露戰爭の後始末には困つた。償金を日本で放棄したので、そこで朝鮮の併合と云ふやうなことも多少まあ財政上の理由で急いだ譯である。つまり滿洲なり朝鮮なりに今はブロックと云ふ言



◇當時の大蔵省

葉があるがその時分にはない。經濟團と云ふ語を大藏省で作つた。

當時地方長官會議の時地方長官に說明するのに『日露戰爭で莫大な借金をしたからその後始末をするのに今日朝鮮滿洲は日本の勢力範圍に入つたから、經濟團の力で日本の國民の負擔力を幾分でも增すやうにしたい』と云ふと『阪谷さん、經濟團とは何の事です』と聞かれて、私も說明に困つたが、今日でいふ經濟ブロックが出來れば、こちらの商賣が便利になり、日本の商工業者のためにしやすくなる。それから國債なり增稅の負擔もしやすくなる。以上でまあ大體の筋を話したのだが、今話せば誠に簡單であるが當時は却々骨が折れた。

其他で苦心したのは大藏省に財政經濟年報と云ふものが出てゐるがあの年報に就ても私は大變に苦心した年報の第一卷は美濃部俊吉君後に朝鮮銀行の總裁をして居つた人だが、當時は大藏省の書記官をしてゐた。あの人に主として筆をとつて貰つたのであるが、最初英語で後に佛語、獨逸語と三ケ國語で出して貰つた。好く出來てゐて評判が好かつたものだが、あれが戰爭より四五年前に出てゐた。日露戰爭の時には既に第五回目が出てゐた。美濃部君に對しての私の註文は『何うしても日本の實際の財政經濟狀況を示して歐米の金融界の人々に普く知らしめなければ不可ない。それには何うしても確りした材料がなくては不可ないから君骨を折つて書いて呉れ』と最初私がプランを立てる時美濃部君に註文したのが、西洋人があれを大變賞めたのである。少しも自分の評論がなく事實だけを書いた。最初私が筆を取つて訂正したのは『非常に日本の貿易は景況がいゝ』と云ふこの『非常にいゝ』と言ふ言葉を削つて『貿易はこんなことになつてゐる』又『財

政上頗る順境』と云ふのは『頗る』を削つた。

斯やうにしないと宣傳と見て不可ないからで高橋さんが倫敦へ行つて、向ふで軍事公債を募る中に日本の財政は何うだらうと云ふ問題が起つた時には、何時でも日本の財政を信用せしめる證據になつた。私は四十一年に始めて倫敦に行つた時、日本の公債募集に應じた呉れた人に當時の模樣を聽いたところが『あなたの方には大變いゝものが出來てゐる。大きい財閥に勸める時に、日本の財政は何うであると聞かれるとこの通り大丈夫であると見せる。自分の所の秘書役に命じて調べて見たが、これは大變日本に都合のいゝものだが今度の戰爭の爲めに作つたものだらうと、皆が訊ねると『いゝえさうぢやない、古くから出してゐるものだ』と答へるので、直ぐに安心承知をした』と云つてゐた。

以上述べたやうに準備で頗る骨を折つた。それは何故かと云ふと前にも云ふ通り遼島半島還付の時に皆が泣かされた。これは何うしてもこの儘ぢや濟まん。今度の戰爭の時は非常に財政上腕を揮はなくてはならぬ。其時の財政に役に立つやう是非豫め運ばうぢやないかと云ふことで準備を進めた。又その他では印刷局造幣局が度々の行政整理、財政整理で歷代の內閣が縮小して遠幣局も規模の大きかつたものを小さくした。印刷局も小さくした。それを私が次官になつてから、印刷局と造幣局の工場を擴張した。いざ

天晴れお臺所が百年の計

滿鐵誕生に澁面作る山縣公

事のあつた場合に役に立たぬと思つたからである。ところが印刷局造幣局にさう云ふ準備をして置いてもいざ戰爭が來ると間に合はなかつた。公債證書を造つたり造幣局にしても貨幣を造るのに、却却手間がとれた。日本銀行でも交換する金貨が殆ど無くならんとする場合があり、製造力が足りなかつたのであるが、然し不足であるにしても兎に角以前の縮小した儘であれば非常に困つたのである。それを出來る限り擴張させて材料を準備させて置いたものであるから、凡てのことが順よくいつたのである。當時大藏省は次官が私で主計局長は荒井賢太郎君、主税局長が目賀田種太郎さん（後に若槻禮次郎君）、理財局長は水町袈裟六君、日本銀行總裁が前にも云つた通り松尾臣善さんであつた。

それから戰後の財政であるが、私は卅九年一月大藏大臣になつた。財政の整理は地租の增徵は期限が附いてゐたが、戰後に却々矢釜しかつたがその期限を延ばした。さうして財政の始末をしたが、一番骨を折つたのは鐵道の國有で、あれは何うしても國有にしなければ日本の商工業の發達上惡いと考へたので、時の總理大臣桂さんにも話をし桂さんの後をうけた西園寺さんにも話して鐵道の國有に就ての方針を決めた。其時分は逓信省に鐵道局があつて逓信次官は田健次郎君であつた。

私が三十八年の十一月だつたかに田君の所へ行つて『君、鐵道を國有にする氣はないか』といつたところ田君は暫く私の顏を見て呆れて居つた。それは田君の方で鐵道を國有にする案を立てゝゐたが大藏省が反對すると思つてよう云はずに居つた。鐵道を國有にするには公債を起さねばならぬ。ところが戰爭が起つて澤山公債を發行せねばならぬから大藏省が反對するだらうと思つてゐた。ところへ、私が國有にする氣はない

かと云つたので、田君開いた口が塞がらなかつた譯であつた。それで二つ返事で俺の方で云ひたい位だ。是非實行して呉れと云ふので、桂さんにも話をして戰爭が一年延びたと思へばいゝと腹をきめてやつたのであつたが、買收費は五億圓であつた安いものである。あの時鐵道を國有にしなければ非常に困る。今日では鐵道も黑字で鐵道大臣の内田さんが喜んでゐるさうだが、あの時は幹線十七本であつて十七會社に分れて居つたから、今日のやうな改良と云ふことはあの儘では到底出來ない。今鐵道會計は獨立して大藏省の厄介にならないでやつてゐる。大藏大臣が鐵道の益金を使ひたければ二千萬圓以上持つて來られる。

その次は滿鐵であるが、私の大藏大臣の時に組織を作つた。あの組織は英國の印度に對するインディアンコンパニーを參考にしたので、滿鐵と云ふものを作つて置けば何か事のあつた場合に役に立つと考へた。後に聞けば山縣（元帥）さんからなぜ勝手にあんなことをすると御小言が西園寺さんに出たとのことである。あの組織は一つの會社ではあるが、人材を集めて何もかもやれるやうな組織になつてゐる。それであるから昭和六年九月十八日滿洲に事變が起り、滿洲の人が獨立論を唱へ滿洲國が出來ても、直ぐに役に立つやうにあそこには數千人の滿洲言葉を話す人がゐる。法學士もゐる。工學士もゐる。滿鐵がなければ九月十八日に事變が起つたとしても、滿洲國の獨立は難しい。人材がゐないから、さうして人材は急に作ると云ふことは出來ない。今度滿洲國が獨立が出來て、少しも亂れることなく整然と出來た云ふのは、何故かと云ふに、人材があつた爲めだと思ふ。その人材はどこにあつたかといふと、張學良の養成した人材ぢや役に立たない。滿鐵で養成した人材があつたからで、駒井德三さんを初めそれらの人達が行つて民政部でも何でも入つて働

く、その後を內地から補充するのは譯はないのである。

私は二年程しか大臣をやらないが製鐵所事業にも骨を折つた。製鐵と滿鐵と鐵道の有等をやつた外に、東京と神戸に大きな港灣を造つた。港は當時どこの行政にも專屬してゐなかつた。港と云ふ統一した思想は閑却されてゐたので港の設備が一番遲れてゐた。港を改良して海陸の連絡をうまくつけぬと、東洋の中心は終に上海邊りに取られて終ふ惧れがあつたから、何うしてもこれをやらねばならぬと考へ、隨分無理をした。横濱も隨分大きいが神戸が又非敵に大きい。當時の築港計畫に對し一體何うするのですか、大阪があるのにいゝぢやないかと云ふ議論もあつて隨分私は或る方面から攻擊を受けたが、然し今日では大變役に立つて居るのである。鐵道の國有、製鐵、滿鐵事業、港灣の改築何れも夫々御役に立つて國運は益々隆盛に赴き芽出度い事であります。

募債苦心談

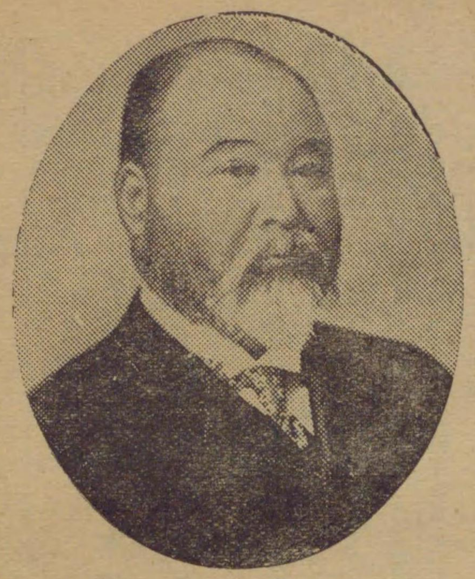
當時・日本銀行秘書役

日銀副總裁　深井英五

時事新報社で高橋大藏大臣に、日露戰爭當時の外債募集の回顧談を依賴された處が、高橋さんは話はしたいが議會中で暇がないからといふので、私に何か話をするやうに希望され、時事新報社も亦これに同意して私に依賴されたけれども、私は當時日本銀行の秘書役で、高橋さんに隨行し、其の下働きをしたに過ぎないから、自分のことでは勿論、何もお話すべき價値のある材料はない。高橋さんが儼然として健在で居られるのに、高橋さんのことを私が話すのも、甚だ出過ぎたやうであるから辭退したのだが、高橋さんも、時事新報社も、重ねて私に希望されるので、私の記憶してゐるだけのことをお話して見ようと思ふ。勿論高橋さんのされたことや考へられたことで私の知らないことが多くあらうし、また私がお話しすることで、高橋さんの見解や腹の中と必ずしも一致しないこともあるかも知れない。外に現はれた事實は勿論動かないけれども、感想とか、見解とかいふことになると全く私一個の責任として頂きたい。

日露戰爭の我國の戰費は、直接の分と間接の分とを合して、約十七億圓と計算されてゐる。然るに當時政

府の歳計は三億圓見當で、日本銀行の正貨準備は一億五百萬圓、兌換券發行高が二億圓臺を往來してゐるといふ。さういふ小さい世帶の中で、十七億圓もかゝる戰爭をしたのだから、何うせ公債が必要であつたことは申すまでもない。そして戰爭をするには、外國から買はねばならない物も多くあるのだから、外債募集が必要であつたことも明白である。殊に、その頃はこのごろのやうに貨幣制度を粗末にする考へはなかつた、貨幣制度は出來るだけ維持しなければならない。これを破壞するといふことは國の信用、聲望を墜すものと考へて居つたのだから、今言つたやうな小さい世帶で大きな戰爭をしながらも、なほ兌換停止もせず、爲替管理もやらずにゆかうとした。事實之を遂行したのである。その點からいつても大に外債募集が必要であつた。



一九〇五年紐育で寫した高橋翁（深井氏所藏）

そこで戰爭が始まると間もなく、高橋さんが、外債募集の任務を以て出張されることになつた。當時高橋さんは日本銀行副總裁だつたが、あちらへ行つてから肩書が入用になつて「日本帝國政府特派財政委員」といふ資格を與へられた。

明治三十七年の二月二十四日に出發されたが、その時、井上馨侯が横濱まで見送られ、横濱正金銀行の社宅の樓上に於て午餐會があつて、その後で盃をあげて高橋さんの健康と使命の成功を祈られた。その時に井上侯は「あなたの使命の成功すると否とが我國の運命に懸ることが多いのだから御奮發を願ふ」といふやうな意味のことを言はれたが、これが高橋さんの任務の意義を簡單に現はす代表的の言だつたらうと思ふ。井上侯は感激性の人だから涙をポロ〳〵とこぼされた、同席の人々も暗涙を催した。

で、高橋さんはその前に正金銀行の役員として外國を巡られたことがあるので、英米の金融界には知人もなか〳〵あり、其外に從來日本政府の外債に關係した人、又は日本銀行及び正金銀行の業務上の關係者も方方にあるから、さういふ人達と先づ接觸して任務を果す端緒とするつもりで居られたやうである。しかし、外債募集の任務を以て行くとは全く言はれずに唯自分も大分長く外國を見ないから、一般的の視察をして來ようと思ふのだといふ風に言つて居られた。

米國に先づ到着したが、當時は米國では、まだ外債――外國の公債に應じたことは極く少く、さういふことにはまだ米國の金融界が熟してゐなかつた。それで極く淺く接觸し、その間に測量をされたのでせうが、米國は其時、直に日本の外債募集の相談に應ずるやうな空氣でないといふ結論に到達したものゝやうで、米國はアツサリ引揚げて英國に行くことになつた。

四月の初に英國に到着された。そこで先づ舊知の人々に挨拶旁々接觸されたことは勿論であるが、使命であるところの外債募集の相手として何ういふ方面を選ぶべきかといふことを深く考へられたやうである。處でこの問題は二つに分れるので、英國の金融界に於ける最も有力な筋に向つて直ちに交渉を試むべきか、そ

れとも英國には高橋さんの知人もあり、從來日本政府に金融の世話をした關係の人もゐるのだから、さういふ方面に向つて相談をすべきかといふことになる。

そこで高橋さんが日本を立たれる前に、日本に來てゐる英國の公使でマクドナルドといふ人が高橋さんに「金融界のことは、あなたの方がよく知つて居るだらうし、私はさういふ方には知人も餘りない。唯、しかし私の友人で英國の社會及び經濟界の情僞に通じてゐる人がある。但し金融界の人ではないが、さういふ人にまた何か聞いて見て役に立つことがあるかも知れぬから紹介して上げよう」といふことで一通の紹介狀を與へられた、その人の名前はよくは記憶しないが確かマツケンヂーとか云つたやうに思ふ。

その人に高橋さんが會はれていろ〳〵と話を聞かれた、その人の意見は―最も有力な方面に向つて先づ交渉をすると、その方面で滿足な結果が得らるれば宜いけれどもさうでない場合に轉じて他の方面に向つて交渉をしてもモウ出來ない。だから最も有力な方面に先づ交渉すれば、結局向ふの言ふなり放題の條件に從はねばならぬことになるかも知れぬ。だから寧ろ從來の緣故の方があるならば、先づその方面に出來るだけ交渉を盡して談を進める方がいゝだらう。さうすれば、これて滿足出來なかつた場合には轉じて一層有力な方面にゆくといふ餘地が殘つてゐるわけだから、マーさうした方が宜いだらう―といふことであつた。それで高橋さんも大體その方針を以てやられたやうだつた。

大骨折りの狆ころ献上

渡英高橋翁が腹藝こそ深刻

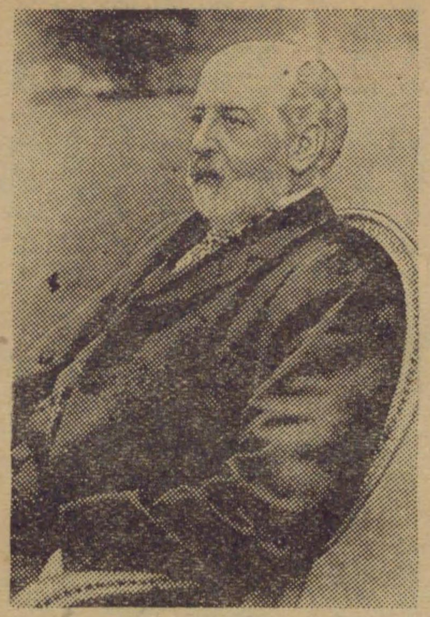
家であるところのサー・アーネスト・カツセルといふ人である。カツセルといふ人は自分では店をもたない人だが、方々の國の財政の整理や、或は公債の募集等に助言をし且つ自分の財力を持ち、また自分と親善な店を表面に立てゝ大きな仕事をする人であつた。ロスチヤイルドは有名な舊い金看板の家で當時に於て最も勢力のあつたのはこのロスチヤイルドとカツセルと二人であつたが、高橋さんは兩家とも社交的に接觸され頻々と往來された。其外にベーリング兄弟商會と云ふ有力者が高橋さんの接觸圈内にあつた。そして一般の形勢についての話は聞き、また話もするけれども直接、公債募集の要務の話には最初からは入らなかつた。しかし社交には非常に努められた。

例へばロスチヤイルド家の或る人が白い藤の花の盆栽が欲しいといふので、大變な苦勞をして取り寄せて贈るとか、或はカツセル氏が英國の皇后陛下は狆がお好きだから献上したいが、日本の狆の番が欲しいものだといふので、それを取り寄せて贈つたが、狆を取り寄せるのは大變な手數のかゝることで、飼育者まで一緒につけて送らなければ印度洋は渡れない、途中で死んでしまふから、狆を二番送るのに確か三千何百圓かかつてゐる。さういふ風なことをし、また先方からも大變鄭重に招待され別莊に客として泊られたりなどし

最も有力なる方面といへばロスチヤイルド家と、それから當時國際金融上の大變な有力

た。カツセルは狆の禮と云ふ心持であつたらしく、英國の一友人と云ふ名を以て高橋さんの手を經て狆の費用より遙に多い金額を日本の慈善事業に寄附し、そして其寄附先を高橋さんに一任したりした。

かやうに社交的には隨分親しく接觸して居られた。さういふ連絡をつけて置きながら公債の直接の相談は從來日本政府の外債の世話をしたことのある銀行、即ち香港上海銀行とパース銀行に向つてやり、それに横濱正金のロンドン支店を加へ、この三行を發行者とするといふ風に相談を進めてゆかれた。ロスチヤイルド家はズツと後になつてから或る事情によつて、發行者の中に名を掲げることになつたが、カツセルは表面にはその名を出さず、たゞ外が行き詰まつたら私の所へ來て相談するようにと言つて居つたさうである。高橋さんの公債募集の折衝の背景として、一貫してかういふことが存在してゐたといふことを記憶すべきであると思ふ。



ロスチヤイルド卿
〔高橋氏所藏〕

その當時の英國の空氣は何うであつたかと云ふと、日本に對して同情は大變にある。また日本と同盟をした位だから。日本の成功を希望したには違ひない。しかし、あの同盟は、御承知の通り戰爭の相手が一國である時には援助する義務はない。相手が二國になつた場合には共同參戰すると云ふのである。それだから日露戰爭の場合に於て英國は日本の同盟國であつたけれども、矢張り中立國であつた、さういふわけで同情は頗る深厚であつたが、公債引受といふことになれば、中立違反ではないかと云ふ問題も起つた。それは間もなく解消したけれども、公債の引受は矢張り商賣である。それで向側の或る關係者はかういふことを言つた——今ロシヤと日本が戰をしてゐるが、ロシヤに金を貸すのは恰も土地を擔保にして大地主に貸す樣なもので、どんな拙いことがあつても擔保に取る土地だけは殘るわけだが、日本に金を貸すのは有望な學生に學費を貸してやるやうなものだ。將來は大いに有望かも知れぬが、中途でポツクリ倒れたらそれつきりだ——これが商賣の見地から日本に對する見方の代表的のものだらうと思ふ。

それから今一つ、日本に同情はしてゐる。また成功も希望するが何うも人種の關係からいつて、東洋人種たる日本のために、他に伴れがあれば宜いが、獨りイギリスだけが大變に踏み込んで日本を援助するのは、何だか氣恥かしい。同人種たる他の國に對して氣恥かしいといふやうな氣分もあつたらしい。

かういふわけで同情は厚いが、さて外債の話になると、從來の緣故者は出來るだけ盡力すると云ふだけで、具體的の話は餘り進まない。高橋さんは、日本が戰爭に勝つ自信のあることゝ、戰爭後には經濟的に大いに發達する望みがあるといふことを以て說かれた。無論、同情に訴へるといふことも、或る程度に於てされたに違ひないけれども、憐を乞ひ、援助を求めるといふ風に出ないで、地步を占めて相手方を說くことに餘程注意して努められたやうに私は思ふ。

ところで、だん〳〵話をしてゐるうちに、向ふも出來るだけ盡力すると云つたからには何とかせぬ譯にはいかなくなつたと見えて「何うも今こゝに大きな日本の公債を出して見ても、果して應募者があるかどうか分らぬから、まあ百萬ポンドから三百萬ポンド位の間の小さい額を短期の大藏省證券といふやうな形のもので出して、若しいけなければその位のものなら關係銀行が當分自分のふところに背負ひ込んでもいゝ、それで樣子を見よう」といふのである。

けれども百萬ポンドや、三百萬ポンドでは、如何にその當時の日本の世帶が小さいとはいへ、ロシヤを相手にして戰爭して居つて、そんな僅かばかりの金を借りる必要があるのかといふやうに見られては却つて不利だから、そんなことぢや困るといふので、いろ〳〵相談した結果、漸く四月二十日頃になつてかういふ相談が一應出來た。――日本政府のため一千萬ポンドの公債を發行するといふ計畫を公表する。但そのうちの半分、五百萬ポンドだけをこの際發行するといふのである。つまり一千萬ポンドといふ表看板を出して、實際は五百萬ポンドだけ差當り出さうといふわけなのだ。そこで、こちらもマーそれなら仕方がない、宜からうといふので、略大體の骨子が決まり、その手續が進行しかけた。

さうすると四月の何日だつたか、二十日以後で大分月末に近づいた日であつたと思ふ。米國の方で、殘りの五百萬ポンドを引受けてもいゝと云ふ人が出て來たと、英國の方の關係者から內話があつた。高橋さんはそれは大變結構なことだが米國側のことを日本の方で直接に調べる遑がないから、英國側で責任を以て米國側と共同するならば宜しいと云はれた。米國側の引受者は、紐育のクーン・ローブ商會と云ふので、爲

替銀行たる香港上海銀行は其の名を好く知つて居たが、倫敦の市中銀行たるバース銀行は多少躊躇した。倫敦の一流個人銀行にして國際金融に關係あるベーリング兄弟商會に就て、調べて漸く安心した樣である。それで日本政府は英國側と契約し。英國側から米國側へ半額を讓り渡すと云ふ仕組となつた。

米國側が出て來たからと云つて、咽から手を出すやうに飛び付いたのではない。英國側かういふわけで米國も、

戰勝の報にスタートよし
第一回英貨公債俄然大もて

に責任を持たせて日本政府の立場を安全にするの用意を高橋さんは忘れなかつた。

入れて、そして一千萬ポンド約一億圓を直ちに發行することに模樣變へになつて、その條件を尙ほ細かに決める手續が進行しつゝあつた。

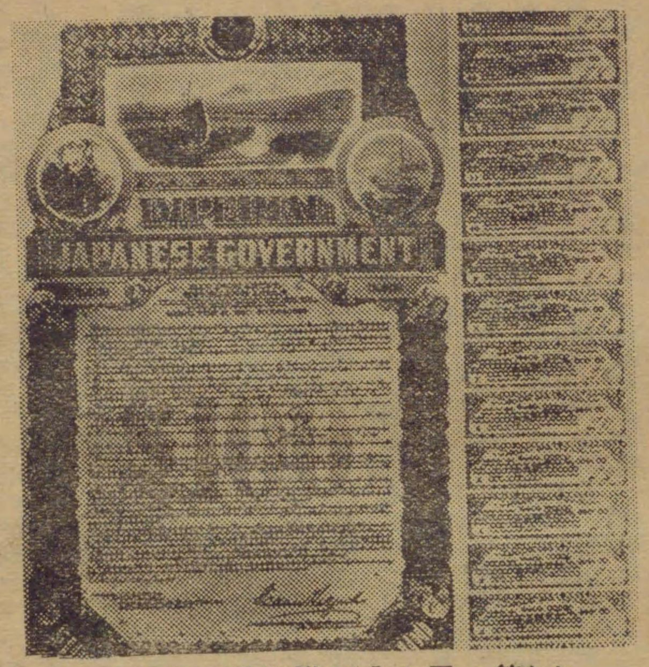
そこに五月一日の鴨綠江の戰勝の報道が來た。それで五月七日に正式の調印をして、それから本邦で發行規程の公布があつて、十一日に募集を開始した。これがいはゆる「第一回六分利附英貨公債」なるもので、起債額は一千萬ポンド約一億圓、これを英米均分で出す。發行價格は九十三ポンド半、期限は据置が三ケ年償還義務の到達する期間が七ケ年、短期公債で關稅收入を擔保とすると、かういふ形で出した。英國に於ける發行者は前記の三行、米國ではクーン・ローブ商會を首とし、其外にナショナル・シチー銀行とナショナル・バンク・オブ・コムマースが發行者として名を掲げた。尙表面の發行者の外に多數の下受者があつて、

倫敦ではロスチヤイルドもカツセルも相當多額の下受をした。

ところが大變な景氣で直ぐに發行價格以上の市價を現はすやうになつた。それでこれに對する日本國内の批評といふか、見方といふものは、鴨綠江の戰勝が五月一日で、公債の發表になつたのが十一日だから、これは鴨綠江の戰爭に勝つたが故にこの外債が出來たのだといふ說と、それから出して直ぐ市價が發行價格以上になつたのは要するに條件があまり甘過ぎたのだと、かういふ說が當時すぐに起つたやうである。

けれども五月一日の鴨綠江の戰勝の報道が到着するのは何うしたつてその翌日になるが、それから相談を始めても、最初のことだから細目の手續も考へて定めなくてはならぬし、到底五月七日に調印することが出來るものぢやない、殊に英米にわたつてゐるからロンドンとニューヨークの間でもいろ〳〵な取決めをしなければならぬし、日本では大藏省令を出す手續をしなければならぬが、さういふことは到底咄嗟に出來るわけはないので、前からやつて居つたことが恰度鴨綠江の戰勝にぶつかつたといふわけである。その時分はまだ戰爭の豫想なんか特派財政委員の所に詳しい報告はなく、たゞ急いでやれ急いでやれといふ電信が來るだけのことで、高橋さんの方も狀況報告なんかは餘りしない、何か政府の承認を求めねばならぬやうなことがあると電信を打つたけれども、日々の狀況報告なんていふことは餘りしなかつた。

さういふ風であつて鴨綠江の戰爭が迫りつゝあるといふことは新聞電信で想像は出來たが、いつ何ういふ結果になるかといふことは的確に知るべき便宜なくして、たゞ急いでやれ、急いでやれと云ふから出來るだけ急いで相談して、内容の骨子は略決つてその手續をいろ〳〵やつてゐる内に鴨綠江の戰勝があつたといふことになる。また、この戰勝が公債の景氣を出すのにあづかつて非常に力があつたには違ひない。けれども大勝利を得たからと云つて、既に諒解濟みの條件をまたこゝでやり直すと云ふやうなことは、それは國庫の負擔は幾らか減じ得るかも知れぬが、さういふことでは時機を失するし、將來の募債の爲めに氣受を惡くするから、そんな小細工はすべきものでない、そのまゝの條件で進まれた。



◇◇第一回六分利附英貨公債◇◇

殊に、も一つ高橋さんが根本的に考へて居られたらうと思ふのは、募債が一遍きりではなく、今後何遍もやらねばならぬかも知れぬのだから、條件を有利にして國庫の負擔を出來るだけ少くするといふことは無論考へねばならぬが、その方に餘りゆき過ぎるよりも日本の公債をもつた人は結果が良かつたといふことになつて、將來に募債の可能性を永く維持する樣にすることが必要だと、この兩方面をよく考へられたやうであ

る。それから擔保のことであるが、これは初めは何ういふつもりで向ふは言ひ出したか知らぬが、矢張りトルコや何かに對するやうな、擔保たる關稅の管理をするといふやり方でゆかうとしたらしいがさういふことには到底日本は同意し得ないので、關稅收入を擔保にすると云つても、公債の元利は日本政府が一般資力を以て拂ふので、その利子を拂ひ元金を拂へば關稅に手をつけるのでも何でもなく、たゞ政府の一般資力を以拂ひ得なくなつた時には、關稅收入を先づ以てこの公債の元利拂ひに向けるといふだけで、契約にはチャントさういふことが書いてある。

それからアメリカが途中から入つて來たといふことを先ほど申したが、その當時の申出者はクーン・ローブ商會の首長シツフといふ人である。このシツフ氏との關係につき日本に傳はつてゐることは「シツフ氏が或る宴會の席上で高橋さんと偶然に會つて高橋さんに說かれ、その一夕の話により感激して日本の募債に參加した」と。かういふ風に傳へて居る向もあつて、大變面白いけれども、それは餘りに小說的である。事實は後にだん〳〵方々から聞いたり、シツフ氏自身からも聞いて見たのだが、なぜアメリカが參加するに至つたかと云ふと、この日露戰爭の少し前にロシヤ政府がユダヤ人をロシヤ國內で非常に虐待したことがあり、シツフ氏自身がユダヤ民族の人だから非常にこれを憤慨して居つた。そこへ日露戰爭が始まつたので日本の勝利を希望したが、しかし商賣人だから全く算盤をはなれて、義俠的に參加する謂はれもないのである。

ところが、このシツフといふ人は大變に聰明な、よく先の見える人で、當時アメリカの金融界に於ては日の出の勢ひで、太平洋岸から大西洋岸に橫斷する鐵道の整理につき大膽な金融をして大成功して居り、金融界ではモルガンが第一位に居るけれども、シツフ氏もモルガンと雁行するやうな勢ひで進んで來つゝあつたそして何でも新しい方面に着眼して自分の業務と勢力を擴張しつゝあつた人だから、矢張りアメリカも既に外國投資にゆくべき時機になつてゐるのぢやないかと、早くも着眼をしたものであらうと思ふ。

それから、も一つは前に申したカツセルといふ人が、シツフ氏に日本の外債に參加することを勸めたものらしい。カツセルといふ人は英國の皇室から大變に寵遇を受けてゐる人で、エドワード七世とは非常に親しく接近することを許されてゐた人である。そのカツセルから勸められたといふことである。英國では日本の公債を引受けるに成るべく單獨でなく、どの國かと共同にやりたいと云ふ氣分の濃厚であつたことを思ひ合はすれば、此間深長の意味が看取せられると思ふ。

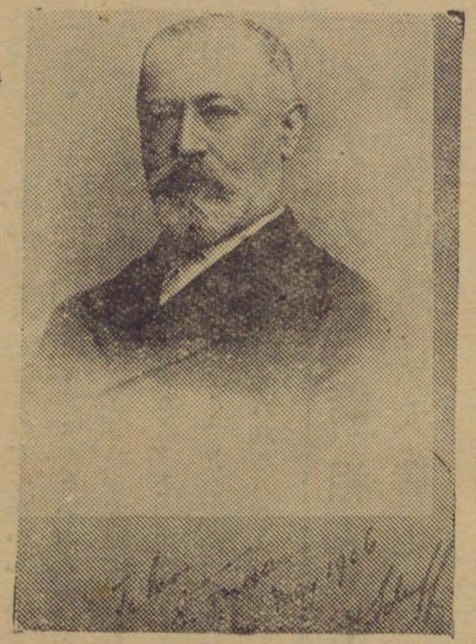
シツフ・高橋相會ふまで

遼陽に大勝し邦債下落とは！

アメリカへの歸りがけにロンドンに足を留めてゐる時に、日本の外債募集の話を聞き、そして今言つたやうに、無論算盤も採つたには違ひないが、しかし同時にロシヤに對する憤慨もあり、カツセルから勸められて動き出し參加するに至つたものらしい。

尤も、四月の末頃だつた。或るH高橋さんは、或る宴會でシツフ氏と一緒になり、並んで食卓についたとさういふ三つの理由で、シツフ氏の深く考へた結果だらうと思ふ恰度、大陸旅行に來て

いふことがある。その時に高橋さんはシツフといふ名前をハツキリ聞き取れなくて、シツプレーといふイギリスに名の有る金融家があるから、そのシツプレーといふ人だらう。兎に角この際だから一人でも多く話して置くが宜からうと思つて、問に答へて日本の事情を説明するに努めた、けれども直接に外債談には及ばなかつたさうである。それで後からアメリカが參加するといふので、何ういふ人かと訊くと、シツフといふ人だと云ふので、それでは先夜シツプレーといふ人だと思つて話をしたが、或はその人かも知れぬと云ふやうなわけだつた。シツフ氏は高橋さんから直接日本のことを聽いて打算の材料を得て參加することになつたのかも知れぬが單に高橋さんに説かれて、感激したと云ふよりも更に深い事情があつたやうに思ふ。



シツフ氏とその署名〔深井氏所藏〕

そこで、シツフ氏はこの日本の公債の調印が濟むと、程なくアメリカに歸つて行つたが、その前にカツセルと同伴で英國皇帝に内謁見して午餐を賜つた其後間もなく日本公債の發行銀行の一つであるパース銀行のシヤンドといふ人が。高橋さんの所へやつて

來た。この人は高橋さんが維新前に横濱で大變世話になつた人で、たま〳〵パース銀行に行つて取締役になつてゐた。それで「高橋さん係り」といふものになり銀行から直接高橋さんに言ひにくいやうなことは、シヤンドに言はせるのが一番いゝと云ふやうな關係で、毎日のやうに來て意思の疏通を圖つて居た。そのシヤンドが來て「今度アメリカが參加して一千萬ポンドが悉く發行出來て誠によかつた。ところでシツフはこの間、皇帝陛下から午餐を賜はつて近々中に米國へ歸るので、あなたに會ひたいと云つて居る……」とかう云ふのである。つまり英國皇帝から厚き待遇を受ける程の人だから、高橋さんの方から訪問してもよからうと云ふ含蓄である。

すると高橋さんは「それは我輩にシツフ氏を訪問しろと云ふ意味か」と質した。ところがシヤンドはとても言ひにくいやうな顔をして、モジ〳〵してゐたが「さうだ」と肯いた。そこで高橋さんは儼然として「シツフ氏の好意と盡力は大いに感謝して居る。しかし自分は日本帝國政府の代表であるから、若しシツフ氏が會ひたければ、先づシツフ氏の方から來なければいかぬではないか」と言はれたので、シヤンドはコソ〳〵と逃げるやうに歸つてしまつた。そしてシツフ氏が高橋さんの所へ訪ねて來たので、それから高橋さんが答禮に訪問したといふわけである。

話しの調子でシツフ氏の名を先きに擧げたが、此の公債の爲に盡力した英國側の主なる人々は、香港上海銀行に於てサー・トマス・ジヤツクソン及びサー・ユーエン・カメロンの二氏、パース銀行に於てタン及びホワレーの二氏である。其後國際金融上の大立物となつた香港上海銀行のサー・チアールス・アヂスはま

だ副支配人級で地位相當の仕事をした。表面の發行銀行團に加はらないで裏面で盡力した人には、ロスチヤイルド家とカツセルとの外にベーリング兄弟商會のレヴエルストーク卿がある。株式仲買人ではあるが、有力なる緣故が多いので市場の空氣を觀測し、之を利導することに功のあつたのはペンミユール・ゴルドン商會のコツホ氏である。正金銀行では取締役兼支配人の山川勇木氏と、副支配人の巽孝之亟氏とが、高橋さんの側と發行銀行團とに跨つて居た爲めに頗る便宜であつた。

かうして第一回六分利附の募集は濟んだ。まあよかつたと思ふと直ぐ後から追つかけて「まだなか〳〵金がいるから、もつと募集しなければならぬ。そのつもりでやれ」といふ電信があり「直ぐ次を頼む」といふ政府からの命令が來た。政府の方もだん〳〵なれて來たものだから情報が上手になつて、八月のいつ頃かに旅順口を砲擊して陷落せしむる見込みがあるから、その機會に於て第二回の募集を試みろといふのである。それで今度は戰爭の方と募債の方と連絡がついて來たわけである。ところが待つてゐるけれども、なか〳〵旅順は陷落しない、そのうちに旅順攻擊が失敗したといふことも新聞に出た。それから、だん〳〵日が經つて九月四日に遼陽の占領があつた、そこで「遼陽に於て大勝利を得たから、この機會に第二回の募集をやつたら何うか」といふ電信が來た。

ところがこの遼陽戰爭の報道が來ると、五月に發行した第一回六分利附の市價がだん〳〵下り出した。それは何ういふわけかと云ふと、遼陽の戰爭といふものは日本は勝つたに違ひないけれども、ロシヤはこれを退却と稱して軍の損害は極めて少なく單に戰略上後に退いたと云ふのである。そこで英國の人々は「こいつは、いよ〳〵持久戰だ。一氣に片づけてくれゝばいゝが、持久戰になつては仕方がない。持久戰になればロシヤの力が大きいから强い。日本が仕舞にはへこたれるだらう」といふ觀測をしたものだから、公債はどん〳〵下り出したわけである。又米國の外債消化力は充分でなかつたと見えて、少し景氣がわるいと米國に於ける市價が先づ下り、英國の市場が之に引つけられると云ふ事情もあつた。

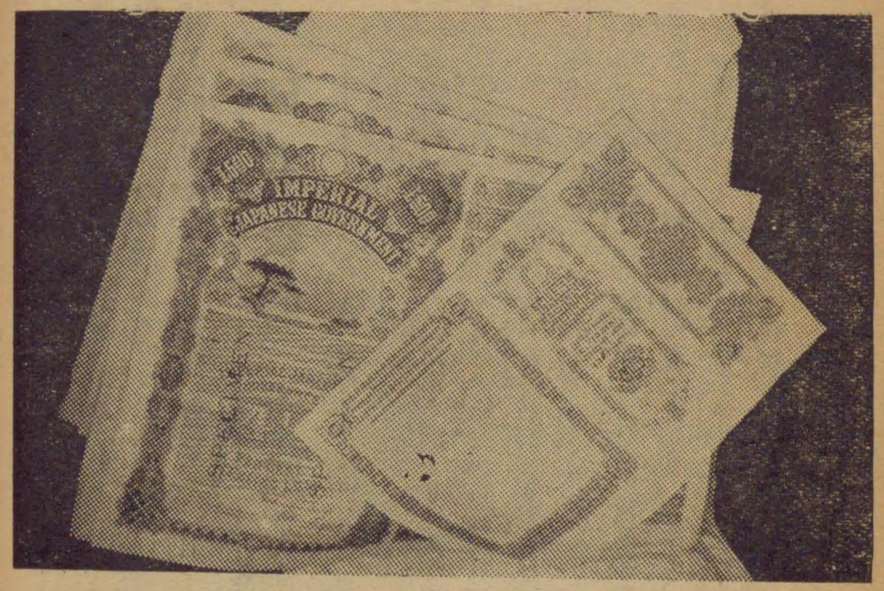
日本政府、千三ツ屋を誤信

―たか橋を渡りて聞かん雁の聲―

試みたが市價が下つてゐる時だから前よりは大變條件が惡い。そこで高橋さんが「今やれば、かう〳〵いふやうな條件だ」と云つてやると、政府からは「それは怪しからぬ、五月の第一回の時でさへあの條件だつたから、その後連戰連勝の今日條件が前より惡くなるといふことはあり得べからざることだ。五月の時よりも好い條件でやれ」と云つて來る。

それと同時に鴨綠江の戰爭後は、種々の方面から仲介人見いなたやうな連中が、ロンドンの高橋さんの所へも來るし、日本に電信を打つものもあり、日本にゐる誰かを使つてやるものもある。そして「私はかうかういふ筋に聯絡があるから私の手で公債發行を引受ければこれこれの條件で出來る」といふやうなことを云つて來る。さういふ連中は無責任だから大變好い條件を持ち出すので、事情を知らぬと初はちよつと引かゝかる

しかし、日本國内の方からは、この機會に第二回をやれ〳〵と云つて來るので、相談を



トントン拍子に出來た第一回四分半利附英貨公債

のである。かういふブローカーは戰爭が始まると直く出て來たが、鴨綠江の戰爭後からますます多くなつた。さういふものが、いろ〳〵な緣故をたどつて、うまいやうな話を持ち込んでゐる。然るに高橋さんの方では五月のものより條件が惡いと云ふものだから、それは怪しからぬといふわけである。

しかし市價が下つてゐるのだから何うしても仕方がないぢやないかと云つてやつても、をかしい話だが意思が疏通しない。とにかく日本はその後連戰連勝だから條件も前より好くなければならぬと云つて來るので、高橋さんも仕方がないので「こちらは市價が安くなつて居るのだから何うにもならぬ、それではこの際は見送るがよからう。かういふ時は寧ろ見送りの態で居り、財政委員は一旦歸國した方がいいかも知れぬと思ふ」と云つてやると「それはいかぬ。自重して居れ自重して居つて何か名案を考へろ

そして出來るだけ早くやれ」と云つて來た。そこで「名案出ず、自重するのみ」といふ短い電信を打つたことのあるのを私は覺えてゐる。毎日の公債市價を日本に電報することも其の頃から始まつた。何しろ電信料節約と云ふ貧乏氣質で御互に情報は不充分であつた。

さういふことをして居つたが結局、日本では金がいるのだから何うも高橋さんの云つて來る條件は怪しからぬが已むを得ぬ、といふことに決まつたらしく、十一月十四日に第二回の六分利附英貨公債の發行をすることになつた。今度も英米で半分づゝ、總金額は千二百萬ポンド、約一億二千萬圓で、これは關稅の收入を計算して見ると、恰度前の千萬ポンドの外に千二百萬ポンドだけ募集する餘裕があるので、計算上これを極度に利用したわけで、かういふ端數のついた金額になつたのである。それから發行價額は前のは九十三ポンド半で行つたが、今度は九十ポンド半に下つた。他の條件は同じやうなもので、三ケ年据置で七ケ年償還といふ短期であつた。

第一回のときは戰爭外債の皮切りをするので、相手方を說得するのが最も面倒であつたが、この第二回の時は出先の事情を國內で諒解して貰ふのに大分苦しまれたやうだつた。向ふでも持久戰の成行を懸念するとは云へ、既に一億圓を日本に貸した後だから、之を擁護する爲めに次ぎの外債も世話をしなければならぬ。只問題は條件の如何にある。何しろ所謂連戰連勝の後にあつて、前よりも惡い條件でやらねばならぬので、相手方に向つては出來るだけ條件を好くすることに努めると同時に、日本に諒解してもらふのに大變に骨が折れたらしい。

そこで第二回の募集が濟み一旦歸ることになり、三十八年の一月初めに、横濱に着いた。入港して檢疫停船中に、數日前旅順が開城されたといふことを聞いた、其頃はまだ無線電信が行き渡らないので、航海中陸上のことはさつぱり判らなかつたのである。歸つて來て總理大臣、大藏大臣、松方公、井上侯はじめ各方面にいろ〳〵報告され、それまでの判らなかつた事情が要路の當局者にはよく判かつてさういふわけだつたかといふことで、大いに諒解が得られたさうである。然し世上高橋さんに對する非難は仲々解消しなかつたやうである。

そして直ぐにまた明治三十八年の二月十七日に、なほ公債がいるといふので再び出かけられた。其時も井上侯は横濱まで送られて「よしあしの中にかけたる高橋を渡りて聞かんかりがねの聲」といふ歌を寄せられた今度は桑港からニューヨークに行く汽車の中で奉天戰勝の報を受け取つた。ニューヨークに着くともうそれは大變な景氣だつた。諸方面から日本の公債を引受けたいと云つて來る東京からも、「かう〳〵いふ所から申込んで來てゐるから參考のために知らせる」といふやうな電信が來る。まるで引張凧になつたわけだ

併し、高橋さんに當初日本の苦しんで居る時に公債を引受けて呉れた從來の關係者に先づ以て相談し、其の方面で妥當の條件が得られなかつた場合に、初めて他の申出者と交渉すると云ふ方針を以て應接されたやうである。新たな申出者中最も注意すべきものは、英米獨に跨りニューヨークにも店を持つ金融界の某有力者と、直接にドイツ側を代表する人からの申出である。その人々がドイツで日本の公債に參加する希望をもつてゐるから、何うか考慮してくれといふのであつた。日本公債の引受者が國際的に擴がることは外交上

からも大に望ましいので、高橋さんは之に對して愼重の注意を拂はれた。然し從來の關係者を差措くことは友誼上不得策であるから、現在は從來の關係者を重んじて、將來の爲めに地歩を留保するやうに仕向けられた。

即ち從來日本のために盡力してくれてゐる人達があるのだから、さういふ人達をおいて他に相談することは出來ない。又從來の關係者の希望に反して新らしい引受者を割込ませる譯に行かない。それに今度は非常に早くことが進むだらうと思ふから、範圍を擴げるといふやうなことは難かしいかも知れぬが、しかし將來の場合には考へて見ようといふことにして、向ふの好意は謝して置かれた。そしてニューヨークのンツフ氏は是れ亦、ドイツ系の人でドイツに非常に緣故のある人だから、アメリカの引受分のうち幾らかをドイツに持つて行つて賣るようにしようと言ふので、さういふ程度のことは出來るだらうが、ドイツの正式參加はこの際は難かしいといふやうなことに先方の諒解を得た。

かういふ風なわけだつたから。今度は英國に着くと從來の關係者側が船まで人を出して公債の引受を申込む。するとまた外でもやりたいといふ人がある、といふ工合で、一瀉千里に出來てしまつた。これが三月廿八日に發表された第一回四分半利附英貨公債である。これは全く奉天戰勝のお陰で格別の苦心もなく一瀉千里に出來た。金額は三千萬ポンド、約三億圓で英米均分であるが米國の分のうち幾分かをドイツに賣る。發行價格は九十ポンドで、期限は明治四十三年まで据置き、償還は明治五十八年、西暦でいへば一九二五年で、今度の煙草專賣の純益を前回と同じやうな意味に於ける擔保にするといふことになつた。細かい手續上に

於て日本政府に有利となるやうに條件の改められた點もある。それに關し高橋さんの出された原案に異議を云ふものもあつたが、高橋さんは之を一蹴し去つた。他の同席者はそんな細いことは、どうでも好いではないかと云ふので原案通りに極まつた。

三億圓募集とその樂屋裏

講和談判開幕に睨みを利かす

これで三億圓は出來たわけだからマアこれでよからう。今度はもう一旦歸つてもよいだらうと云ふ風に考へて居られたところが、日本政府では日本に歸るか何うかは別としてアメリカまで行くことはよろしいといふので、アメリカに行つたが、五月の日本海々戰の報道はボストンにゐた時に聞いた。さうすると日本海々戰の後いくばくもなく、もう三億圓募集したいのだから盡力しろといふ命令が來た。それが恰度ルーズヴェルト大統領の斡旋によつて、講和談判の端緒が開きかけた時分であつた。これは要するに講和談判にかゝるのには和戰兩樣の備へを以てしなければならぬ、若し談判が成立しなければ戰爭を繼續するの用意があることを示さねばならぬ。そのために金を拵へて持つてゐる必要があると、かういふ譯であつたさうである。

是れは主として小村外務大臣の希望であつたと云ふことを後に聞いた。高橋さんは恰度アメリカに居られたのだから、アメリカ側の人とは直ぐに相談する。英國側には電信でするといふやうにされたが、英米ともなか〳〵難かしい。何しろ三月に三億圓出來たその拂込みもまだ濟まない。前の分の拂込みも濟まないのに直ぐまた新たに募集をするといふことは餘り例がない。それから、講和談判もまさに開けんとする形勢であるのに、更に日本の公債に應募するといふことは日本のために戰爭の繼續を援助するやうに見えて甚だ拙いところから、「いけない」とは言ひ切らないけれども、餘程むづかしいと英米とも云ふのである。

獨人マツクス・ワープルグ氏（高橋氏所藏）

そこで、高橋さんはシツフ氏を動かすべく非常に熱心にいろ〳〵懇談を試みた結果、たうとうシツフ氏が何とかやつて見ようといふことにまで話が進んだ。これはドイツが前回に參加を申し込んで來た際、この次には考慮しようといふことにして置いた關係と、殊にシツフ氏がドイツ側と非常に親密な關係にあるから、それを利用して參加せしむれば、何とか出來るだらうと考へられたらしいが、これは高橋さんの熱心な膝詰の懇談の效果が大に與つて居ると、私は思ふ。それで大變に肝膽相照すやうな關係になられたもので、それまでは一通りの仕事の上の相手方に過ぎなかつたが、シツフといふ人に對し、高橋さんはこの時から

この時以來兩方とも眞に親しい友人の關係になられたやうである。

それで、アメリカの方をそれだけ固めてロンドンに行かれてそこで相談をしたが、既にアメリカで下ごしらへが出來てゐるものだから、ロンドンの方でも自分の方は出來ないとは何うしたつて言へない立場になつて、英國も無論一生懸命やるといふことになり、それからドイツも一緒にやるといふことになつた。

そこで七月十一日に第一回四分半利附英貨公債なるものが發表された。小村侯がポーツマスに向つて日本を出發せられたのが七月三日であつたから、小村侯はアメリカに船で着かれた時、この講和談判に一つの道具として希望されたところの公債が出來たといふことを、直ぐ聞かれたことだらうと思ふ。

それで、この公債の條件はほゞ第一回四分半利附の通りで、金額は三千萬ポンド約三億圓、英、米、獨が均分に一千萬ポンドづゝを引受けることゝなつた。此の公債募集はシツフ氏を決心させるまでに非常に骨が折れた。シツフ氏を說き落してからは餘程樂だつたけれども、それまではなか〳〵難かしい問題であつた。獨逸は前回からの行き掛りもあり、新興の日本の爲めに一口乘つて置くといふ政治上の動機もあつたものから、先づ紐育のシツフ氏と種々の打合があり、次で正式に英國側と交涉することゝなつて參加したのである。內面の工作に最も盡力したのはシツフ氏と、親類關係のあるハムブルグの個人銀行家マツクス ワーブルグ氏で、獨亞銀行を首とし有力銀行を網羅せる發行銀行團が出來たのである。

それから暫くしてフランスの方からパリーの株式取引所の理事長でヴエルヌイユといふ人がロンドンに來た。そして前に擧げたロンドンの仲買人コツホの紹介によつて高橋さんと會見して、そして「フランスはロ

シヤと同盟國であるから、日露戰爭中は何うも日本の公債に應ずるわけにはゆかぬ。けれども戰爭もだんだん濟みさうに見えるから、戰爭の濟んだ後にはフランスも日本の公債に應じたい。いづれ戰後の經營にも金は要るであらうから、さういふ時には相談して見てくれ」といふことを言つて來た。

このパリーの取引所理事長といふものは起債市場に大變な勢力があるので、フランスでは取引所に上場されなければ大きな起債は出來ない。あすこには場外取引と本當の正式取引といふものがあるが、このヴエルヌイユといふ人のは正式取引で、場外といつても日本のやうなモグリぢやなくチヤンと立派な場所はもつてやつてゐるのだが、正式に上場されないと何うしても大きな仕事は出來ない。殊に大藏省の認可を得なければ起債出來ない。その認可につき取引所の理事長の意見が、政府の認可するか否かを決する上に大變な關係がある。かういふわけでパリーの取引所の理事長といふものは起債には大變の有力家である、がこの人が出て來て誘つたわけである。

そこで、日本も何うせ戰後の經營のために金が要るのは決まつてゐるので「それは好都合だから一つその方で早速募集を試みろ」といふ命令が來たから、高橋さんは講和調印後パリーに行かれて相談をされた。右の取引所理事長は當時の大藏卿ルーヴイエーといふ人や、パリーのロツチルド家と親しい間柄らしく、話は非常に樂に進んだ。

かうして十一月二十七日に四分利附英貨公債といふものが發表されたわけである。今度はフランスを主とする發行であるのに英貨公債としたのは、英米獨も參加するので總ての參加國に對し英貨公債と云つた方が

一番通りがいゝからであつた。今までの場合でも同じだが、英貨と他の參加國の貨幣との間に換算率が定めてあるから、名前は英貨公債でも實際フランスに於ては佛貨公債となり、獨逸に於ては獨貨公債となり。米國に於ては米貨公債となるのである。

戰ひ濟んで日が暮れる
却つて外債交渉の道遠し

四分利英貨公債の仕組は稍複雜なるものであつた。卽ち發行總額を五千萬ポンド、約五億圓と豫定し、其うち今さし當り內國債償還のために二千五百萬ポンドを發行し、殘りは三十七年に發行した六分利附公債二千二百萬ポンドの借換へ財源にするため追つて發行する。その條件は追つて定めるといふことになつてゐる。外債を以て內債を償還すればそれだけ國內の資金を潤澤にするから、つまり戰後經營の爲めに外債を募集したことになるのである。

そして今度のは分け方が均分でなく、フランスが千二百萬ポンド、イギリスが六百五十萬ポンド、アメリカとドイツが各三百二十五萬ポンド宛つといふことにして、發行價格は矢張り九十ポンドで、据置きが一九二一年まで償還が一九三一年、擔保は今度はもう戰爭が濟んだから不要だつた。そして、フランスの方でパリーのロツチルド家が主となつてやつたから、その關係でロンドンのロスチヤイルド家も表面に顏を出すといふことになつて來た。それで日本の公債の相手方も大分擴がり、國としては英、米、佛、獨に跨つたわけである。

大いに手を焼いた五分利附英貨公債

それを仕舞つて高橋さんは歸途につかれ、三十九年の二月十三日に歸朝された。後に殘した六分利附英貨公債の借換へのための二千五百萬ポンドは今言つたやうにチヤンと書いてあるので、これはもう樂々と進むだらう、電信だけでゞも出來るだらうといふやうな心算で歸へられた。

然るにその後、世界の金融市場の模樣が大變に惡くなつて來て方々の市場の金利が上り出した。方々の中央銀行も公定利率を引上げて警戒するやうになつた。一番分り易くいへば翌四十年の十月には有名な米國の金融恐慌が起つて居るが、その危機に向つて進みつゝあつたのだから、金融狀況も頗るよくなかつたわけである。

それで思つたやうになか〳〵樂々とはゆかぬものだから、また高橋さんに出かけて呉れと言はれるやうになつた。三十九年の九月六日に出發せられ十月中旬にロンドンに着かれたところが當時國際金融市場に於て一番餘裕のあるのはフランスであつたから、大きな金融上の仕事をするに

は何うしてもフランスが、主たる働きをしなければならぬといふ形勢であつたので、ロンドンに着いてから間もなくフランスに行かれていろ〳〵相談を試みられた。

けれども一般的の金融狀態が變つて來てゐる上にフランスの政府が更迭して居り、新しい政府の大藏卿は其後色々の意味で益々有名になつたカイヨーといふ人であつた。このカイヨーは先に言つたパリーの取引所理事長や、ロツチルド家との間の關係が何うも前の政府の時の如く圓滑でないらしく、ロツチルド家以外に日本公債の引受者たらんことを希望する人もあつたらしく、それから、フランスは今、金融上の大きな働きは何うしてもフランスを主としなければ出來ない情勢にあるといふことを知つてゐるから、起債に關聯して政治上、及び一般經濟上に於てフランスに都合のよい代償物を得やうといふ意圖があつたやうである。それでいろ〳〵と面倒なことを言つて話がなか〳〵進まない。

そのうち一例を云ふと——英佛共同のシンヂケートで支那に鐵道の利權を得やうとして居るものがあるが何うかその目的の達成するやうに日本で盡力してくれぬかと云ふやうな話もあつた。朝鮮の李朝時代に約束された某フランス人の利權を復活して呉れと云ふ話もあつた、それから日露間にポーツマス條約の後始末としていろ〳〵の問題が殘つてゐる。それを何うか都合よく早く片附けてくれぬかといふやうなことを云ふしまた東洋に於て日本も一緒にやりたければ一緒にやつてもよいが、兎に角フランスの經濟上の地歩を擴張してゆくことに盡力してもらひたいといふやうなこともあつた。その中には日本の出來ることもあるし、出來ないこともあるものだから事はなか〳〵進まないわけである。

右のポーツマス條約の後始末の問題に關し私に一つの面白い記憶がある。フランスの言分は同盟國たるロシヤと日本の間に面白がらざる懸案の存する間は、日本の公債に應じ兼ねるといふのである。そこで此事を日本の駐佛大使から外務省へ電報すると、當時の林外務大臣から、外交上の懸案は次ぎから次ぎへと起るもので其の絶ゆることを期し難い、懸案のなくなるのを待つて公債を募集すべしとせば到底其の時機なかるべしと言つて來た。それで一寸行詰つたが、高橋さんがロンドンに歸つて、之を當時の駐英大使小村侯に報告すると、小村侯がおれが一つ林に電報を打つて見やうと云ふので「ロシヤは日本のフランスに於ける募債に反對するやと、云ふことを、直接ロシヤ政府に訊いて見ては如何」と云ふことを參考として進言された。林伯は直に其の進言を容れ駐露大使に訓令されたところが、ロシヤは懸案解決を希望するも日本の公債に反對せることとなし、と云ふ返電が來た。之をフランス政府に通告して外交的には一地歩を占め得たけれども、フランス政府の腹が複雜だから、公債談の進捗には餘り益がなかつた。

それからもう一つは高橋さんが、その年のクリスマスにドイツに行つた。年末にちよつと各方面とも話の續きのやうなことがなくなつて暇があつたので、豫々ドイツの方の人も一度ドイツに來てくれと云つて居つたから、恰度クリスマスの休みを利用してドイツに行かれたのだが、これは何うもフランスを主として相談をしようといふ立場から云へば一寸まづかつた。それがフランスの人達のお機嫌をわるくしたと云ふことをガンズブール男と云ふ人から聞いた。此人はヴエルヌイユを高橋さんに紹介したコツホの親類で、ヴエルヌイユの親友で、裏面に於て日本公債の爲めに大に盡力した人である。

それから餘り細かい話だから內容は省略するが、さきに發行した四分利附公債に關聯する其後の處置に就いて英佛の間に一寸意見の相違があつた。高橋さんは英國側の言分を妥當と認められたやうだが、フランス側は新發行を引受けるに當つて英國側を壓倒しようと考へたらしい。

色々こんなことで公債談は仲々進行しない。高橋さんは度々英佛の間を往來せられ、稅關の役人に顏を覺えられるやうになつたが、埒はあかないので、遂に二月十七日ロツチルド家に對し「いろ〳〵長く話をして來たが、要するに日本の起債相談を進めやうとするならば、かう〳〵いふ風な順序でやるの外はない。その順序を踏んだ上で相談が纏まらぬならば已むを得ぬけれども、一應その順序を踏んで進行を圖つて見たいと思ふが何うか」といふやうな意味の簡單な手紙を送られた。これは最後的の餘程決心を示した手紙を送つたわけであるが、矢張りロツチルド家は「自分の所だけで返答するわけにゆかぬ」と云つて一向に要領を得ないので、高橋さんはロンドンに歸られた。高橋さんとコツホと私と三人で、全く無言で、汽車中と連絡船の中とを過ごした。高橋さんは只考へて居られた。

そこで今度はもうフランスには賴らないで、英國單獨に發行しようと試みられた。けれども、もと〳〵金融狀況が難かしいものだから、英國でも、フランスと物別れの形となつて來た高橋さんの相談に、なか〳〵乘つて來ない。それに英國側の人は先の六分利附公債の償還義務年限はまだ間がある。据置は過ぎたが、義務償還期限はまだ來てゐないのだから、この際は見合せた方がいゝぢやないかと云ふのである。

調達に苦めて十三億圓也

偉なる哉『借金大使』の功績

を出してしまつてゐる。即ち五千萬ポンドの計畫をして、二千五百萬ポンドはこの際募集するが、殘りの二千五百萬ポンドは六分利附公債の借換のために後は留保すると云つてあるのに、それが出來ないといふことは、大變に體裁がわるい。或は金融界の形勢はますますわるくなるかも知れないから。出來るだけ早くやりたいといふ日本政府の希望であつた。

そこで高橋さんはこゝに一大決心をされたものと私は思ふ。若し英國側の從來の人達が何うしてもやらないと云ふならば、日本はまだ先年の七月に募集した三億は殆ど使はずに持つてゐる。これは講和談判の道具にして募集したのだからまだ使はずにある。戰後經營に充てる筈だが、借換の爲に之を使ふ氣になれば差支へない。それで日本がロンドンで公債の發行をして、誰か發行者になつてくれる人がありさへすれば、日本が自ら下受をする。そして條件を出來るだけ好くし、借換をして足らなかつたものは、今もつてゐる金で拂ふといふのである。

私は高橋さんと政府との間に何ういふ諒解が出發の時にあつたのかよく知らないが、外に現はれたことだけでは、何うも高橋さんにまういふことをする權限があるのか何うか、私にはよく判らなかつた。まさかのところが、日本の政府では高い六分利附の公債は早く借換へた方が得でもあるし、また前に看板

時は何うといふ話合ひがあつたのか、何ういふ根據によつて決心をされたのかは知らぬが、兎に角さういふ決心をされたやうに私は想像する。之に關して電信の往復はなかつた。當時、小村侯がロンドンに於ける日本の大使であつたが、小村侯も高橋さんの決心は至極尤もだといふことを言はれたさうである。大使の贊成は高橋さんの責任を解除することにはならないけれども、高橋さんは大に心を强くせられたやうであつた。この勢ひを以て英國側と交渉すると、從來の發行團はそれはロンドンの市場を攪亂するものだと言つた。高橋さんは之に對し、從來日本政府は公債手取金の使ひ方に就いて出來るだけ市場の便宜を圖つて來たが、これは相互の利益の爲めであつた、日本政府は手取金の使用に就いて何等の拘束も受けてゐない。貴方で日本政府の希望に應じなければ、日本政府は斷然分不利となつたのは世界的に金融狀態に變化した結果である。今度は期限が大分長いもので一八二二年まで據置き、一九四七年償還といふことになつてゐる。公債の表面利率は一旦四分まで引下げたのに、今度之を五分にしたのは後戻りに違ひないが、金融狀態が前とは變つてゐるから到底同じ條件では行かない。前と同じ四分利公債にして發行價格を一層低くするよりも、全く別種の公債にした方がよいといふので五分にした譯である。先の計畫では尙二千五百萬ポンドを發行する筈であつたのに、今度の發行額を二千三百萬ポンドに止めたのは發行價格を高めた結果それで六分利附公債を借換へるに充分の手取金を得られるから

氏五英井深の頃のそ

〔す寫て敎倫〕

現に保有する資力を以て最善と信ずる所を爲すの外はないと極言せられた。此勢ひを以て臨んだものだから英國側もそれぢや我々も出來るだけやつて見ようと云ふことになつた。卽ち從來と同じ方法で英國單獨で借換發行を試みようと云ふのである。

さうなると今度はフランスも追つかけて來た。そして英國側で單獨でやることゝ話が進みかけてゐるさうだが、フランスももと〳〵斷り切つたわけでなく、問題は續いてゐたのだから、相談をし直さうと云つた。こちらもそれは尙ほ更ら結構だからと云ふと、フランス側は體裁を整へる爲めに、高橋さんにもう一遍パリーに來て呉れと云ふ。高橋さんはそんなことで意地を張るにも及ばないと考へられたと見えて之に應ぜられた。今度は儀禮訪問で用はないからと云ふので、常傭の僕をつれて行かれた。私は只此時だけ高橋さんと別れてロンドンに留まつた。さうして結局フランスも參加することになつた。

かうして三月の十日頃に五分利附英貨公債なるものが發表されることになつたわけである。これは金額二千三百萬ポンド約二億三千萬圓　英佛均分でアメリカもドイツも入らなかつた。それは前に云つたやうな金融狀態だつたから參加しなかつたのである。そして發行價格は九十九ポンド二分の一で、利子が五分に上つた代りに發行價格も高くなつたから、前回の四分利附公債に比し實際の利廻の差はそれほど甚だしくはない。然し期限が大分長いもので一八二二年まで據置き、一九四七年償還といふことになつてゐる。公債の表面利率は一旦四分まで引下げたのに、今度之を五分にしたのは後戻りに違ひないが、金融狀態が前とは變つてゐるから到底同じ條件では行かない。前と同じ四分利公債にして發行價格を一層低くするよりも、全く別種の公債にした方がよいといふので五分にした譯である。先の計畫では尙二千五百萬ポンドを發行する筈であつたのに、今度の發行額を二千三百萬ポンドに止めたのは發行價格を高めた結果それで六分利附公債を借換へるに充分の手取金を得られるから

である。之れで最初の高利短期に發行した六分利附公債の借換へが出來たから、日露戰爭中の外債はこれで濟んだわけで、高橋さんが募集の任に當られた公債の額は戰時中の分が八千二百萬ポンド約八億二千萬圓、戰爭直後借換等の爲めにせる分が四千八百萬ポンド、約四億八千萬圓合計一億三千萬ポンド、約十三億圓であつた。かうして高橋さんは四十年の五月十日に歸朝せられた。

私の方から御話しすべきことは先づこれで濟んだが、尙御尋ねがあるから出張中の模樣を少し御話する向ふに於ける高橋さんの生活は決して豪奢ではなく寧ろ地味にやつて居られた。宿屋の如きも初めは變な客宿にとまつて居られた。シツフ氏と往來してから始めて一流の宿屋にとまらなければならぬといふことになつた。乘物なども今とは時世が違つて、無論自動車なんかはなかつたので、平常は一志出して辻馬車に乘り、たゞ訪問する先によつてはチヤンと二頭馬車を傭つて乘つて行かれる位のものであつた。しかし社交の方は前にも話したやうに隨分思ひ切つたことをされた。それ等の話が傳はつて豪奢の噂を生じたのであらう。日本の方では、當時高橋さんが向うで給仕などに金貨をバラ〳〵惜氣もなく與へたといふやうな話をする人があるが、それは間違ひであつて、大戰の後に或る成金が行つて一磅の紙をバラ〳〵やつたといふ風なことをされたのではなく、一志の銀貨と一磅の金貨と略同じ形だから間違つてやつたことがあるか、若くは、極く稀に何かの折に非常に氣に入つた給仕に自覺的に與へたことはあつたかも知れぬが、決して常時豪勢振りを發揮したやうなことはなかつたのである。

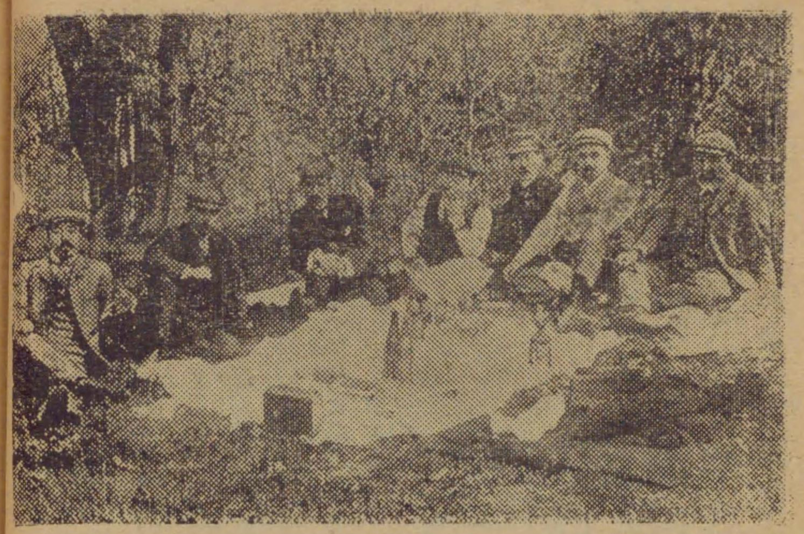
電信より手紙で行く意氣

英佛の雲行さぐる倫敦生活

大に違ふ。高橋さんの時は、準備期の狀況を一々電報することはなく、只かういふ所まで來たが、これで差支へないかといふやうなことにならねば電信は打たない。

尤もこれがために內地で誤解を起したわけであるが、しかし、その頃は電信料は餘稅儉約しなければならぬといふ觀念が强く、それかと云つて報告も、もつと詳しくしなければ、とんでもない誤解をされるといふので、第二回の出張の時からは郵便によつて、殆ど毎日のやうに手紙に詳しく書いて報告したが、矢張電信ではそんなに詳しく報告しなかつた。是れは電信料の關係ばかりではなく、最初は高橋さんについて行つたのは私が一人であつて、高橋是賢さんがロンドンに居られたものだから手傳つてくれて、何から何まで三人だけでやり、別に事務所なんかもなく宿屋の部屋でやつたのだから、とてもこの如のやうな長い電信を打つことは出來なかつた、出先きの仕事をする上にさういふ詳しいことを一々電信で打たうとすれば、何うしてもチヤンと事務所を設けて、十人近い人數がなければ出來るものではない。

高橋さんの一行は今いつたやうに極めて小人數なのだから、雜務は大抵私一人で、暗號電信を打つたり、譯したり、手紙を書いたり使に走つたり、調査をしたり、高橋さんに代つて人に面會したり、何から何までそれから電信料の少くて濟んだことは驚くほどで、その後に於ける外債募集の場合とは



…紐育郊外スカボロにて・三十八年十月…（向つ右から當時特派
ヨーユニ金正　木勇川山長店支ンドロ金正　清是橋高員委政財
日　二乗西今長店支クーヨーユニ金正　耶太鈴宮一人配支副ク
サ金正　五英井深役書秘銀日　耶三卯谷柳役督監クーヨーユニ銀
フンラシンスコ支配人穂續太耶　の諸氏）ロビンスン氏寫す

やらねばならぬので、是賢さんも來て一緒にやつてくれたが、高橋さん自身も電信を手傳つてくれる。それに可笑しい話だが、私が原稿を書くが私は字が拙づい。横文字も日本字も下手なものだから高橋さんは「君は字が下手だから俺が清書してやる」といつて無論、趣旨は高橋さんに授けて貰つて私がそれを文章にするが、清書は高橋さんが自らされるといふ具合であつた。それから高橋さんは身邊のことは自分でする流儀だから、普通の所謂隨行者のする用事は殆どなかつた。餘程後になつてから、高橋さんも身邊のことを自分でするのが面倒になつたと見えて常傭の僕を置いて使はれた。

第二回の出張の時からは人手が少しふえ、當時日本銀行の書記で後に朝鮮銀行の副總裁になつた故横部實之助氏が加はつた。今大分合同銀

行の頭取である當時の書記膳田軍太氏も後に加はつた。それから、この間亡くなれた理事の吉井友兄氏が來られた。是は高橋さんについて來たといふわけではなく、別途に日本銀行から來た人であるが、高橋さんの仕事も手傳はれた。正金銀行の人は到る處で高橋さんの爲めに買物とか、宿屋の世話とかいふ方面のことをして呉れた。又英國側の相手方へ正式に示す原案のやうなものは、正金銀行の巽氏が書いたこともあり、事柄によつては山川、巽二氏に相談もされたが、正金銀行の人に手傳つて貰ふことは少なく、殊に日本政府に對する關係の事項になると多く日本銀行のものだけでやり、是眞さんだけは正金銀行の行員だつたけれども、これは高橋さんの息子だから、いつも手傳つて居つた。その後は日本銀行から來る人がだん〳〵殖えて終ひには五、六人になり、報告も少し詳しくしなければならぬといふことが判つたものだから、電信も大分殖えたわけである。

それから外債募集中にはロシヤ側から盛に日本の惡口を言つたり、いろ〳〵邪魔が入つたことは勿論であるが、高橋さんはタイムスとロイテルの人々と特に親意にし、其他各新聞社の經濟記者に努めて接觸して、日本の立場を説明せられただけで、直接にロシヤの運動に對抗せられるといふことは餘りせられなかつた。タイムスの編輯次長をして居たキヤツパーと云ふ人が、前から私と深い交のある人で、高橋さんの方から度々午餐に招かれたが、或時先方で高橋さんを私宅の晩餐に招きたいと云ふ。先方が餘りえらい地位の人でないから私は取次ぐことを躊躇したが、全く御知らせしずに置くのも好くないと思つて、只かうふことがあると御話したら「君の友人だから差支ない」と云つて直に招を受けられた。行つて見たら編輯長バツクル氏も客の中に居た。これ等を以て高橋さんが如何に勉められたかゞ判る。有名なタイムスの外報部主サーヴ

アレンタイン　チロル氏とは隨分親しく接觸せられた。

フランスに於ける對露關係の經緯は既に御話したりだ。それから最後の募集を手古ずらせた因の一である英佛の關係に就て、もう少し追加して見たい。英佛の間にはどちらも國際金融上の如として仲々對抗心が強い。四分利附公債の時はフランス側でロツチルド家の意思がすら〳〵と通つた。ロツチルド家は、英國のロスチヤイルド家と親類の間柄だから對抗心が餘り動かなかつたのであらう。然るに五分利附公債の時になるとロツチルド家の思ふまゝにならず、主として佛蘭西政府の發動に待つと云ふ實情であつたので、公債發行に關聯して日本から利權を獲得すると云ふ考への外に、當時の優越なる佛蘭西の地位を利用して、英國側をへこませてやらうと云ふ對抗心も動いたやうに想像せられる。其の爲めに談判は進捗せず、高橋さんに苦勞をさせたのである。

英國側も其時は仲々奮發が出來なかつたのであるが、高橋さんの大英斷に引摺られて、單獨發行の決心をした。それでフランス側も之に追隨して來た。高橋さんをして、此の大英斷を以て英國側に臨むことを得せしめたのは、若し從來の發行團が高橋さんの希望に副はなければ、他に發行たるべきものを求め得る第二線の備へがあつたからである。日本に自ら下受を爲す資力があつても、發行者となるものがなければ借換發行の所作は出來ない。其の備へがあつたから高橋さんの大英斷が出來たのだらうと想像する。先づ從來の緣故者を以て發行團を組織し、更らに有力なる方面と連絡をとつて第二、第三の備へとするといふ最初の方針が何れの發行の場合にも在勢力として成功を助けたが、最後の場合に於て、最も著しく其の効果を發揮したやうに思ふ。

ロシヤの背後より戰爭を見る

當時スエーデン公使

（元特命全權大使）　秋月左都夫

秋月左都夫氏

日露開戰當　私はロシヤ公使館に勤務し、その後スエーデン公使館設立と共に最初の專任スエーデン公使となり、日露戰爭中は中立國から戰爭を見てゐた譯である。スエーデンのストツクホルムに初めて日本公使館が設置されたのは日露開戰直後のことであつて、それまでは當時のロシヤ公使栗野慎一郎子爵がスエーデン公使を兼任してをられた。日本公使館をスエーデンにおくことは前から定つてゐたことで、日露開戰に刺戟されて俄に置いたものではないが、日露戰爭中諜報の任務に當つてゐた明石大佐などは、情報をとるのにロシヤ近くの中立國に在任することは便宜があるといふことも考へてをられたであらう。專任スエーデン公使となつて赴任したのは私が初めで、私はストツクホルムで暫らく明石大佐と起居を共にして

ねた。

一體スエーデンはノールウエイと同君聯合を結んでゐたが、日露戰爭中別々になつたもので、スエーデン人は元來平和好きの國民であるから、日露戰爭については終始積極的に動くことはなかつた。元來スエーデンはロシヤ接壤の國であり、バルチック海を通じてロシヤの海の出入口に位する國であるから、こゝにゐればロシヤの事情はよく判る筈である。歴史を繙くに、スエーデンは、昔領土を大分ロシヤに奪はれ、その後も常に多少ロシヤから壓迫を受けてゐるから、ロシヤに對して好感を持つてはゐなかつた。けれども奪はれた領土をロシヤから奪還し、進んではロシヤを抑へようなどといふ考はスエーデンにはなかつたであらうそんなことはとても企てゝばぬことである。ロシヤが憎ければ日露戰爭が始まつたら日本に親しみを持つのが自然である。併し當時のスエーデンは『あとが怖い』といふ一念で、思ふ存分日本に同情を表することさへ考慮した程であつて、具體的援助などを日本に與へる筆はなかつた。日本政府でもそんなことを期待して居られたのではなからう。此の邊の消息は故西德次郎男が一番よく通じて居られて、私が最初のスエーデン公使として赴任する前に、西男にお目にかゝつた時も『スエーデンではそんな便宜はないだらうよ』とお話があつたやうに覺えてゐる。

それのみか、當時のスエーデンでは日露戰爭にはロシヤが勝つた方が却つてよいとまで思ふてゐる人があつたとしても、それは驚くに足りぬことであつた。詰りスエーデンは自國に對するロシヤの壓迫が恐ろしいのであるから、ロシヤが大に東に手を延ばしてゐれば西の方への熱心は幾分減ずる譯だから、さうすればスエーデンはロシヤの壓迫から少し樂になると思へば思へぬこともない。卽ちロシヤの玄關のつけかへである。

有名な探檢者のスウエン　ヘデイン氏などもそんな考へであるといふ評判を聞かぬでもなかつた。それまで思ふたかどうかは兎に角、日露戰爭の結果はどうであらうとロシヤが大疵を負ふことはないといふ考へから堂々たる强國たるの地位をロシヤが失ふことがないならば、ロシヤが困つてゐる時には寧ろ好意を表しておく方が得策である位のことは考へてゐたかも知れぬ。これが日露戰爭當時の中立國スエーデンの偽りのない感情であつた。

スウエン　ヘデイン氏

一體日露戰爭當時、日本がロシヤに勝たうと思ふてゐた者は、ロシヤの內外を問はず先づなかつたと云ふてよいのだから『ロシヤが外戰に忙しい間にその感情を害しておいては戰爭が片づいた後でよいことはない』とスエーデン人が思ふたのは當然である。前に云つたヘデインの觀測は違つてゐない。吾々日本人としては殘念だつたが、當時の世界情勢から見れば致し方がなかつた。

結局日露戰爭でロシヤは敗れたが、それでも歐洲ではそんなにロシヤが行きづまつたとは思つてゐない。財政も急速に恢復するし、軍隊も實際はよくなつた。併しロシヤの敗戰で實力以上に、思はれてゐたロシヤが、ロシヤの實力もこの程度かといふことを暴露した。

スエーデンに赴任するまで私は露都に在住してゐたから、先づ開戰前のロシヤの內情について一言述べて

見よう。日露戰爭前、ロシヤ側にも開戰にならない樣に、日露交渉を纏めようといふ氣運のあつたことは事實である。當時ロシヤに宮廷派と稱せられる一派があつて、それが對外硬であるといふことは私も聞いてゐたが、此の派だつて戰爭がしたかつたと云ふのは當らぬ。『日本はロシヤと戰爭をやる勇氣はない。萬一やつて來たら無論應戰するが日本を片づけるのは大した手數ではない』といふ位の考であつたのであらう。

我が駐露公使館員某の下宿の主婦は、我々がいよ〳〵國交斷絶で引揚げる時に『あなたの國はひどい目に逢ふに極つてゐるが、實に氣の毒だねえ』といつたさうだが、これがロシヤ人としては日本に對する衷心からの同情の言葉であつたに相違ない。旅順攻擊後一週間ばかり吾々は居たのに我々に對しては實に穩かなことだつた。我々に對しては全く何の變化もなかつた。その以前よりも多くの注意を惹くといふことさへなかつた。

吾々公使館員がいよ〳〵露都を引揚げ、汽車に乘つたのは夜であつたが、停車場でも何事もなかつた。日本を强國と思ふてゐたらロシヤ人いかに寛大でも、かうはしなかつたであらう。最初ロシヤ側は、日本は全く相手にならぬと高をくくつてゐたために、我々はかく平穩に露國を引揚ることが出來た。

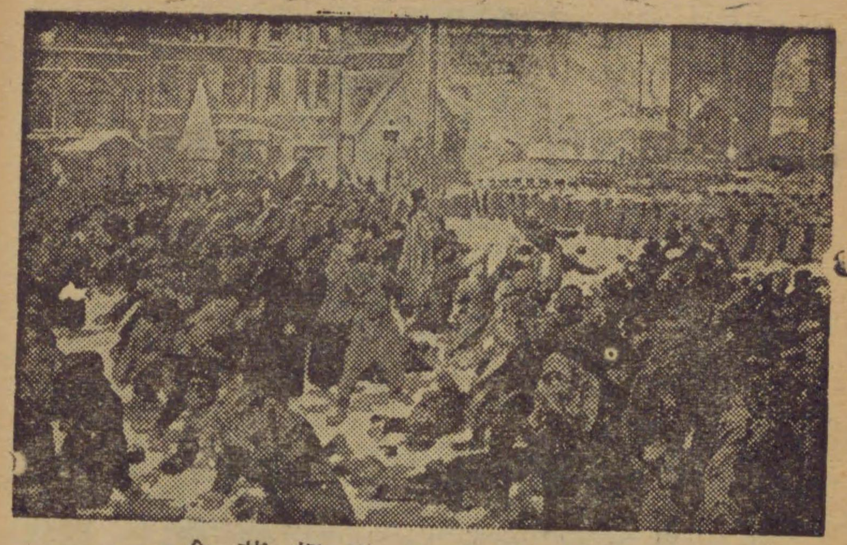
强帝國を蝕ばむ宮廷派の惡
虎視耽々たるスパイと革命家

日露戰爭中明石大佐が歐洲を驅けまはつて、諜報に活躍された話は餘りに有名であるが、私も明石大佐といろ〳〵計畫したこともある。併し大きな仕事はなか〳〵できるものでない。たとへば滿洲において秘密に敵の鐵橋を爆破しようと計畫するとしても、大きな仕事になればなる程大量の材がいる譯で、その運搬が第一容易でない。且つ鐵橋の修繕などはぢき出來てしまふ。それ故かういふ直接行動で敵國を苦しめることはむづかしい。そこで諜報事務は勢ひ、敵の軍隊又は兵器彈藥の輸送の狀況を探り出すことになる

故明石元二郎大將

それにはどうするかといふと、外國にゐてロシヤから來る新聞を見てゐると大體の見當がつく。新聞を注意深く讀むと所謂軍機といふものも大體分る樣である。スパイ〳〵といふが、スパイを當てにしきる譯には行かない。スパイを利用しようとすると、こつちも利用される位のことは覺悟してゐないと不覺を取ることがある。

ロシヤでは戰爭に革命はつき物とされてゐる。私はロンドン タイムス外報部長チロル氏に會つた時チロル氏とは氏が朝鮮にゐるときから知合であつたので『どうです、ロシヤに革命が起るでせうか』と、水を向けて聞くとチロル氏は『さあ、僕もロシヤに永く居ないので樣子は分らないが――』と言葉を濁したが『まあ起れば宮廷の革命ぐらゐですかねえ』といつたことがある。アメリカの雜誌に元駐露米國公使ローレンス氏が寄稿したものゝ中にも『ニコラス皇帝は歷代ツアーの失政の價を拂ふであらう』と、記されてあつた樣に記憶する。結局、日露戰爭の結果は、之等の人の云ふやうに、ロマノフ家の滅亡となる原因を作つたので



彈壓された露都革命
（中央はガポン僧正）

あつた。革命運動の中心をなすものは海外亡命中のアナーキストの一群であつた。僕も戰爭中歐洲で之等アナーキストの巨頭連に屢々會つたことがある。一九〇五年露都で大示威運動をやつた革命運動の指揮者ガポン僧正には、明石大佐がロンドンに於いでアナーキストの集會で會つた。ガポン僧正は實は政府のスパイで冬宮前の虐殺を逃れて英國に亡命し、政府のスパイとして此の集會に出席してゐた。ロシヤの內務大臣を暗殺した犯人のブレブエも自分の使つてゐたスパイに殺された。そのスパイも、うまく暗殺に成功すると國外に亡命を企てアナーキストの群に投じた。

スエーデンのストツクホルムでの集會で、フインランドのアナーキストであるチンメルマンが、明石大佐にその事を話つて『內相暗殺後數ケ月も露都に潛伏してゐたえらい奴ですよ』——と指して敎へたといふから確であらう。沖斷がならないのはスパイだ。又日露

戰爭中ロンドンにゐたロシヤのアナーキストには有名なプリンス　クロポトキンがゐた。聞く所によるとクロポトキンは革命兒ではあつたが、それでもロシヤの敗報をきくことを喜ばなかつたといふことである。

ロシヤは名に負ふスパイ政治の國であるから、國內における之等革命分子の取締りは峻嚴をきはめてゐるので、彼等は國外にあつて活躍してゐた。そこでスパイと革命家の複雜に使分が生れて來る。フランスでもイギリスでも、何國の國でも治安維持のために政府の間諜を使つてゐるが、それ〴〵其國のやり方があり、パリでは尾行されてゐても少しも分らぬが、ベルリンでは感づくなどと云はれてゐる。特高を使はないと、治安維持はむづかしいものと見える。

一九一七年ロシアの宮廷政治の腐敗は甚だしいもので北滿事變當時、支那に出征したロシヤ兵に軍需品、物資の供給の行き渡らなかつたことがあるが、その原因は皇族で海軍長官をしてゐたものが、利益を獨斷するために自ら海軍の倉庫を燒いたとまでいはれたものである。『日本と戰爭が始まるとまた燒けますよ』などとも悲聞で取沙汰された位であつた。事實日露戰爭が初まつてからモスコーでは慰問品として陸軍に寄贈された毛布が市中の賣物に出てゐた位である。戰爭中でさへ此の有樣であるからその他の時は推して知るべきであらう。

ニコラス皇帝は寔にお立派な方であつたけれども、皇族の中に不心得の者があつて、遂に軍を誤るやうに導いたのである。

獨り亡ぶ哀れロマノフ家

恫喝の迷夢を醒ましませた日本魂

近來の人心の趨向を察する時、その心胆は從來よりも多い。だから滿洲問題では成るべく日本の要求を容れるがよい。日本は戰爭を賭して其要求を盡く貫ぬかうとはせぬことは分り切つたことだから、こちらが妥協的精神で折衝すれば話は纏まらぬ筈はない。――といふ考へから日露戰爭を避けようとした者もロシヤの一部にはあつた。我が公使館員某が吾々が國交斷絶で引揚げるときロシヤ陸軍省參謀官の某に暇乞ひに行つた處が、同參事官は『あなた方は吾々ロマノフ家をつぶすのですかね』と、云つたさうである。これは一部の穏和論者の考へを代表したものと見てよからう。また專ら損得の上から考へて平和を畫策した一派もあつた。日露戰爭開始の後にロシヤ外務省の役人で當時の藏相ウイツテと昵近であつたツルベツコイ公爵が、ハンブルグの新聞に載せた文章によると、此の種の平和論の隨一はウイツテで、クロパトキン陸相なども同じであつたと察せられる。

彼等は、かう考へた――絶東に於けるロシヤの經營がもつと進んだならば、睨んだばかりで日本の腰は碎けるのである。今日多少讓つたとて、暫く預けておく樣なものである。讓つた地位を奪ひ還すことも出來る戰爭など金のかかることをせずに絶東經營の增進に努力すべきである――と。

クロパトキン陸は、日本に派遣されて暫らく滯在の後旅順に赴き、絶東總督となつたアレキセフ提督と協議を遂げたが、日本に對しては此の際は妥協的態度を採ることを得策とするといふに意見が一致した。陸相は此の意見を拠へ歸り、ロシヤの對日本方針を定むる基礎とする考へであつた。さう思うたのは當り前である。自分は特に日本視察のため派遣され、又絶東總督（實は副王ぐらゐの地位）といふ重き官を新設して旅順に駐在せしめた程だから、旅順會議の決議が重視さるべき筈であると考へた。然るに陸相が露都に歸つて見ると其の意見はさして顧みられず、又極めて冷やかな待遇を受けた。それはその時ペゾブラゾフといふ怪物が、旅順に居て會議の樣子を覗て居て、決議の趣旨を聞くや、直に特別列車を仕立させて露都に歸り宮廷の腹を決議反對に固めておいたからである。ペゾブラゾフは無論アレキセフ提督と同腹だつたのである。

旅順から故國に歸つた時の
ステッセル夫妻

日本の輿論をひどく刺戟した鴨綠紅沿岸の伐木事業を計畫したのも此の怪物ペゾブラゾフであつた。皇族

中では此の者にまるめられて營利に業に手を出した人が少くなかつた。伐木事業なども其の一である。若し皇族中に人物があつたならば、ロマノフ家の亡後と雖も今日復辟問題が起り得たに相違ない。

ロシヤの皇族中には一だしき惡を敢へてした人も一、二に止らぬ。流石に皇帝はそんなことはないが、皇族と貴族が聯合して皇室を倒した形跡を殘した例を海外には多く見る。人民は器械として使はれたのである。此の傾向はロシヤに就て特に著しい。上に立つ者が、もう少し

コンドラテエンコ將軍

面目で、もう少し慾が淺かつたならば百のレーニン、トロツキーがあつても何も出來なかつたであらう。

私は日露戰爭におけるロシヤの敗因と、日本の勝因について深く考へることがある。ロシヤの驕慢と敵を輕んじたといふ二つのことが露軍の主なる敗軍の原因であつた。之に反し日本は敵を長れて（長縮ではない）念に念を入れた。これが大いによかつた。日本臣民の力が最も大なる强味だつたに相違ない。併し忠勇は日本人の持ち前ではあるけれども日本の立場の厳しくつて、我が要求の正當だつた事が一番大きな力であつたことは見逃してはならぬ。之を見逃しては日本のあの勝利は十分に諒解は出來ぬ。ロシヤは虛勢で相當成功したことがあつたから、實を務める考が二の次になつて、虛勢を濫用した趣がある。ロシヤの一外交官は『威光は力の半ばを成す』といつてゐた。日本はその正反對に虛勢よりも實力を練つてゐた。むしろその實力を十分示す機會がなかつたといふのが適當であらう。

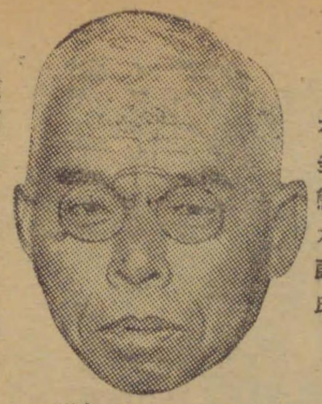
それから日露の敗跡を顧みて思ふことは、東洋殊に日本魂と西洋魂の違ひである。百ナ訓正しても止まらず終に戰ひとなつた以上は、日頃にも增して奉戰苦鬪して死ぬ――かういふ例は日本には古來多數に邊ない程であるが、西洋人には此の心は多分判るまい。彼は打算的に考へて損だと知れば逃げ出す。ドイツのカイゼルが戰爭に敗けても國外に亡命して安穩にしてゐるなどは實に不思議なことだ。東洋では支那の項羽さへ江東の青年を集めて再擧を圖れと勸められても『恥づ手、何の顏あつて父老に見えん』と云つて烏江を渡らず、悲壯なる自殺を遂げたではないか。

日本には敵に圍まれた軍隊は皆死ぬときまつてゐても、圍の外に在る上長官の命に非ざれば決して開城せぬといふ意氣込がある。旅順でステツセルが此の決心で防戰したならば日本軍は一層困つたに相違ない。ステツセルは細君をつれて旅順に籠城してゐた。ステツセルに細君が居ないか、又勇コンドラテエンコが半途戰死しなかつたら、彼は露兵はもつと抵抗を續けたかも知れない。ロシヤの爲には殘念なことであるが死場所を知つてゐる日本人にかなはないのは當然である。日本人の此の意氣こそ實に有難いものである。

講和外交秘話

當時講和會議全權隨員

元駐獨特命全權大使　本多熊太郎



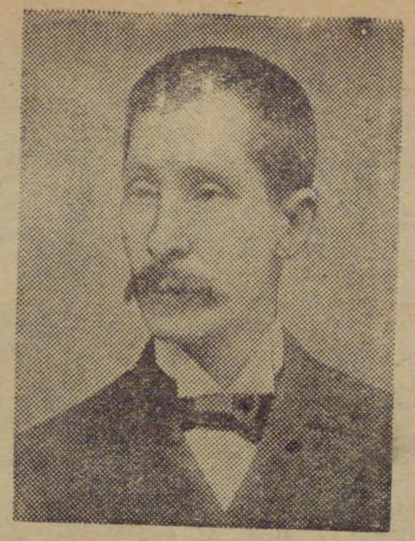
本多熊太郎氏

ポーツマス講和會議には一つの特異性がある。それは卽ち日清戰爭や普佛戰爭乃至先年の歐洲大戰の場合の如く、交戰國の一方が敗戰者たる地位を自認して他の一方、卽ち戰勝國に對し和を乞うた結果として開かれた會議ではないことである。成る開戰以來一年有半を通じ露國は海に陸に徹頭徹尾連戰連敗で、只の一回たりとも勝利を獲たことがないのではあるが、夫れにも拘らず彼れは猶ほ戰敗者として講和を求むるを肯ぜず、講和會議は第三者たる米國ノ統領ルーズヴエルト氏の**兩交戰國に對する勸告によりて開催**されたのである。かうした事情の下に會議から講和が成立するとせば、それは所謂ピース　パイ　デイクテーション（戰勝國側より指

命の條件による和約）でなくして、ピース、パイ、ネゴシエーション（商議に依る講和）であらぬばならぬことは當然の數である。之がポーツマス會議の特異性として先づ頭にいれて置くべきことである。而も此のルーズヴエルト大統領の勸告は大統領自身の發動には相違ないが、大統領のかうした發動は、實は裏面に於ける日本の外交工作がスウイツチをかけた結果であることは、今日では殆ど周知の事實である。かゝる事情から生れた講和談判であるから、所謂商議による講和の特質として日本側の提出した講和條件が、全部ロシヤ側に容れられるといふことは本質上望み難い所であつた。その結果、結局妥協講和となつて條約の成立を見たのは止むを得ぬ所である、要は、斯くして成立した講和條約によつて日本は果して開戰の目的を貫徹し得たりや否や、戰爭目的を構成する諸要々求を犧牲にして——幾分たりとも——談判を纏めたのであるか否かの觀點から批判さるべきである。此の見地から見ると、ポーツマス條約は殆ど完全に近い成功であると云ふことは、當時現場にあつて、最も悲憤慷慨した一人である私ですら今日は無條件に認める所である。

日露講和はルーズベルト大統領を抜きにしては語ることは出來ない。ルーズベルト氏の樣な性格の、然もリンカーン以來といはれ威信ある大統領がアメリカに居り、然も戰爭を日本の有利に終局するといふ、外交上の一大事業にその人を働かし得たことは、日本にとつて仕合せであり、又大なる成功でもあつた。それと同時にかうした方面の任務に最もはまり役の役者を開戰と同時に舞臺におくつて思ふ存分腕を揮はせた伊藤公、小村侯の深慮を偉としなければならない。この役者とは現に八十餘の高齡を以て今尙ほ國家の重臣として奉仕されてゐる金子堅太郎伯、當時の金子男爵其人である。金子男は米國有力者に多くの知友を有し就中

ルーズベルト氏は海軍次官時代からの知合で、殊に二人ともハーヴアード大學の出身で同窓の誼すらある。日本切つての米國通であり、その又人柄は如何にも米國人に受ける型である。閲歴學識は擧ぐるまでもない。當時の事情に於て米國に對する國民外交特使としては唯一無比の適任者であつた。例へばこう云ふ挿話がある。



當時の外相小村壽太郎男

開戰後間もなく金子男が米國に着くと、當時ロシヤの駐米大使カシニー伯の宣傳的活動は日本で想像された以上に有力であつて、殊に「日本は開戰劣頭先づ大なる國際法違反を犯して居る。仁川海戰がそれだ。中立國たる朝鮮の一港内に於てロシヤ軍艦を砲擊した。斯くの如く日本は國際のイロハをも知らぬ。或は知りながら之を蹂躙した文明國の仲間には入れられない未開國だ」と云ふカシニー伯の活動演説は、可なり米國の輿論に影響を與へて居たが、ニューヨークデ後幾ばくもなく、ハーヴアード大學倶樂部でやられた金子男の演説で、カシニー伯の誣説と其の効果は忽ち吹き飛ばされて了つたのであつた。金子さんの演説は別に七ムツカシイ辯論ではない。こう言はれたのである。「日本が國際違反を行つたつて…、そんな事があるものか、抑々戰爭まで露都に於ける日露談判に當つて居つたのはハーヴアードの法科卒業の栗野(慎一郎)公使である。また外務大臣として栗野公使を指揮して、此の重大外政を爨理して居るのは是れ亦ハーヴアードマンの小村男である。仁川の海戰に日本艦隊を指揮してゐたのはアナポリス(米國海軍兵學校)で教育を受けて瓜生甲氏である。外交はハーヴアードメン、最初の砲火はアナポリスマンの日本提督によつて放たれた。アメリカで教育された此の三人が國際法違反といふ美迦なことをやる事があり得るだらうか!」此の一言で米國知識階級の疑ひが完全に一掃された。米第一歩に金子男はロシヤの宣傳をノツクアウトしたのである。最早受身の辯明の要はなく堂々と日本の政策乃至日本の文化價値をアメリカに向つて啓發的に宣傳することゝなつた。前から昵懇のルーズベルト大統領との交情更に深まり眞に肝膽相照の仲となることの出來たのはかうした金子男のやり口が力多きに依るのであらう。

そのとき小村外相、釘一本
金子伯の活躍に打てば響く

たしか旅順陥落の少し前頃であつたと思ふが、ルーズベルト大統領は金子男に向ひ『戰爭終局の場合、日本が往年の三國干渉の如く再び第三國のために、その正當な戰勝の果實を叩きおとされることのない樣に、自分は努力する積りである』と述べた。此の消息が金子男から電報されると小村外相はれ返し金子男に回電して「ルーズベルト大統領の好意を日本政府は深く感銘する。自然さういふ時機が來たら何分の御配慮を願ふことゝしたい」と、日本政府の名に於て挨拶させた。一體ルーズヴエルト氏は非常な熱血兒で友

人としての談話の際には胸襟を開いて語り、自分が考へて居つた以上の感情や意見を吐露する傾向の人であるように私は思ふ。たとへば奉天會戰後ルー氏は金子男に向ひ「日本はよろしく東亞モンローを主義を國策として採るべし」といふ意味のことを話したことがある。これも米國大統領の立場から熟慮の結果、つたのではなく、當時に於ける日本國民に對する絶大の讃嘆者であつた人間ルーズヴエルトの意衷――と云ふよりは寧ろ感情を披瀝したものと見るべきであると私は思ふて居る。――と云ふのは日露戰爭數年ならずして移民問題又は滿洲の門戸開放等だん〳〵日米關係が本質的變化をたどつて來ると、ル氏は戰艦十六隻より成る大艦隊の世界周航を主として對日示威のためにやらしたのでも分る。斯うした性だとル氏を見出めると前顯金子男の電報に對し打てば響くといふように、一瞬時の遲滯なく而も政府の五名に於てア、云ふ挨拶をさせた小村侯の外交は、所謂電光石火裡に活機を捉へたものといふべきであらう。

當時の金子堅太郎男

斯くして投じた一石を小村さんは戰局の推移に應じて、徐々に而も最も確實に利用し、擴大し、生命化されたのである。奉天會戰の頃にルーズヴエルト氏は、講和問題に關しては完全に列强に對し、指導的の地位を占めて了つたが、氏の對列强活動の指導原理は、小村さんから段々吹き込んだ日本側の意見の複寫そのものであつた。旅順陷落後ソロ〳〵局外列强の間に講和の空氣が動き出す、と云ふよりは寧ろ講和を見越して策動が始まると、歐大陸の或る方面よりは、列國會議說がルーズヴエルトのところに致された。一時はル氏

もそれもだと意が傾かない譯でもなかつたようだつたが、結局日本側の意見に聽從して、列國會議說を芽生へのうちに殺して呉れた。講和條件は全然外交戰國に於てのみ協定し商議し決定さるべく、第三者に於て講和を斡旋するとせば、其の役割は單に講和會議を開かしむることに兩交戰國を接近せしむる丈けに止むべきものだとの日本の注文は、ルーズヴエルト氏自身の主張となつて、六ケしい獨逸のカイゼルすら之に同意した。平和條件は講和會議の開催を俟つて相手方に示さるべきもので、又戰局の進轉と共に變更を見るべきものであるが、そも〳〵開戰原因となりたる重要問題に就ては（一）韓國の自由處分權（二）露國の滿洲撤兵（三）遼島租借及之に附屬する權利（之は主として東清鐵道南部支線を意味する譯である）の日本への讓渡は戰爭の原因に鑑み、又東亞和平の確立のために慮るに於て絶對に日本の必要とするところだ。との日本の立場もル氏の諒得を得た。奉天の快捷直後を記憶するが、小村さんは更に一歩を進めて、遼東租借地以外の滿洲に關する日本の態度は「施政の改善及改革の保障の下に其の占領する地域を支那に還附するにありといふこと」又日本は今日までの戰續に顧み講和條件の一として償金を要求する理由ありと信ずる旨をル氏に通じた。こうした裏面の工作については、金子伯の「日露戰爭秘錄」や信夫淳平博士の「明治秘話二大外交の眞相」に委曲を悉くされて居る。

日本海の大勝で講和本極り

流石の露帝、我慢の鼻を折る

東經營の表象そのものである。之が遂に陥ちた。おモけに東洋艦隊も全滅した。戰爭の山はもう見えた。露西亞が利巧なら今の中講和をするが良いとは世界の定評となり、前にも云へる如くに之れを見越しての列强の暗躍もソロ〳〵始まつたのであつたが、肝腎のロシヤは當時奉天を中心に續々大軍を集結し、一擧に我が滿洲軍を粉碎して奥れんとの意氣込で世界の評判などに耳を傾けもせず、日本としても遼陽、沙河共に流星光底長蛇を逸したるまゝにて講和などとは思ひもよらぬ所で、是非共徹底的の痛撃を敵の滿洲軍に加ふるの要ある次第で、着々準備を整へつゝあつた。かくして醸酵しつゝあつた戰機は遂に爆して來天會戰となり我軍曠古の大捷となり露軍は全く潰敗して鐵嶺以北に逐つ攘はれた。その結果世界は勿論露國々内に於ける講和論も頓に火の手を揭げて來たが、當時露國の内情は小村さんが其頃の議に提出された覚書にあるやうに

『和戰の問題は武斷文治兩派の政權爭奪ならびに、段々國内各方面に火の手の揭りつゝある國家改革問題とも關聯し事態頗た複雜を加へつゝある。その上に今度の戰爭に直接責任を有する一派は勝敗に拘らず交戰を繼續して行くよりほか立場がない境遇に置かれて居ると云始うであつて、此の連中は日に〳〵益々激化を加ふる國内の情勢や世界の輿論などには頓着なく、昂然として戰爭繼續を公言し歐露の新鋭部隊をドシ〳〵滿洲に增遣しつゝあり、一方に於て久しく佛領マダガスカルに假泊して居つたバルチツク艦隊も、愈々三月十六日同地を發して東航の途に就いた』

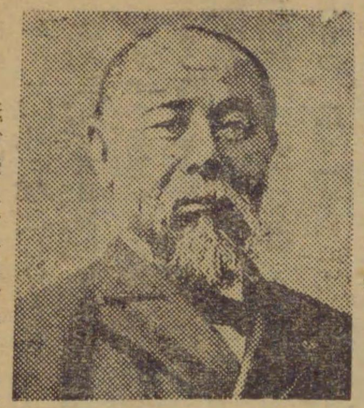
ロシヤの鼻息がこんなに荒く虎視眈々講和仲介の機會を狙つて居るルーズヴエルト氏も、プロツト手の出しようもないと云ふ情況であつた。實は奉天戰後滿洲軍總參謀長兵玉大將が滿洲から内密に歸京されて『陸軍はもうやれる丈けはやつたのだ。今度の大捷利を機會にコヽイラで戰爭終局としたい。何とか講和作進の工作が出來ないのか』と云ふことであつたが、今言つた八日の會議で『帝國としては戰爭はマダ長引くものと覺悟し之に應じ持久の策を講ずるの外はない、就ては

(一) 作戰に於ては我が既得の地位を據守し尚ほ事情の許す限り一層優勝の地歩を占むるに努むると同時に

(二) 外交に於ては事情の許す限り迅速且つ滿足に平和克復を圖るべく適當の手段を講ずべし』と廟議一決した。これは小村さんから提出の意見書通り決まつたものである。

さうした廟議決定の其の日に、恰もバルチツク艦隊が仏領相含んで新嘉坡沖に現はれた。マダガスカル出發以來消息不明のロゼストヴエンスキイ艦隊は遂々東亞の海面に姿を現はした。新嘉坡を通過した敵艦隊は程なく安南のカムラン灣に入り、やがて同支隊の第三艦隊もヂブシイより來て本隊に合し全局の戰運を決すべき一大海戰は日一日と切迫して來た。世界の關心と興味は來るべき大海戰に集中されて、講和問題の取沙汰は自然に一時無沿となつた。程なく日本海の大海戰となり、露國が戰運回復の最後の切札として深く信頼

し居たる遠來の大艦隊は、五月二十七、八日の兩日を出でずして殲滅された。ネルソンの『トラファルガア』を凌駕する（ルーズヴエルト大統領の評語）我が東郷艦隊の全勝は全世界を驚倒せしめ、露國の上下を文字通りに震駭さした。此の機を逸せず小村外相は在米の高平公使に電訓し（五月三十一日）講和の會談に向つて兩交戰國を接近せしむるよう、ルーズヴエルト大統領の斡旋を促したのである、大統領も早速活動を開始し、在露大使マイヤーをして親しく露帝に内謁勸告せしめたるに、露帝も遂に我を折つて『大統領自身の發意により日本政府の同意を得るに努められることの諒解の下に勸告應諾』と云ふことであつた。露帝は大統領の勸告が日本政府の求めに依るの内情を知らなかつたのである。兎に角『結果は上出來だ、變轉常なき露帝の御意の變はらぬ中に善は急げだ、直ぐ日露兩國政府に向つて正式の同文勸告書を發送するから』とル氏より金子、高平兩男へ打合せがあつたので六月七日の夜であつた。僅かに一週間でバタバタと話が纏まつたのだ。



元老伊藤博文公

そこでルーズヴエルト大統領は翌八日、日露駐劄米國使臣に電訓し正式の同文勸告書を各其の任國政府に致さしめた。日本政府への分は九日夜グリスカム公使より小村外相に手交された。

『日露兩國政府は兩國自身の爲めのみならず、文明世界全體の利益の爲めにお互に直接の講和談判を開始せられんことを切望す。談判は全々兩交戰國間に於て直接に之を行ふべく。即ち兩國全權委員は何等仲介者を設けずして會見し講和條件を協定する事に致さるゝやう大統領は勸告する。會合の日時及場所の打合せ等に就ては兩國の御希望とあらば斡旋の勞を吝まぬ』

當時の首相桂公

といふのである。勸告の趣旨は全然小村さんの註文されて置かれた通りである。政府は翌十日附を以て

『露國との平和は其の確實を充分に保障するに足るべき條件の下に之を復立せんことは、世界の利益の爲め將帝國の利益の爲め帝國政府の希望するところなるを以て、帝國政府は大統領の勸告に應じ、全然兩交戰國間に於て直接に講和條件を商議決定するの目的を以てお互の意に適し且つ便宜と認めらるゝ日時、及場所に於て露國全權委員と會合せんが爲め、帝國全權委員を任命すべし』

と回答した。『確實なる平和の復立』が講和會議の目的で、條件は『兩交戰國の直接談判』と何處までもハツキリさせて居るところ水も漏さぬ小村さんの應酬振りである。ロシヤも勸告應諾の正式回答をしたので茲に愈々講和會議開始となつた。會議の日時、場所就中場所については多少の經緯があつたが結局華盛頓で八月開催と決まつた。後華府の酷暑を避くる爲めと云ふのでニューハンプシヤ州のポーツマス軍港に變更された。

敢て出馬せぬ伊藤公の辯

東京で握りしめる綱の一端

さて愈々講和會議だ。全權には誰がなるだらう？　先づ第一に何人の頭にも上るのは伊藤公である。處が今度の講和會議は往年の馬關談判とは譯が異ふ。相手の敵國で力竭きて和を乞ふて來たのではない第三者の斡旋で開催のことゝなつたのである。斡旋者たるル大統領の公文の文句に從へば『兩國の全權委員會見して、以て之等兩國代表者に於て講和條件を協定し能はざる乎を見るに至らんことを勸告す』と云ふのであつて、兩交戰國對等の地歩での會商である。況や手方こそまだ氣が付かぬやうであるが、此の大統領の斡旋たる、其實は方から求めた結果であるといふ內情なのだ。閣下にして此上尙ほ我が提案受諾を躊躇なさるならば、懸案も最早や是れまでゞある。閣下父子が果して無事北京城門を通つて、貴皇帝の闕下に復命し得らるゝやいなやも保證し得られない旨を直言するの已むなきは、博文が閣下と多年の私交を顧み衷心とする處である』と來帆穆一より、今しも關門海峽を西に航行中なる數十隻の運送船隊を指しつゝ李鴻章父子の度膽も拔いて、我が指命の償金割地に屈服せしめたアノ痛快味は、夢想だも出來ないことは分り切つて居る。

處か斯うした內情を知らない國民は哈爾賓屠るべく、浦潮取るべしの鼻息であるのだ。こんな譯で講和會議に出かけたところが、國民の叫采を博するやうな派手な土產も持ち歸へれるどころか、悪くすれば爆烈彈のお見舞を喰ふ位が落ちである。と云ふので伊藤公側近の人々がこも〳〵公に向つて『今度は柱の煽てに乘つては不可ませぬ』と諫言したとか云ふ噂もあつた。さうした世間の取沙汰は兎も角として、小村外相は伊藤公に向つて『御出馬を願はれますまいか、不肖ながら私お供を致して犬馬の勞を竭します』と一應お勸めしたのであるが、結局公は往かれず小村さん自身、高平駐米公使を第二全權として此の大任に鴨られることゝなつた次第だと私は聞いて居る。併し伊藤公の出馬辭退は側近者の言を容れて自重された結果だとは私は思はない。伊藤公自身は己れの持場は東京であると思惟されて居つたが故に、ポーツマス行は始めから問題にされて居なかつたのであると信ずる理由を私は有つて居る。私が伊藤公と言葉を交したのは午涯夕ツタ一回である。それは、元老諸公が築地の瓢家催された小村全權送別の宴席に於てゞあつた。當夜の宴會に於てゞあつた。當夜の宴會には、元老諸公は何れも末席の我々隨員の坐席まで一々杯を持つて廻られていとも懇に接待されたが、中にも伊藤公は私に杯をさしながら『君はドウ云ふ仕事を受持つのか』ときかれるから『私は電信主任であります』と答へると公は『コード（符號）は大丈夫かね。ロシヤに盜まれて居ないだらうか？』と云はれるから『大丈夫と信じてあります。今度の會議のために新に特別の符號を作つたのを持つて參ります。東京との大事の往復は一切ソレでやりますから少くとも會議中は相手方は勿論、第三國の暗號救師にも盜聽されることはないと思つて居ます』

と答へたところ伊藤公は『ソレなら可いが、コードは大切だからなー』と言はれ語を轉じて

『俺はな、今度はコードの一端を東京でシツカリ握つて居るのだ（此のとき伊藤公は Code符號でなくCord 綱或は繩の意味でコードと言つて居られるらしい）俺は小村に「君はコードの一端を持つてアメリカに往く、他の一端は東京で俺が握つて居るぞ」と言つたのだ東京の一端こそ大切なのだよ！』

と附言された。つまり今度の談判の最後の決は現場ではない。結局東京できまるのだ。東京が本城なのである——といふ認識の下に、伊藤公はその最後の決の場合に闕下にあつて献替する、ソレが自分の任務であると云ふ意味に私は理解した。そう云ふ譯で公は決して難きを避けて東京に留まられたのではない。東京には公でなければならない重入の役割があるからであると、私は信じて疑はないのである。

時の元老へ凛然たる應酬

——小村さんの五分の隙なき事前工作

當時の内閣の情勢から見て、兎に角講和全權の任はそれこそ生命を投げ出してゞなければ引受けられない事情であつた。小村侯は實に其の通りの凛然たる決心を以て此の大任を引受けられたのである。瓢家の宴會ではなかつたが、別の機會に伊藤公は小村さんに對し『君が出發の日には見送り人は山の如くだらうから我々は失敬するよ。その代り歸りには我輩が第一に横濱に出迎へる』と云はれた。果して十月十六日小村さんが陰雨濛々たる横濱埠頭に國民の白眼冷視の下に歸着されたとき、遙々大磯の私邸より出かけて來られた伊藤公が第一に握手をされたのである。瓢家の宴會から數日を經て首相官邸で桂首相主催の送別午餐會があつた。伊藤、山縣、松方、井上の四元老に内閣諸公總出であつた。食卓での雜談中元老の一人が外交思出の自慢話をされた。すると平生寡默の小村さんが

『エー、たゞし戰時の外交はどうも藩閥のお方にはお得手でないと見えまして、いつも藩閥外のものに御頼みになります』

とやつた。一陣の白雨滿座の面を襲ふと感じられた其の瞬間に如才なき桂首相は『オイ、山座——あのね——』と山座政務局長に聲をかけ話頭を他に轉じたので春風再び堂座に還つた。

かくて小村さんは、七月三日、高平公使と共に正式に講和全權委員被仰付、越へて六日參内優渥の勅語を拜し、八日横濱出帆の米船ミネソダ號にて私共八名の隨員を從へ米國に向はれた。新橋、横濱は勿論沿道通過の各驛の内外に歡送の市民潮の如く溢れ萬歳の聲は天地を搖がすばかりであつた『アー何のかのと氣焔は揚げるものゝ戰もモウお仕舞だと云ふ氣分だなー』と此の光景を觀て私は竊に感

わが全權一行の送別

じたのである。全權一行の出發の前日樺太攻略軍の先頭部隊が同島に上陸した。

是より先き小村さんは講和會議に於ける日本の立場强化のため、四つの注文を政府にした。其の（一）は最近の深井英五君のお話にも載つて居る通り外債三億圓の追加募集である。之は萬一講和が纏まらぬでも戰費には困らないぞと見せる爲だ。（二）はリネウイツチ總司令官の率ゆる新鋭の露軍に一度打擊を加ふることだ。之れが露國への一番大切な、そして一番效果的な對策であるのだが到頭行はれなかつた。（三）は北韓地方に尙ほ活躍して居る露軍を豆滿江外に擊攘すること。露國をして朝鮮に對する我が自由處分權を承認せしめなければならぬ以上、露軍の隻影たりとも韓半島に置いといては不可ないからである。此の北韓掃淸軍の派遣は護衛艦を付ける付けないの問題で陸海軍にイザコザがあり多少遲れたが、結局全權の米國着頃には實行された。（四）は樺太の攻略で軍部首腦部には何だか火事泥のようでナンテ躊躇の氣味もあつたが、結局小村さんの希望通り行はれた。樺太全島占領終了の公報は確かシヤトルに上陸してから受取つたと記憶してゐる之と前後して片岡中將麾下の第三艦隊は勘察加近海に活躍して盛んに威嚇を加へて居つた。

シヤトルまで十三日の航海中小村さんは例の如く沈思默考、偏へに着米後の作戰を練つて居らるゝもの如くであつたが、同時に朝夕の散步は缺かされたことはなく所謂鋭氣を養ふべく努めて心がけて居られた甲斐あつて、シヤトル着の前夜の如きは（船は同港ポートタウンセンドに假泊す）久水領事の齎した數十通の電報を隨員總掛りで飜譯するのを一々目を通し、午前三時頃に漸く就寢されたのであるが、翌朝は一向疲勞の樣子も見えず、極めて元氣に上陸されたので、豫て大臣の健康を密かに憂へて居つた我々も此分ならばと

大に安神した。

當時は無線電信は極く短距離しか利かぬので、約二週間の久しき全然外界の消息に接せず、シヤトルで受取つた電報で初めて『ウイツテ』が全權となつて來ることを知つたのである。日本を發つときにはロシヤの全權には駐伊大使ムラヴイエツフ伯が任命されて居つたのだ。ム伯は元司法大臣の官歷を有するも要するに一個の官僚に過ぎない。コンナ先生を對手で談判は果して纏まるだらうか少くとも私は氣遣つて居つた。兎に角ム伯に代つて『ウイツテ』が出掛けて來るから、講和會議も漸く本格の軌道に乘つたワイといふのが此の電報を見たときの私の感想であつた。ロシヤも愈々眞面目で講和會議に臨むのだとは世界の印象でもあらうし、仲介者のルーズヴエルト氏も滿足だらうことは想像に難からずであつた。

その滿足の現はれとでも云ふのか、シヤトルで受取つた電報中、高平公使から次のやうな電信があつた。即ち『日露兩國全權が揃つたところで大統領は引合せの爲め一席宴會を催す考へだ。そこで日本側に對し一つ懇に相談し度い事がある。他でもないロシヤは戰ひに敗けてゐるだけに相當神經過敏になつてゐるから、ロシヤの自負心を傷けないようにしたい。殊にウイツテは露廷の重臣中の重臣であるから、日本側で雅量を示し、右宴會の第一席をウイツテに與ふることを同意されたい。と大統領より相談があつたから東

彼に第一席を讓る理由なし

この氣慨も邦人の純情には泣く

京政府に請訓したところ、桂臨時兼任外相からは小村全權の意見を求めよとの回電である。就ては大統領へ如何挨拶すべきか。閣下の紐育御着を俟つて居つては時機を失する憾みがあるから本電御覽次第何分の御訓示を願ふ。と言ふのである。小村さんは之を見られると、即座に私に口授し高平公使に發訓『ウイツテに席次を讓るべき何等の理由も見出さない。付ては席の上下を設くるの必要のないような仕組みの宴席として呉れるように』と返事をさせた。ルーズヴエルト氏が如何に日本最負であつても、其の肚の底には『日本はマダ國際間では一等國の仲間に入つて居らず、ロシヤは大國中の大國であり、ウイツテは其の元老政治家だ』といふ考へがあつたのであらう。

露國首席全權ウイツテ伯

シヤトルに於ける米國側の歡迎は、京濱に於ける本國市民の歡送にも劣らざる盛大さであつた。埠頭には市長を始め米國側各團體歡送委員は約三千の在留邦人と整列して小村全權を迎へ、警官十數名の先導で急造の大綠門を過ぐれば、沿道堵列の幾萬の群集は帽を振り、ハンケチを振り歡呼して敬意を表した。市中の電車も一時進行を停止し、店舗は殆ど擧げて休日の觀を呈し、米國自身の凱旋將軍を迎ふるも之に過ぐべくもあらずと思はれた。

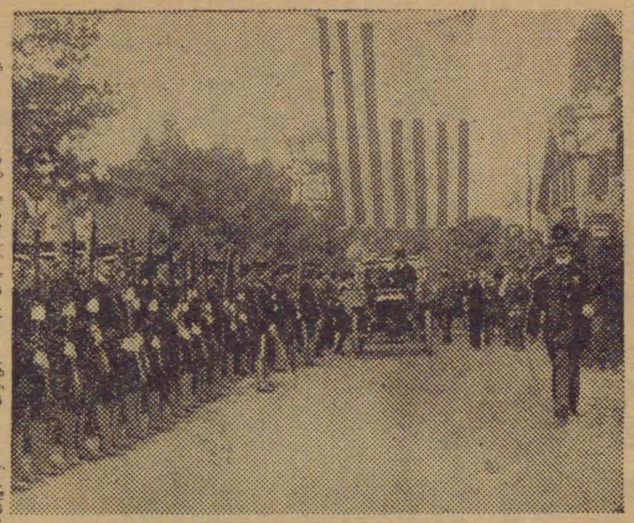
二十日朝シヤトルに上陸して、其晩の急行列車で東に向ひ、シカゴで『二十世紀急行』に乘換へて二十五日朝ニューヨークに着いた。沿道各驛日米人の歡迎の數多かつた中に今に忘れ得ないのは、シヤトルを發つてから翌々日の早朝だつたと思ふが、地名は記憶せぬが人烟稀れなる田舍の一小驛に停車したとき、全權の乘つてゐる展望車の後ろに、見るから田舍もの然たる身裝の、しかし如何にも純朴で且つ剛强な體格の持主である日本壯年が五名、妙な恰好の旗をかついで現はれた。訊いて見ると驛から十數哩距てた森林で働いて居る樵夫である。全權一行通過の噂を聞いて急に立樹の枝を拂つて竿となし、あり合せの白木綿で日の丸旗を急造し、之をかついで夜ぢう歩いて此驛まで敬意を表しに來たのである。展望車のデツキに出て來られた小村さんが『イヤ有難う、ヨク出て來て呉れた。達者でそして皆な仲好くして働いて呉れよ』と言はれた。『ハイ』と恭しく答へつゝ五人は低く頭を下げてお辭儀をしたが、やがて頭を上げたのを見ると雹の如き熱涙が双頰に流れて居る。列車が進行を始めると一同はまた最敬禮をした。我々も眼に涙が浮んだ。車中に還つた坐席に就くと小村さんは、如何にも感に堪えざる如くに『ア、日本人だね！』と嘆聲を發せられた。

紐育に着いた小村さんは早速金子男、高平公使から其後の情勢を聽いてそれから其翌々日即ち七月二十七日高平さんを携へて、オイスター ベイの私邸に待ち受けて居るルーズヴエルト氏を訪問された。

日露兩全權の史的顏合せ

親日大統領は即ち同窓の舊友

大統領から時局について相變らず好意に溢れた話があつた。何分ロシヤ政府に中心力らしいものがなく、皇帝は又朝令暮改の無定見と來て居るし……」と今度の講和會議仲介に漕ぎつくるまでの苦心を物語り「ウイツテに犧牲を拂つて平和を成立せしむることが必要だと、剴切に說いてやる積りだ。しかし此機を逸せば戰爭は尙ほ一箇年は繼續するだらうし、其間日本の戰勝は疑ひなきも、償金を得ることは一層の難事とならう。だから會議でロシヤが無理を云つて頑張るやうなことがあつても日本は須く忍耐以て之に當り、何とか談判引延ばし策を採るがよいと思ふ」などの話もあつた。小村さんは「大統領の御意見と我方の所見とは大體に於て符節を合する。お話の如く今回の談判の厄介なのは、肝腎の露國政府の中心力がないと云ふ點である。だから日本の要求條件も出來るだけ穩當にとの精神で定めた。右條件は講和會議の席上でロシヤ側に提出するまでは何人にも漏らさないのであるが、閣下にだけは特に極めて內密にお目に懸ける」と云つて豫て船中で用意して置いた講和條件箇條書を手交し、各條項につき說明を與へ、尙ほ領土割讓はサガレン島以外には求め



ポーツマスに着いたわが全權一行

ないのだと述べられると、大統領も滿足の意を表した。それからウイツテと會見の模樣は、金子男を通じて內報して貰ふこと、尙ほ講和會議中大統領との連絡は金子男を通じて行はれることに諒解が成り立つた。金子男は引續きニューヨークに居つて其任に當られるので、同男と小村全權間は專用の電信暗號を私の手で別に作成することゝなつた。

ウイツテは八月二日ニューヨークに着、四日第二全權のローゼン大使を帶同して大統領を訪問した。大統領の日露兩國全權の公式引見及び引合せは、其翌日、五日オイスターベーで大統領の快走艦メーフラワー號で行はれた。着米順といふので日本全權が先きに引見された。サロンで待ち受けて居つた大統領は小村さんの手を握りつゝ「私の舊友、私の朋輩が見えた」—Here is my old friend and comrade と云ひ（ルー氏は小村さんと同じくハーヴアド大學出身である）いとも打解けた迎へ方であつた。小村さんと大統領の講和斡旋に對する天皇陛下の深厚なるメツセーヂを披陳し、大統領からは聖上の叡旨に對する答辭は追て作成し傳奏を依賴すべき旨を答へ、それから全權から我我隨員の紹介があつて式を了はると、未だ露國全權の着艦まで七八分の餘裕があるからとて大統領は小村、高平兩全權を隣室に誘ひ、其の前日ウイツテと會談の要旨を告げ尙委細は金子男にオイスターベーの私邸に來てもらつて話すからとのことであつた。要領は「ウイツテの鼻息が大分荒かつた就中償金はウイツテが來たので、とても難題になつて來たと感じられる」とのことであつた。程なく露國全權一行が見えたので我が全權一行は暫く別室に退き、其の間大統領はサロンで露國側全權を公式引見した。但し小村さんに對するやうに式後の密談はなかつた。

ロシヤの運中の引見がすむと、大統領は自らサロンの戸を開ゝて先づ「Baron Komura! walk in plea-e,——小村男爵、どうぞお入りなすつて」「Monsieur Witte! please,——ウイツテさんどうぞ」と相變らず着米順と云ふつもりか、さう云ふ風に案内し歩きながら兩國全權を互に紹介し雑談を交へつゝ食卓に導いた。立食である。シヤトルからの電信で小村さんの注意された通り、席に前後の順序の無いやうに出來てゐる。「どこへでも御隨意に立たれて」と大統領は挨拶して自分は小村さんとウイツテの間に立つた。シヤムパンが注がれると、大統領は兩國全權に囑目しつゝ杯を擧げて「一言の挨拶を述べる。別に答辭は要しない。兩國の元首及國民の福祉の爲め乾杯し、公正且つ恒久の平和成立を、兩國並に文明世界の爲に熱誠懇禱する」と述べ、やがて食卓が濟むる兩國全權を誘ふて甲板に出て記念撮影をなし、それからランチに移乘して歸途に就いたが、メーフラワー艦上から見送つて居る日露兩全權一行の方にグッと向いて、「シルクハット」を片手に「ボン ヴオヤーヂ ゼントルメン」と云つたルーズヴエルト氏の颯爽たる雄姿は、今尙ほ私の眼底に髣髴として居る。

大統領と訣れてから兩全權團は各自に振當てられたる米國軍艦に移乘し、海路ポーツマスに向つた。我々の乘艦はドルフインと云ふ小巡洋艦であつた。海がひどく荒れておまけに濛氣海を蔽ひ一行の多數は大分醉つた。船に醉はなかつたのは小村さんと私位のものであつた。

二人とも船に至つて強いのだが、實は航海中も可なり仕事があつて醉つてる暇もなかつたのかも知れない先づ大統領から洩らして呉れたウイツテとの會談要領を、ニューヨークの金子さんに知らせて更に委細聽取りのため大統領訪問を頼む。本國政府へも電報する。軍艦の無線電信でやる。東京への分は陸上伸繼でと云ふ風に、中々船醉などと云ふ贅澤どころではなかつた。船に弱いウイツテは到頭ニーポートで上陸し、陸路ポーツマスに行きポーツマス港内へ軍艦が入つてから改めて軍艦に乘り公式のポーツマス乘込みをやつた。

特だね『日本人の組織力』

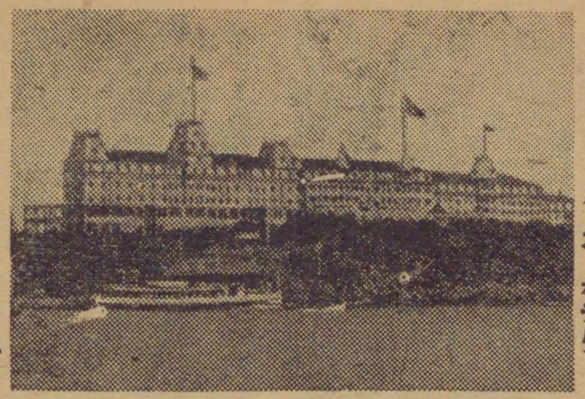
——たつた二時間で事務室成る

我々の乘艦にやつて來て全權に挨拶し、兩國全權は殷々たる十九發の禮砲の裡に上陸した、埠頭には接待主任のバース國務次官、ニューハムプシヤ州知事など出迎へ工廠内で午餐の饗應があり、それから州裁判所に於て州知事のリセブションで土地のお歴々と交驩、それが終つてから郊外六哩の海岸にニューハムプシヤ州廳によつて用意されてあつた旅館「ウエントウオース」に着いたのは午後六時頃であつた。

ニューハムプシヤ州は米國聯邦中最古の——少くともその一つの——小さい州であり、首府ポーツマスは人口數萬の靜かな田舍都會である。從つて碌なホテルもない、ウエントウオースと云ふのは郊外六哩の海濱の避暑旅館で、木造二階建設備萬端お粗末千萬である。此處へ日露兩全權團一行の外、米國は勿論、世界各國の新聞特派員おまけに、講和會議見物の意味での避暑客が押しかけたのだからたまらない。

ポーツマスに着いたのは八月八日の午過ぎであつた。會議場たる軍港工廠の廠長ミード少將が

かて〻加へてコンなお客を引受けた經驗のない州政府のお客に、我々がなつた譯だから、兩國全權團にも唯人數に應じての室を當てがつたと云ふだけで、氣の利かぬこと夥しく着いて見れば事務室などの用意がない。唯貧弱なる寢室のみである。既に全權宛數十通の電信も來て居るのに事務用のテーブル一つすらない。そこで兩全權とデニソン顧問以外は皆寢部屋一つで我慢して貰つて、事實上の事務總長少くとも全權官房長の役目である私は、埴原書記官と風呂付寢部屋一つにベットを並べて寢ることゝし、之れに隣接せる寢室を急製事務室に變造した。事務室と云つても机一つないのだから、ホテルの支配人を呼んで一長さ二間幅一間位のテーブルがほしい」といつたら「ありませんが、粗末な白木のテーブルで可ければ今からホテルの大工にこしらへさせませうか。今夜中には出來ます」と云ふから大至急り上げろと命じた。之が八時頃に出來て來た。ホテルに出張してゐるコンマーシャルケーブル會社と今一つの電信會社の出張員とに談判してホテル内に臨時に出來てる兩會社の電信室と、我々の事務室との間にベルの線を通させて「コムラ ポーツマス」と云ふ宛名の電信が來たら向ふから拝す、さうすると事務室でベルが鳴る。こちらから出す電信の用意が出來たらこちらの事務室でベルを押す、さうしたら電信局員が取りに來ると云ふ仕



全權の宿所（ウエントウオース ホテル）

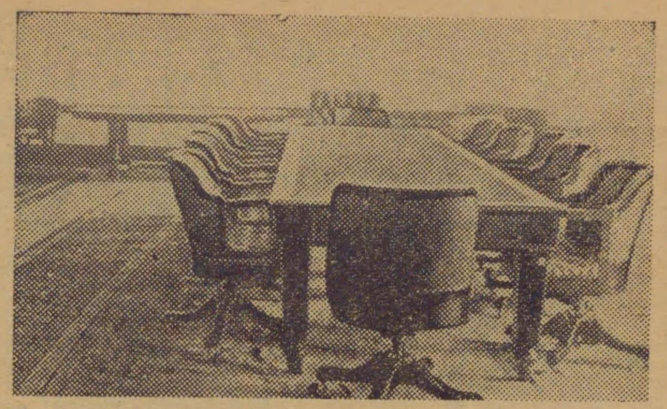
組みにした。コンマーシャル ケーブルは東京との通電、今一つの方は歐米との通電にと云ふ風に二大電信會社に對し所謂「公平なる肥料の分配」を行つたのだ。

夜の夜中でも『コムラ ポーツマス」と出たらすぐ電信局からベルで知らせる。こちらはちやんと受電の用意をする。ベルは事務室の第二室即ち奥の方に宿直して居る書記生のベッドの上で鳴るやうにこしらへた。ホテル内に着いて二時間も經たない内に事務室がチヤンと出來た。私と埴原と二人の書記生とは食堂にも降りずに、今出來て來たばかりの白木のテーブル上でサンドウイツチを取り寄せてカジリながら仕事を始めた。夜明け頃までかゝつて漸く數十通の電信を片付けた。

此の二時間での事務室急造就中電信會社出張所との其夜の中に米國新聞記者の特種となつて、翌九日のボストン、ニューヨーク、シカゴ等の各紙には「Japanese Organization 日本人の組織力』と云ふ大々的見出しで事委しく出て居た。ロシヤ側事務當局の鈍重ならびに混雜さと對比して、コヽが今度の戰ひでの勝敗の原因であるとまで書いた新聞もあつた。

さう云ふ譯で講和全權團の爲の特別食堂などの設備など無論ない。一般食堂内の然るべき地位に、適當の距離を置いて兩全權團の食卓が出來て居る。ウイツテは後には大抵居室に取寄せて食事をして居つたやうだが、小村さんは常に一般食堂に行かれた。

八日の晩食堂でローゼン男を介しての打合せで——打合せと言つても用向を書いた名刺の取り換はし——翌九日午前十時軍港内の會議室で非公式會合を行ふことゝなつた。其の非公式會合で會議の用語會議書記官



準備成つた議場の内部

としての列席者、會議錄の調成方、さては新聞への公表方等々各般の手續問題の協定を了し、翌十日から本會議を開始することに打合せが成つた。我方からの會議書記官は佐藤愛麿公使（後の駐米大使）安達一等書記官（後の駐佛大使、國際司法裁判所判官）落合二等書記官（後の駐伊公使）の三名。

ロシヤ側からはブランソン、コロストヴエツ、ナボコフの三名である。我が一行中デニソン顧問と山座局長は全權の相談役とでも言つた恰好で、毎日全權に隨いて談判場に往つた。但し會議の席には出ないので全權の控室に控へて居るのだ、ロシヤ側の斯うした役目には主として駐支公使ボコチロフが當つて居つたやうだ。

會議は毎日午前午後と二回である。大抵朝十時から始まつて濟むのは午後六時過ぎ、ホテルに歸ると小村さんが其日の討議の經過を山座局長に口授して、之が山座君の名文名筆で本國政府への電文となる。私も時々手傳つて筆を採つた。電文は出來て兩全權のサインが濟むと、私の手で發電となる。大抵午後十時位からである。私と埴原と二人の書記生で暗號に直して出來上ると例のベルを押す。電信會社の出張員が來て之を受取つて持つて行く。一々チツトブツクにサインさせてから渡す。電文が大抵義濃罫紙に十五六枚時には二十枚もの長いものであり、東京政府へ發電と同時に駐英公使へ轉電（同公使より更に在伊、獨、墺の各公使に轉電せしむ）するので仕事が濟むのは大抵午前二時頃であつた。私は電信主任だが、他の隨員の擔當してゐる事務も皆私の事務室で行はれる。電信室即ち全權事務室で、自然に私が事務長のやうな工合になつてしまつた。私の補助は埴原在米三等書記官（後の駐米大使正直氏）で、下に書記生二名、同僚の小西秘書官は會計及大臣の身邊の雜務で會議所にお供したり、來電輻輳の時に止まつて私の方の手傳ひをした。時差の關係で入電が多く晝間であつた。講和に關する往復の外何分外務大臣自ら出かけて來て居るのだから、重要在外公館と本省との重要往復の大部分がポーツマスに轉電されて來る。中々の多忙であつた。陸軍の立花小一郎大佐（後の大將）海軍の竹下勇中佐（後の大將）は言ふまでもなく、所謂純然たる專門委員だ。必要の場合軍事々項の諮問に應ずるのみである。ポーツマスに行つた一行中兩全權は素よりのこと、十名の隨員も前後相踵いで他界し、今は僅かに私と竹下君だけが存するのみである。顧みて洵に感慨無量である。

談判開始・講和條件の裏表

わが國家柱石四巨頭の合作案

餘談が長くなり過ぎたが、九日の非公式會合での打合せ通り愈々翌十日の午前十時から本會議が開かれ、小村全權から十二箇條より成る我が講和條件個條書を提出した。之に對しロシヤ側に於て研究の上

回答書を出しそれから逐條討議にかゝるべく、ロシヤ側の對案脱稿まで一時休會することゝなつて當日は別れた。

すべての外交談判に駆引が不可避的に隨伴する。我講和條件にも當然に若干の裏表があるのである。玆でチョツトと秘話に入るが、一體小村さんは三十七年の八月遼陽及び旅順に對する陸軍の作戰開始の直前に、旅順遼陽の陷落（旅順は數日間の攻擊で陷るものと大本營で想定して居たのである）で戰局が一段落を告ぐものとして、萬一にも講和の談が持ち上つて來ると言ふやうな場合を假想して豫め一の講和條件私案を立案し、奉天會戰の前後更に推敲を加へ未定稿として柱首相に提示された。伊藤、山縣二元老も此の小村さんの擬案に同感を表された趣である。爾來戰局の推移と共に此の四巨頭の間には、右の小村案に基いて講和條件の攻究が重ねられて居たと信ずる理由を私は有つて居る。ところが日本海の大捷を契機に愈々ルーズヴエルトの講和斡旋が成功し全權簡派の場合となつて來たので、桂總理は豫て按畫の大方針に基き、六月三十日の閣議で帝國の要求條件を決定し我が講和全權委員に對する內訓として七月五日陛下の聖裁を仰ぎ翌六日を以て之を小村さんに授與されたのである。其內訓の內容は信夫博士の「二大外交の眞相」に掲げられて居る通りであつて要するに講和會議に提出さるべき我が要求條件は

（甲）戰爭の目的を達し帝國の地位を永遠に保障する爲緊要缺くべからざるものとして、飽くまで貫徹を期すべき絕對的必要條件

（乙）事情の許す限り、之が貫徹に努むべき比較的必要條件

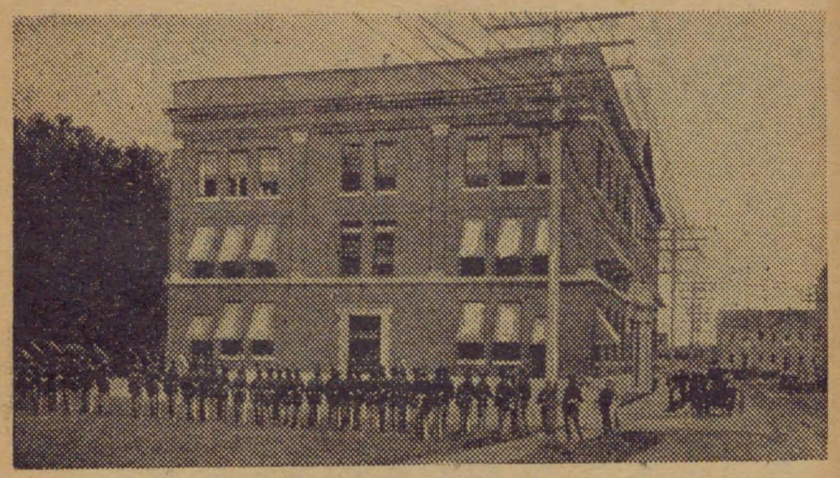
（丙）取捨運用を全權委員の裁量に委任する附加條件

の三種に分たれ、而して其各種條件の要目は

（甲）絕對的必要條件（一）韓國を全然日本の自由處分に委することを露國をして約諾せしむること、（二）一定期限內に露國をして滿洲より撤兵せしむること、（三）遼東半島租借權及東淸鐵道南部支線（ハルビン旅大間鐵道）の讓受

（乙）比較的必要條件（一）戰費賠償、（二）中立國竄入露國艦艇の交付、（三）サガレン及び附屬諸島の割讓、（四）沿海州漁業權の獲得

（丙）附加條件（一）極東に於ける露國海軍力の制限、（二）浦潮港の武裝解除



ポーツマスの會議々場（海軍工廠）

であつて、其他通商條約のことだとか、俘虜交換だとか云ふ普通に講和條約に當然規定を要する細目は全權の適宜裁量に委されたのである。

要するに右（甲）種條件の三項は是非共貫徹すべし（乙）種の四項は出來るだけ取付けるが談判不調を賭してまでもといふのではなく（丙）の二項は所謂談判場裡に於ける駆引材料として並べるものと解すべきであらう。尚右内訓の末段には

談判の經過は時々詳細に報告せらるべきは勿論、若し不幸にして談判不調に歸せしむるの場合に遭遇せば豫め電報し、回訓を俟ちて適當の措置を執らるべくと念書が付いて居る。國家の興廢安危に關する重大問題の處決上國家とし、政府として當然の用意であり思慮であり誰が全權で行かうと斯うなくてはならない譯だ。

右の内訓に擧げて居る九項を適當に條約文案の體裁で十二ケ條に書並べたのが、八月十日午前の會議で小村さんからウイッテに手交された我が講和條件書である。

まさに鳶と鷹との大取組

李鴻章張りの誘ひには乘らぬ

李鴻章は狀貌魁偉の大男であつたが、ウイッテもまたロシヤ人でもズバ抜けた——六尺を超えた偉丈夫で、日本人でも小男の方である小村さんとの對比は、何人の興味をも唆らずに置かない。ウイッテも小村さんに劣らざる喫烟家だ。但し、小村さんの擧正端正威儀儼然たるとは違つて、引切りなしに吹かすシガレットの灰がフロックのチョッキの上に頻りに落ちる。それを時々手で拂ふ。灰がチョッキの上に斑々として居る。洗練された歐洲外交官を見慣れて居る私には、寧ろ無頓着な東洋豪傑流に見えるウイッテ氏は、其偉大なる體軀と相俟つて、流石に露國の元老政治家の貫祿が備はつて居るやうに感じられた。特長は鼻のさきの赤いことで、若い時分のウオツカのせいでないかと思はれた、一體の風丰擧動、太いと云ふ感は與*體完全に均勢が取れて、鋭いがしかし涼しい眼ざしで姿勢端直、威重ある歩趨の小村さんが鷹だとすれば、大きいが何となく粗大なウイッテは鳶のやうに思はれた。鳶と鷹の取組が愈々始まつたのである。

ポーツマス會議と馬關會議とはその成立ちが本質的に異つて居ることは冒頭に指摘した通りであるが、しかし會議の成立ちがどうあらうともロシヤが戰ひに負けたのには間違ひない。世界中の強大國中の強大國と自他共に許されて居つた露國は東洋

馬關會議の李鴻章と署名

◎へるが何分氣品に乏しい、何としても地位の低い鐵道技師からたゝき上げた實務家らしい感じを與へる。彼我首席全權を並べたところ、小さいながら四肢五

の二等國に見ん事負かされたのである。甘點に於ては當年の支那と同じである。そして清國重臣中の第一人者たる李鴻章が馬關會議に來たのと、世界的名聲を有するロシヤの元老政治家ウイツテのポーツマスに來たのとは、正しく好個のアナロジイである。昨日まで東洋の二等國として輕く扱つて居つた日本、而も其の二等國の公使として露都で識つて居つた小村さんから、講和條件を渡されると云ふ場面に立つたのはウイツテとしてはつらい所であらう。かう云ふ立場に置かれると少しでも自分の地歩を高く維持しようと努めるのは、人情の弱點と云ふよりは寧ろその自然であらう。オイスター　ベイでの謁見式後メーフラワー艦上の記念撮影で、小村さんが沈着に緩歩するに引き代へてウイツテが、急ぎ足で大股に歩いてイチ早くルーズヴエルトの右に位置を取つたのを見たとき、私は其の圖々しさを憎むよりは寧ろ敗者としての屈辱的地位を掩はんとする彼れの苦心焦慮に同情した。

馬關會議の劈頭、李鴻章は伊藤さんに向つて、講和に對する清國の誠意を說き「清國にして和睦を切望するの誠意なくば、特に予に命ずる此の重任を以てせざるべく、余も亦講和の必要を感ぜざれば敢て此の重任に當らざるべし」とて、暗に自己の身分を擡ち上げて我方の信任を博せんとしたと、陸奥伯の蹇々錄に冷評されてゐるが、ウイツテもポーツマス會議の劈頭、自己の帶有せる全權委任狀に露帝が「朕は朕が全權委員に於て本委任狀に基き決定　締結及び記名調印する所のものは、總て朕が意に適するものとして裁可し、之に批准を與ふべきことを誓約す」とある文句を指摘し、露國の慣例では皇帝陛下に於て充分の信用を措かれない全權に對しては、かう云ふ文句の委任狀が與へられない。例へば露土戰爭後の講和委員シユヴアロフ伯

等に與へられた全權委任狀は、今回の如く充分なものではなかつた。クリミヤ戰爭の時の講和全權オルロフ等に與へられたのは、今回の自分の戴いたのと同樣のものである。人により場合により御委任の程度が同一でないのだ。ロシヤの全權委員の權限が曖昧のものだらうなどと新聞紙上で取沙汰されて居つたが、自分等の權限は之で御明識下さつたであらう。とて自分の重任を誇示した。

それから又李鴻章は「日淸兩國は亞細亞に於て常に歐洲强國の猜視を免れざるの二大帝國である。今や西洋の大潮は日夕我が東洋に向つて流注し來りつゝある、是れ實に兩國が同心協力、之が防制の策を講ぜねばならない秋である。黃人種相結合して白晳人種に對抗するの用意を怠つてはならない。今回の交戰は幸に此の兩帝國の自然的同盟結成の妨害とならないのだらうと信ずると」日淸聯盟の大風呂敷をひろげて暗に講和條件の緩和を諷したが、ウイツテも亦八月十日第一回の會議で、我が講和條件餘條書授受の際、「此場合職務を離れ一個人として小村男爵に對し最も熱誠の敬意を表し、且つ一言卑見を述べたい。吾人は單に一時の平和を結ぶ爲めの條件を議するに止まらず。吾人の義務として貴我兩國の間に永久鞏固なる平和を成立せしめんが爲め、適當なる條件を議定せんと欲するのである。斯くした平和を設定せんが爲には、主として貴我双方行動の範圍を畫定し、各自の行動範圍に屬する地域に於ける行動に對しては、お互に何等の干涉又は妨害を加へざるのみならず、尙ほ進んで一定の場所と場合に於ては、兩國互に政治的のみならず、軍事的幫助をも與ふると云ふとこまで約定するにある」と述べ一種の日露同盟を暗示した。方さに馬關會議の李鴻章と異曲同巧の斷引を試みたものである。小村さんが對手では折角の斷引も手ごたへがなかつた。私は其の晩

落合から此の一齣を聞いて「ア、矢張り小村さんが來たので好かつた。他の人であつたらチョッと釣込まれたかも知れないと思つた。

鐵道問題、一言急所を突く

小村全權が取つて置きの爆彈

我が講和條件尚條書に對する露國側の回答書は、十二日午前提出され、會議は直ちに講和條件の逐條討議に入ることゝなつた。露國の回答は滿韓問題に關する我要求諸項に對しては、或るものは大體同意或るものは、隨分勝手な意見を羅列しながら、正面的拒絕とまでは往つて居ないが（一）サガレン割讓（二）戰費賠償（三）中立國竄入艦艇引渡（四）極東に於ける海軍力制限の四項に對しては、或は露國は征服されたる國にあらずとの理由の下に、或は又國家の威嚴と兩立せずとの理由の下に、何れも斷然たる不同意を明言して居り、早くも談判の前途の容易でないことを示して居つた。八月十二日から十七日まで連日の會議で講和條件は、我が提案第十二條漁業權問題（之は露國側回答書に於て同意を表して居る）を除き全部議了其の中滿韓問題の各條だけは先づ我方の主張通りに纏まつた。

滿韓問題に關する我要求に就ては、先方も初めから主義としては諦めて居つたのであらうが、それでもなほいろんな附帶條項や文句をつけて、幾分でも我が提案の効果を減殺すべく可なり執拗に鬪つた。先づ第一條の韓國問題に付てはロシヤ側は「日本が韓國に於て必要と認むる指導、保護及び監理の措置を執るに當り之を阻礙し又は之に干涉せざることを約す」には異存がないが「但日本は前述の措置實行の爲めに韓國皇帝の主權を侵害すべからざるものとす」との一項を附加せんことを提議し「日本の提案通りの條文では、日露兩國で以て韓國といふ一個の獨立國を滅亡さして了ふやうな觀がある。ロシヤは日本が韓國に於て如何なる行動を執らうとも毫も之を妨ぐる意思は有たないが、列國に對する關係上、韓國の主權尊重の趣意だけは條文に明示して置かねばならない」となか〳〵頑强に主張したが、小村全權は「韓國のことに關し日露間に誤解の生ずるやうなことなからしむる爲には、露國は韓國に於ける日本の完全なる自由行動權を承認することが絕對に必要である。露國が我が提案通りの約定を與へた結果、萬一列國から何等かの質問を受けるやう

歷史的大會議

（日本側前手）左から安達氏　落合氏　小村全權　高平全權　佐藤

（露國側）右　使公　ポナフホフ氏　ラブンソンラブ氏　ロコ男爵　トスロツイツ氏　全權

なことのあつた場合には、露國は單に韓國に於ける日本の自由行動を承認したのだと答へれば可いのである。今後日本が韓國に於て執る所の行動につき、他列國より何等故障が起るような場合があつても、之れは日本のみが關係すべきことで、ロシヤの責任とは何等關係がない。況や韓國主權の一部は既に昨年の日韓議定書によりて日本に委任せられた。同國は日本の承諾なしには他國と條約を締結し得ない立場に置かれて居る。斯くの如く韓國の主權は今日既に完全なものではないのである。だから韓國の主權尊重を條約文に現はさうと云ふロシヤ側の對案は我方として斷じて容認出來ない」と突刎ね論難數時間の後ウイツテも漸く屈服した。

しかしこれよりも更に論爭の激しかつたのは、東清鐵道南部線及び附屬炭坑の讓渡問題であつた。ウイツテの言ひ分は、

（一）該鐵道は東清鐵道會社と云ふ一私法人の財産である。だからロシヤ政府に於て之を取り上げて日本に委讓することが不可能である。併し支那政府は同會社の特許契約上一定の年限後には之を買收するの權利を有つて居るのだから、ロシヤ政府は同會社に內諭して右年限に拘らず、此際之を支那政府に賣渡させ、其賣却代金を日本に轉交することゝする。要するに該鐵道がロシヤの手から離るれば日本も滿足さるべきであらう。

（二）それから前述の方法でロシヤから分離さるゝのは、該鐵道線路中現に日本軍の占領下にある部分に限るべきは當然である。

と言ふのである。「それでは日本が何を得るのだ」と小村さんが反問すると「日本は其現に占領しつゝある鐵道に對する代金を得ることゝなる。尤も支那が前述の如く買上げた鐵道を支那から日本に讓り渡さしても、ロシヤは苦情は言はぬだらう。何れの途、日本は現に占領中の鐵道の代金又は鐵道其物か二者其の一を得ることゝなるだらう」とかう云ふのだ。小村さんは「日本の要するのは鐵道そのものであつて、若干金額の金ではない、此の鐵道は本來遼東租借地と共に日本に對する脅威を構成してゐたものであるから、將來の平和のため是非共日本の手に收めねばならない」所以を痛論して迫つたが、ウイツテはどこまでも、東清鐵道會社の私有財産だといふ論據に膠着して動かず論難數刻果てしもなく見えた。そこで小村さんは遂に取置きの爆彈を投げて「否、此の鐵道は決して貴全權委員の言はるゝ如き一會社の私有財産ではない。そも〳〵東清鐵道なるものは一八九六年モスコーに於て調印された露清秘密條約を根源とするものではないか」と喝破された。

露清同盟密約を白日下に

ウイツテ忽ちしどろもどろ

此の秘密條約なるものは露帝の戴冠式祝賀特使として行つた李鴻章と當時の露國外相ロバノフ公爵との間に調印された同盟條約で、爾來固く秘密を保たれて居つたのであるが、確かポーツマス會議に行く數ケ月前に北京の我公使館の手で一種の手懸りから、正確なる條約正文を支那側より極秘に入手し得た

ものである。横濱よりの船中私が大臣の命で之を英譯し、大臣自身此の譯文を校訂して一部の淨書を手許に止められたのである。

「莫斯科調印の秘密條約が根源ではないか」との思ひ懸けない小村さんの一言に、愕然としたウイツテは器械的に「然り、其の通りである」と首肯した。

茲に於て小村さんは語を進め、

「此の莫斯科條約には、本鐵道の目的は、露國が清國を援けて日本の侵擊を防ぐ爲めの露國軍隊の輸送するにありと明記されて居り。此の鐵道は右露清條約により軍事鐵道たることを意味されて居ることが明瞭である。東清鐵道會社なるものは外觀を粧ふためにこしらへたものであつて、其の實、本鐵道はどこまでも露國政府の事業である。露國政府は其の欲するがまゝに此の鐵道を處分出來るのである」

と論破すると、ウイツテは、「小村男が其處まで御承知あるならば自分の力からも虛心坦懷の打明け話をしたい。此の話は會議錄に載せないことに願ひ度いとて、書記官の筆記を中止し

「シベリヤ鐵道の浦潮までの延長工事上、黑龍江沿岸迂回の厄介さに頭を惱まして居る折柄、恰も戴冠祝賀特使として來た李鴻章が自分（ウイツテ）と會見の際頻りに日本に對する恐怖の意を漏らしたので日清再戰の場合の援助を好餌として北滿洲橫貫（斯くすれば約六百露里線路が短縮する）敷設のことに同意させることを自分が思ひ付いて、マンマと李鴻章を釣り込んだのだ。密約談判も終始自分が衝に當つたのであるが、日本を目標として同盟など、本氣に考へたわけでは毛頭ない。其證據には現に義和團事變の際ロシヤは日本其他の列國と共に北清で戰つたし、今度の戰爭にも毫しも此の同盟密約の履行を支那に迫つたことがない。なるほど條約文面は日本に對する共同作戰を目標としての相互援助の盟約となつて居るには相違ないが、實はシベリヤを浦潮連絡線路敷設工事の簡易化のためにしたインチキ手段に過ぎなかつたのである。誤解のないやうに眞相をお話する」

と縷々辯明した。

急所を衝かれてからウイツテもソロソロ退却戰をやりだして、先づ彼の主張の第一點、讓渡力法では鐵道自體の直接讓渡に屈服したそれから第二點、讓渡區域の論爭となつた。

我方はハルビンまでを要求し彼れはドコまでも日本軍の現實占領下にある區間（當時我滿洲軍の第一線は大體法庫門、昌圖の線であつた。だからウイツテの主張の如くにては昌圖以北の線路はロシヤの手に保有することゝなるのだ）で頑張り、論爭を重ねた結果漸く長春吉林の間の線路は日本の手に委する云ふ條件で（此點は双方全權の署名する會議錄協定として記錄された。吉長線は是より先き既に吉林將軍との約定で、ロシヤ側が敷設することになつて居つたのだが、戰爭のため着手に至らなかつたのである。長春を以て彼我鐵道の區切點とすることに纏まつた。

この鐵道問題の討議は午前九時四十五分から始まつて、書飯後チョツと休憩したゞけで午後六時すぎまでかゝつた。東清鐵道の產みの親だけにウイツテは我が要求に對し眞に掛引以上の眞劍味で鬪つた。前後七時間の論戰に流石の巨時も大分亢奮して遂に自制を失つたエピソードがある。卽ち話が漸く纏まつて序に滿洲

に於ける兩國鐵道の軍事的不使用の相互的聲明をしようと云ふ段になつて、小村さんは「但し此の制限は遼東租借地には適用なし」との條項を附して條約の一ケ條とすることに同意すると言はれると、ウイツテは、「諾、但し露國領内の鐵道に對しても同樣除外の規定を要する」とやつた。餘りに珍提議に列席のロシヤ側書記官連から先づドツと爆笑が擧つた。ウイツテ滿面朱を注ぎ

「諸君何を笑ふ！　滿洲鐵道と雖も露領内に亘り居る部分があるではないか、此の除外は必要である」と部下をたしなめにかゝつた。小村さんは靜かに

「兩國の領域内にある鐵道の使用については何も問題を生ずべき理由はない。たゞ遼東租借地は特殊の事情にあるのだから、將來萬一の誤解を豫防するため特にハツキリ附記して置く要があるのみだ」と諭すが如く述べられるとローゼン男は「小村男の云はれる通りである」とやつて、ウイツテも納まつた。かうして纏まつたのが條約第七條の條文である。一體ロシヤ人には風貌魁偉に似ず至つて神經質なのが多いが、ウイツテもその例に洩れず却々の神經家で、談論が急剛に來ると焦き込んで來る。フランス語を使ふのはもどかしくなつて途中からロシヤ語でやり出す。さうなるとやゝともすれば附添ひのプランソン書記官あたりからお節介な忠勤的助言が出て、端なく内輪同志の私語が展開された場合すらあつた。さう云ふときには何時もローゼン大使が、ウイツテの論旨をば洗練された英語で體裁よく取り繕つて、我が小村全權に取次ぐ。斯う云ふ風にローゼン男は多くの場合最高級の通譯官といふ役割をやつたが、我が高平公使には素よりかうした役割を生ずるべくもなかつた之を要するに日露双方とも第二全權は獨自の資格で何等意見を吐いたことがなく、忠實なる附添ひの役目に終始したのである。

天井拔けの露國側の强氣
一留も一吋の地も讓られぬ

斯の如く我が廟議決定の各種條件中（甲）種卽ち「開戰の目的と帝國將來の地位確保に關する絕對的必要條件」たる滿韓問題に付ては殆ど元全に我主張を貫徹し得たるも（乙）種卽ち「出來る限り貫徹に努むべき比較的必要條件」に至つてはロシヤ側は漁業權問題の外全部拒絕、就中我れの最も重きを置くところのサガレン及戰費賠償についてはウイツテは

「露國は今日まで戰運には惠まれて居らないが、さりとて所謂城下の盟を餘儀なくせらるゝが如き立場にあらず。成る程今までの戰歷では露國は遺憾ながら連戰連敗と云へよう。然し露國は未だ敗衂國ではない。況や斷じて被征服國ではない。優に戰爭繼續の能力を具へて居る。萬一沿海州、黑龍州の二州が今後日本軍に占領されるやうなことがあつても露國の國運――國としての活力には寸毫の損傷も受けない。償金割地と云ふが如き屈辱的條件を以て平和を買ふことは日本軍が莫斯科まで來りたるとき、初めて問題となり得るのである。今までは露國に武運がなかつたのは事實であるが、今後も戰運に惠まれないとは斷言出來ない。サガレンに付ては漁業其他商業的企業の擴大な權利を、日本に向つて承認することには異存がないが領土權の割讓は同意出來ない。若し夫れ償金――日本の提案には戰費賠償とあるも

ウイッテ伯（右）とローゼン男（別項の手記執筆者）

それは用語の問題で賠償即ち償金である――に至つてはクリミヤ戰爭の場合でさへ戰勝國たる英佛側では問題としなかつたではないか。平和回復に心からの熱意を有する自分でさへ、日本に償金を拂ふ位ならば寧ろその金を使つて戰爭を繼續した方が可いと思ふ」と

斯ういふのだ。小村さんは又小村さんで

「日本も亦素より續戰の能力と覺悟を有し、而も續戰の場合の戰運については最も確乎たる自身を有して居る。さりながらお互ひは斯く事局を自然の成行の奔馳に一任することなく、兩國眞正の利益と全世界人類の福祉に對する文明大國としての責任に鑑み、公正妥當の平和回復を圖るべく、玆に會して居るのではないか。露國全權は割地と戰費賠償に付き頻りに屈辱云々の言をなされるが、さうした國家の威嚴論も見方によつては寧ろ一種弱點の發露とも觀られる場合もある。サガレン割讓は屈辱だと云はれるが、ロシヤは從來屢々他國から領土の割讓を受けられて居る。かうして割讓はロシヤの方でその對手國に屈辱を與へるつもりで求めたり、受けられたりしたのではあるまいと思ふ。有體に云へば明治初年の千島、樺太交換以來日本人はロシヤのサガレン領有を以て日本國の安全に

對する脅威を感じて居たのである。さうして今回の戰爭で占領の結果、同島回復は國民の牢固たる意思化したのだ。戰費については我方の求むるのは實費の拂ひ戻しに過ぎない。何等間接的又其は因緣的の要償は一錢たりとも含んで居ない。戰爭の原因と開戰以來の戰績に徵し、之を要求することは正當の理由あるを疑はない。斯る實費の拂戻に應ずることは、戰敗國に課せられた償金支拂とは違ひ毫も屈辱を意味するものとは考へられない」

と、あらゆる論據、あらゆる視角から彼れの論旨を反駁して反省を促し論戰數日結んで解けず、談判全くデツト・ロツクに陷づた。

其處で小村さんは豫て斯かる場合を豫想して立てゝ置かれた腹案に依り、十八日の會議に於て

「若し露國全權委員に於て調和の精神を以てサガレン及戰費の二問題を考慮するの意嚮あらば、日本全權委員は海軍力制限及中立國竄入艦艇交付の要求を撤回するの覺悟あり」

との覺書を提出したところウイツテは

「此の場合陪席の書記官を退け、双方全權委員のみにて秘密に談合したい」

とて小村全權の同意により非公式に意見交換を試みたる結果、兩國全權の關する限り、一應の妥協私案（日本はサガレン北半を露に還付し、露國は之が代償として一定金額の支拂をなすこと、この方式の下に同島を日露間に二分すること）を見出したので、各自本國政府の指揮を仰ぐことゝなつた。

小村全權が右の經緯を政府に打電したのに對し、政府からは早速妥協案を是認して來た「代償金額も適宜に減けてよろしい。是非妥協案によつて商議を進行させるように」とのことであつた、是より先、談判行詰まりの情況を金子男を通じてルーズヴエルト氏に内報して置いたが、ル氏は十九日ローゼン男をオイスター・ベーの私邸に呼寄せて、此際和局の成立に向つて十二分の奮發をなすようウイツテへの忠言を依囑し、尙金子男の續報で前段日露全權の妥協私案を知るや、露帝に對し右妥協案受諾を勸告する剴切痛烈の電文を草し在露大使マイヤーに打電して露帝に捧呈を命ずると同時に、ウイツテにも其の寫しを轉送し皇帝に電奏せしめた。ローゼン男が大統領によばれたとき「大統領閣下に於ては少しはロシヤの事情をも察せられたい」と言つたとのことであるが、實際露國全權の立場は餘程困難となつて居つたのである。即ち露國の情勢はウイツテの本國出發の頃とは全然一變し、リネウイツチ將軍麾下の滿洲軍の增大充實につれ、軍部首腦は内外相應じて戰爭繼續の意見を奏陳し、一方宮中府中に蟠居するウイツテの政敵連は又何とかしてウイツテの足を掬つて失脚させてやらうとの思惑から、軍部と相呼應して頻に强硬論を吹き立て、露帝を動かした結果、露帝の態度は極端に硬化し、現に前述大統領の勸電捧呈のため謁見したる米國大使に對し「朕は斷じてあの妥協案に同意を肯じない。寧ろ全露國民に愬へ朕自ら陣頭に立ちて滿洲の野に出征せんと欲す」と答へ、ウイツテの請訓に對しても妥協案絕對排斥の回勅を與へた（露國の文獻によれば、前述ウイツテの電奏文に對し、帝は其の電文の端に「一吋の地も、一ルーブルの金も日本に與ふべからず、何ものも朕をして之より一歩をだに讓らしめ得ない」と記して、外務大臣ラムスドルフ伯に下げ渡されたとある）

剛氣のルーズヴエルト氏は露帝の此の峻拒にも屈せず、重ねて一層剴切否思ひ切つた露骨な辭令で忠告すべく、更に在露大使に電訓を發することゝなつた。

あゝ意外、東京から軟回訓

「けふは湊川だ」全權獨り沈毅

小村全權は斯る情勢に鑑み一大決心を定められた。即ち

「談判は最早疏通の途なきに至つた。露帝はリイヴイツチ總司令官等の報告に依り、露軍が優勢にして戰運一轉の望みあるものと確信し、此際講和を爲すの念を絕つたものゝ如くである。而も、今に於てサガレン及び軍費賠償の二問題を拋棄することは帝國の榮辱に關する大である。從つて若し大體妥協案の如くにして纏まらば可なるも、然らざる場合には談判を斷絕するの外帝國として最早執るべき途なし」

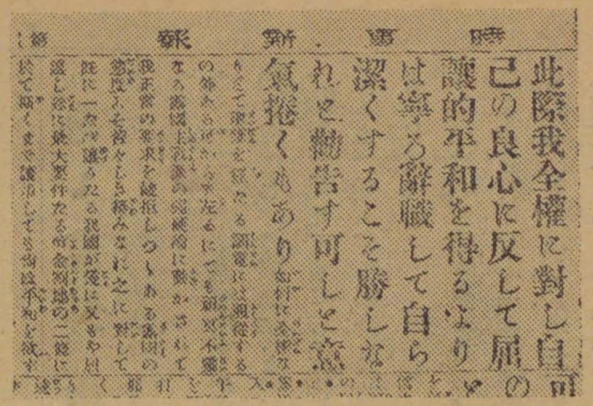
との見解の下に

「就ては次回の會見に於て、妥協案に對する露國側の正式回答を受け、之に對し帝國の地位を闡明する爲めの宣言を行ひ「即ち帝國全權は終始和協の精神を以て交渉に當り、終にサガレン及戰費問題に付ても妥協案を提出し人道と平和の爲めに談判の圓滿妥協を圖るに於て餘力を遺さゞりしも、露國は頑然之を拒絕したるを以て、帝國は玆に已むなく談判を終了すべく、隨つて、戰爭繼續の責任は一に露國にあつて存する」旨を宣言して談判を打切り、直に談判地を引揚ぐる』

ことに決意し、二十六日詳細の狀を具して政府に電稟し翌二十七日更に續電を以て右の趣旨を敷衍し政府の決斷を求むると同時に、右宣言書の起草、公私一切の荷物整理、ニューハムプシヤ州廳の歡待に對する表謝の意味で同州慈善事業に米金二萬弗寄附の小切手、及び州知事宛書面の調製等、政府の回電命到着次第即刻引揚げの準備を整へて、只管政府の回電を待つて居られた。

此の二通の電稟に對し、政府からは折返し「愼重凝議、廟議を定めて回訓を發すべきにより、二十八日に豫定されてゐる露國全權との會見を、然るべく理由を設けて一日延期されたい」と返電があつた。元老及閣僚總出の重大會議が開かれるのであらう。次で

「貴電に關し文武重臣及閣僚の會議に於て愼重に議を悉くしたる結果「開戰の目的たる滿韓關係の重要問題が既に滿足に解決し得られた以上、縱しんば軍費及割地の二大要求を不幸にして拋棄するの已むなきに至るも、尙ほ此の際講和の成立を期することは、軍事上及財政上の事情に於て絕對の急務なりと認め、即ち此の機會を逸せず是非共講和を成立せしむべし」と言ふに評議一決し勅裁を仰いで玆に訓令する次第である」とて「右廟議の趣旨を體して和局成立に善處せられたい」と云ふ東京二十八日附回訓が、其の日の午後一時



本社大西特派員が當時の通信

過ぎ（東京の午後九時頃である）ポーツマスに着電した。

此の回訓の來た瞬間の我が全權團事務所の光景は、現場に居合せた時事新報特派員大西理平氏の當時の通信に如實に描寫されてゐる。その大西君も私の面前で聲を放つて泣いたのだ。別に我々から內輪の經緯を喋らなくとも、此の一兩日來の全權事務室の動靜で、我が新聞記者諸君（時事の大西、報知の石川、國民の濱田等の諸氏）も全權の決心のある所を感知し、彼等も一緒にポーツマスを引揚ぐべく用意を整へて居つたのである。事情の知られて居ない日本に於てこそ、小村さんは一朝にして冷嘲熱罵の的となり新聞紙上でもウンと叩かれたが、現場に來て居つた各紙の特派員は、一層の尊敬と感激とそして無限の同情とを獻げて、我々と共に小村さんの爲めに心から泣いたのである。

餘談は扨て置き、政府の回電の解譯が出來ると、私は一瞬の遲滯もなく大臣の室に持つて行つた。私は殆ど眼をあげて大臣を見上ぐるの勇氣すらなく、獻欷しながら之をお渡しした。着米以來の過勞を餘程感じて居られたと見え、小村さんは長椅子に仰臥し沈思に耽つて居られたが、珍しくも、そうした姿勢のまゝで之を受取られた。此の痛憤至極の電訓が小村さんに與へた反應らしきものとしては、繩に白チヨツキの上部にホンの微動が見受けられたのと、默然としてサインし、默然として返されいつものやうに其の場で何等かの指圖がなかつた一事である。

而も五分も經たない中には早くも山座局長を呼んで、翌日の談判に臨む準備に取りかゝられた。其の晩は流石の豪雄山座君も將た英氣橫溢の立花大佐ですらがつかりと打沈み、食堂にも出なかつたが、小村さんは

全々何事もなかりし如く平然たる面持で、デニソン顧問を伴れて毎時の通り一般食堂に出られた。談笑自若、毫も平常と異なるところがなかつた。

翌朝會氣に臨むべくホテルの玄關で馬車に乘られると、陪乘の山座局長を顧み「今日は湊川だぞ」といつて呵々として哄笑せられた。「日本武士の態度を失はぬやうに」この意を局長に諷諭されたのではなからうかと思ふ。小村さんはどこまでも、世界環視の場面に於ける帝國の國務大臣としての威嚴と自尊に徹しで居られたのである。

こゝに講和條約調印さる

大統領の諒解こそよき手土産

北緯五　度を境として日露間に兩分することで協議が纏まつて、引續き休戰協定成立し、又滿洲撤兵、鐵道護衛兵等の重要問題それから俘虜交換通商條約問題等雜件はホテル内の彼我全權私室で、交互に往來して行はれた非公式會見で協定を了して、愈々九月五日午後三時四十分、ポーツマス軍港内の會議場で條約の調印が行はれた。全權接伴役の國務次官パース以下軍港工廠長、州知事、市長、全權乘艦の艦長其他、ポーツマス及び附近の重だちたる官紳（中には細君や令嬢を伴れて來たのもある）數十名は、兩全權團の隨員一同の後に立つて、調印の式を觀覽した。講和條約英佛文各二通、追加約款同じく二通づつ、外に最終會議錄同じく二通づつ、合計十二通、即ち双方四名の全權が十二回の署名をするのだ。全權署名に用ひたペンを記念に貰はうといふので、多數のペンが備へられて居る。

小村さんと各通の署名ごとに新規のペンを用ひられた。やがて署名調印で濟むと、双方全權の握手と一場の挨拶交換があつて、全權達が席を去られると、觀覽席からの群はドツとテーブルに拝しかけた。記念のペンや文房具をテンでに分捕らうといふのである。

インク壺まで摑んで行かうとするものもあつた。後は支那駐在公使になつた露國側のコロストヴエツ書記官であつたと思ふが、全權の坐用して居つた皮張りの大椅子を摑み上げて「サー、之も持つて行きたまへ」とやつたので、一同ドツと笑つて記念品爭奪の修羅場も收まつた。外には十九發の祝砲殷々として天に轟き海には汽笛、街にはお寺の鐘平和祝福の歡聲がポーツマスの全市に響き渡つて居る。其の瞬間に條約調印式後の會議室では無邪氣な善男善女により記念品分捕戰が行はれて居たのである。是も人生の或る側面を物語るものかも知れない。

講和條約調印の晩小村全權はホテルに於て、露國側全權一行、各國新聞記者及び他の一般滯在客男女を招待して平和回復の祝福と、同宿者に對するお訣れを兼ねたリセプシオンを催し、夫れが了つてから午後十一時頃の列車で隨員一同を伴れてポーツマスを出發、ボストンを經て翌六日晩ニーヨークに歸着された。

ボストンで母校ハーヴアド大學を訪問の途中、無蓋馬車で驟雨に逢つたためだらう、六日夜から發熱、氣分が勝れず、それに拘はらず七日夜の日本人會招宴に出席され、八日になると如何にも苦しさうであつたが、

翌九日に大統領訪問の約束があるからと斷じてて就褥を肯んぜられず、フロックコートのまゝ胸臆を押へつゝ徹宵椅子に凭りかゝつて打通された。

かくて九日午前オイスターベイの私邸に大統領を訪はれ、先づ講和成立に關する大統領の盡力に對し謝意を陳べたる後講和條約中の(一)韓國及(二)遼東租借地並びに南滿鐵道に關する條項に言及し「(一)に關しては、帝國は斷然韓國の外交權を我手に收め、以て東洋の禍源を永遠に杜絶するため同國を我が保護國となす考へである。右は出來る丈け韓國側の同意卽ち保護條約の締結によつて之を行ふつもりではあるが、若し韓廷が頑張るときには已むなく帝國の一方的宣言によつて保護權設定の斷行する覺悟であるから、大統領に於かれても宜しくお含み置き願ひ度い」と述べ、次に「(二)については早速清國政府と商議を開き條約で承認させるつもりであるけれども、ロシヤ側の裏面工作が萬一にも之れなきを保し難く、さなくとも清國政府は兎角の文句を唱へ、或は持病の以夷制夷で列國公使に整へたりなどして讓受承認の條約締結を逃れようとするかも知れない。さう云ふ場合には日本は已むなく條約の締結を斷念し、實力で以て租借地及び鐵道の經營を斷行して行く考へであるから、是亦豫め御諒解置きを願ふ」と述べた。

大統領は之に對し「日本のさうした決意は(一)(二)ともに全く已むを得ない當然の次第と認める。韓國保護權の設定が條約による場合は勿論のこと、日本の一方的宣言によつて行はるゝ場合に於ても、米國は列國に先んじて公使館の撤退を行ふべく、又租借地及び滿洲鐵道に對する日本の權利については支那をしてグズグズ云はさないやうに、北京駐在の米國公使をして適當の機會に强硬に清國側當局に忠告さして置く」と氣持よく小村さんの希望を快諾した。

遺書を懷いて歸る病全權

炬眼灼きつく東亞百年の計

かくて要談が濟んでから午餐となり、食慾皆無の小村さんは努めて談笑を交へて兎も角お茶を濁して居られたが、食後誘はれて庭園を逍遙するに及び、フト小村さんの顏色の異狀に氣が付いたルーズヴエルト氏は「バロン小村、あなたは病氣じやないか」と叫んだ。「どうも少し氣分が惡い」と答へると、ル氏は驚いて「それはいけない、早く歸つて休養されなければいかぬ」と促して、紐育に引返さした。

ホテルに歸られるとも重患の病人としてベツドに倒れて了はれた。後に歸朝の船中で私に向つて「あの時は實は無茶な頑張りをしたのです。しかし一旦床に就いたらもう起きられない。ルーズヴエルトにも會見出來ない。從つて滿韓問題について是非とも取り付けて置かうと思つた重大の諒解も支持も取り付けずに自分は病褥で斃れるか、左なくとも重病人として歸途に上る事になるさうなつては、所謂九仞の功を一簣に缺くもので、遺憾此上なき次第であるから、敢て病苦を忍び床にも入らず我慢をし通したのです。其の間一二度山座君を召んだり、又たアナタにも來て貰つたが口授して書いて貰ひたい事がありながら、何分病氣の我慢がセイ一杯で、ツイ口授が出來ず、ア、、此の次にしませうと云つて延ばしたのです」と述懷された。私は唯だ〳〵感涙に咽んでハイ〳〵とお答へするのみであつた。

病褥に就かれた大臣の容態は日一日と重大化した。大臣は病を押して豫定の日取りに出發しようと主治醫に迫られたけれど素より許さるべくもあらず、そこで山座局長をし隨員の一部を帶同して先發させられた。跡に殘つたのは佐藤公使と私とそれから小西秘書官の三人で、金子さんも、俺は小村と一諸に看護しながら歸る」とて歸朝を延ばされて毎日のやうに見舞に來られた。病人が仲々剛氣で看護婦や秘書官の言ふことを聽かぬ場合が往々あつたが、さう云ふときにはいつも金子さんにお願ひして忠告して戴いた。其の中少しく病氣が緩和して來たので十月二日晩香坡出帆のエムプレスオブ インデイア號で歸朝すべく十月廿七日カナダ太平洋鐵道會社長の好意に由る特別列車で我々三人の隨員、外、米人副主治醫及び看護婦附添つて紐育を出發された――ホテルの病室から擔架で列車中の專用客車に擔ぎ込まれた。金子さんも二名の秘書を帶同して行を共にされた。

當時のルーズヴエルト大統領（オイスターベイにて）

船が横濱に着く四日前から漸く枕をついてデツキを散歩される居られた。上陸すれば早速働かねばならぬといはれて歩行の稽古に努められ、入港の前日にはもう杖は止められた。

斯くの如く、まだ起居も不自由な病軀で居られながら、列車がカナダに入ると早速私を病褥に召んで韓國保護條約案ならびに滿洲問題に關する日清條約案なるものを口授して、途中の驛から政府に打電させた。此の條約案文電送の送り狀とも云ふべき別電を私に書かせるとき、冒頭先づ

「今回の講和條約の結果韓國は事實上我が主權範圍に歸し、滿洲の最良部分は我が勢力範圍となれり」

と齒切れよき口調で口授されたのは、今尙ほ私の記憶に刻みつけられて居る。

船に乘られてから、私を召んで講和談判日記を作らせた。之は陛下に伏奏の際の用意のためと云はれた。書類に據つて作つた私の原稿に逐一目を通し、二三の重要個所に對しては私の知らなかつた經緯を話して補足させたりなどされた。之がすむと今度は滿韓經營綱領といふものを執筆して呉れとの命で、私は早速ペンと紙を取つて來るべく自室に向つたのだが、船が非常に搖れて居つて甲板で滑つて顚倒し、數日間神氣茫然としてキヤビンで寢込でしまつたので、改めて、小西秘書官に口授して書き取らさせた。此の滿韓經營綱領は保護權設定後の對韓施設要目（統監府及理事廳）の設置も其の內にある。原稿には初めレジデントゼネラル及レジデントと英語で書き表はされたのであるが、其譯語につき色々と推敲され横濱着の數日前淨書調成の際遂に大臣自ら「統靈及理事」といふ、言葉に決められたのである。馬山及釜山の築港、遼東總督府の設置、南滿と朝鮮を連絡すべき鐵道の敷設、さては大陸用兵の基地としての博多灣大築港等、實に堂堂たる大經綸を盛られたものであつた。

此の意見書の淨書二通を小西秘書官に作らせて、さていよ〳〵船が明日横濱に着くといふ十月十五日の夜

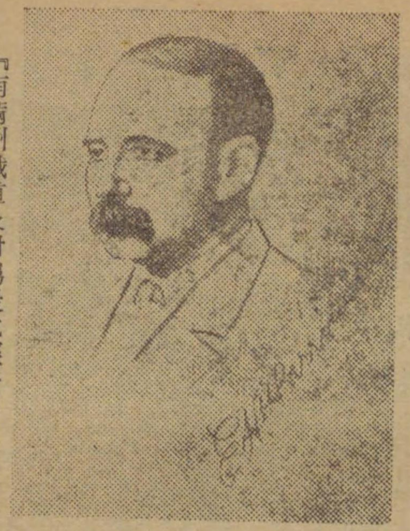
食後、私を船室に召んで其の一通を渡し、「明日は愈々横濱に着くが、そう云ふ事もありますまいけど、萬一私に對し何等かの異變があつた場合には、アナタは私の安否を顧みる必要がない。必ず此の書類を全うして無事に東京に歸つてこれを山座君に渡し、山座君から桂總理に轉交して貰つて下さい。私が病軀を提げて歸朝を急いだのは、一日も速く此書面に記してゐる滿韓經營の要綱を廟議として決定させたいからなんです。萬一横濱上陸後斃れても私の意見だけはせめて政府に提出して置きたいのです。此の書面は小西君に頼んで二通淨書させました。一通は私が持つて一通はアナタにお預けします」と言渡された。私は「かしこまりました、仰せの通り致します」とお答へして書類をお預りした。

米國へ響く歸朝劈頭の快打

小村強硬外交は大滿鐵を確保

十月十六日午前十時、船がいよいよ横濱に入港した。勅使井上(從武官(海軍中將))が全權の乘船に臨まれ有難き聖旨を傳へられた。折柄碇泊中であつた英國の東洋艦隊と、帝國艦隊から放つ十九發の禮砲は、寒雨靠々たる横濱の空に響いた。しかし同盟國艦隊の名譽のために横濱市内各戸に掲げられて居つた歡迎の國旗は、小村全權乘船入港が傳へれると、同時に一齊に取り下げられてしまつた。市民は飽くまで小村さんに對し不滿と忿激の意を表示し、否かくして侮辱を與へて居るのである。そんな事は素より覺悟の前で我々に歸つて來たのであるが、それよりもあの剛毅な小村さんをさへ驚倒させるやうな一大警報が、船中に出迎へた山座局長の口より傳へられた。それは今ではほゞ公知の事實となつて居るかの南滿鐵道日米合辦に關するハリマン協定のことであつた。

船が姿を顯はすと、外務省から珍田次官と歸朝中の林駐佛公使と山座局長の三人がランチで港外に迎へた。歸朝歡迎の挨拶がすむと山座君が大臣を誘つて船室に入りドアに鍵をおろして數刻の密談をされた。樣子あり氣に思はれたから歸京後早速聽いて見ると、意外、大意外のニュースを大臣に傳へたのである。



來朝當時のハリマン氏

それは卽ちハリマン協定のことだ。小村外相の留守中に日本を訪れ大持てに持てゝ居た米國の鐵道王ハリマンが、甘く元老や内閣の連中を丸め込んで、南滿洲鐵道を日米共同經營といふ方式で、まんまと彼れの手の中に入れる豫備協定を桂首相との間に取り結んだ一事である。此の豫備協定によると

『南滿洲鐵道及附屬炭坑經營のため一つの日米シンジケートが組織さるべく、鐵道及炭坑其他一切の附屬財産に對しては、日米兩當事者に於て共同且つ均等の所有權を有すべく、シンジケートに於ける代表權及管理權も亦日米均等たるべく、更に又滿洲に於ける諸般の企業に對しても原則として日米均等の權利たるべし』

とあつて、何のことはない國家の運命を賭して漸くかち得た南滿洲鐵道と滿洲の利權とを、タツタ一億か二億弗の金で、米國の財閥に献上し、仕舞ふと云ふ實に話にもならない馬鹿げ切つたものである。ハリマンは此の協定書を懷ろにして、得意滿面、小村さんと行違ひに米國に向つて歸途に就て、今や太平洋の眞中に其夢を貪つて居るのである。

ポーツマス外交の決算（當時の時事新報から）

講和條約全文

講和條約英文

THE TREATY OF PEACE.

OFICIAL TEXT.

The Treaty of Peace, signed at Portsmouth on September 5, was ratified by the Emperors of Japan and Russia on the 14th instant, and was published

日露保護條約の內容

第一條 韓國皇室の榮譽を保持する事

第二條 韓廷に直隸する日本人の總督を任命して國政を司らしむる事

第三條 韓國の外交權を日本に收むる事

日清條約調印濟

彼我の全權及び隨員一同は會議場たる練兵所に會し今日午前十二時條約全部の調印無事に濟めり

日清條約要領

に依り支那政府の承認

遼東半島の租借權及

なことがありはせぬかと案じたから、俺は脚腰も起たぬ病軀をかゝげて歸朝を急いたのだ。こんな事をやられては日露戰爭の結果は水泡に歸し、百難を排して漸く贏ち得た滿洲經營の大動脈が、米國に奪られてしまふ。ヨシ早速之を叩き潰す』と斷乎たる決意を告げ、山座君と共に船室を出て、他の出迎人の挨拶を受けられた。

やがて神奈川御用邸に少憩の後、臨時列車で歸京の途に就かれた。新橋驛には桂首相以下各閣僚が出迎へ首相と山本海相、寺內陸相の三人で小村さんを取り圍んでプラットフオームを歩き、宮中より差廻しを賜はつた儀仗馬車に送り込んだ。死なば諸共といふ微意の現はれとして、私は感激したが、同時にポーツマス講和成立の經緯を知つて、悲憤の情まだ胸裏に欝結して居る私としては、此の三人の大臣が今日まで無事でかうして驛まで出て來られるのなら、小村さんに危險がある譯はない筈ぢやないかと、多少奇異な感じが起らないでもなかつた。

新橋驛から宮中よりお差廻しの儀仗馬車で、近衞騎兵一歩隊の儀仗の下に參內された小村外相は、天顏に咫尺して謹んで使命の復奏を了せられた後、卽刻桂首相を訪問してハリマン協定に對し斷乎たる反對を述べ、之に破棄しなければならない理由を力說し、それから兩三日間に寢食を忘れて大活動を續け、井上元老を初め之を贊同した面々を說破して、漸く前議を飜さしめ、十月二十七日ハリマンの船が桑港埠頭に着くと同時に我が上野領事をして、船室にハリマンを訪はしめ、婉曲ながら併し明瞭なる取消のメツセージを手交させた。ハリマンの失望——それから出發した米國側の復讐戰となつて現はれたのがそれから數年後、小村さんが第二回の桂內閣に再び外相として在職中持ち上がつたあの有名な錦愛鐵道計畫、並びに此の計畫と照應する米國々務卿ノツクスの滿洲鐵道國際化提議である。

二者ともに、小村さんの强硬外交で叩き潰された。小村さんがなかつたならば戰捷の果實として漸く我

が有となつた南滿洲鐵道は恐らく疾くの昔に米國の手に移つて居つたらうし、滿洲全體に於ける日本の權益も果して如何に成り行きて居つたらうか、蓋し思ひ半に過ぎるものがあらう。國民は實に國家の大恩人として小村侯爵を永遠に記憶すべきであると、私は確信し强調するものである。

ロシヤから日本を見る

ローゼン男の手記

當時ロシヤ駐日公使（後ポーツマス會議全權）

日露の國交急を告げてゐた頃、一方はセント ピータースブルグ、一方は東京と互に敵都にあつて外交舞臺に活躍したのはわが栗野公使とロシヤ公使ローゼン男であつた。以下の文章はローゼン男の備忘錄『外交四十年』中から譯出したもので、先きに連載した栗野子の談話と併せ讀まば、當時における日露兩朝野の情勢が一層はつきりして來るだらうと期待する。

外交代表が前に一度占めた地位に同じ資格、同じ格式で再び任命されるといふことは全く異常な出來事である。これには一應の説明を要するのである。ロシヤの外交史にこれと同じやうな事がたつた一度ある。クリミヤ戰爭前に駐英公使だつたブルンノー男（後の伯爵）がパリ條約締結後、駐英全權公使に再任命されたのがそ

れだ。けれども私の場合はブルンノー男のそれのやうに戰後の國交整調にあたらせるために最も適當な人物を選ぶといふのではなく、私の前任當時の日本政府との關係、私が日本の政[illegible]に精通してゐた事などが、ウイツテもラムスドルフ伯も最も力瘤を入れてゐた國交決裂の回避の上に大に役立つだらうといふ漠然とした希望からであつた。私が最初に日本に使ひするに當つて、念入りに纒め上げた意見書の中で、當時宮廷を支配してゐた積極政策に遠慮會釋なく反對したので、ウイツテもラムスドルフ伯も極東に對する私の當時の態度を知つてゐたものだから、恐らく私に大に期待するに至つたものであつたらう。

だが、日本再赴任が事實となつたとき私の提出した新意見書の中で、今度は連中にはあまり有難くない意見を述べたので、兩氏はどうやら面喰つたらしかつた。私の意見といふのは

一、鐵道、銀行と云つたやうなものに依るいはゆる『平和的侵略』計畫は實行性に乏しいこと

一、從つて右計畫遂行に投じられた巨費はどうしても私には是認できないこと

一、但し莫大な國帑を投じて滿洲に廣汎な利權が獲得され且つ設定されたからにはこれを確保するのが吾々の義務であること

といふのであつた。ラムスドルフ伯は何がどうだとはつきり指摘したわけではないが、それからは私に對して急に冷淡になつた。でも私は彼の特別な氣質を呑み込んでゐたので別に氣にもかけなかつた。當時としては亦已むを得なかつた仕儀ではあつたが、ラムスドルフ伯は、たうとう私の議論を反駁すべくウイツテの書いた意見書を私の所へ送つてよこした。一年後、日露戰爭が炸發し私がロシヤへ歸るまでは判らなかつたが

當時、私を日本へやるまいと猛烈な策動すら行はれたが、それは巧く行かなかつたのである。私は自分の知らぬ間にこの二人の政治家に痛烈な敵意を受けてゐたのであつた。日本側はこの事情を十分知つて居り、私の日本側との折衝がしつくり行かなかつたのもそのためであつた。

白色大帝國の夢つくる者

――彗星の如く露都に怪人登場

日露關係に非常に密接に關聯してゐるもので、私が新任地に出發するまで、全く知らされなかつたも一つのしかも最も重要な事情があつた。之を喩話で云へば小さな彗星の形をした新しい流動天體が突然、地平線上に現はれ、皇帝の周圍を廻轉してゐる本物の太陽系に侵入して、大遊星連の軌道に飛び込み大混亂に陷れしめやうとしてゐるやうなものである。私がまだセント ピータースブルグにゐた頃、この彗星はホンの出來たてでまだ肉眼には見えなかつた。それに私は生憎有力な天文學者に親しくしてゐなかつたので、彗星が吾々の太陽系に接近してゐることなど一寸も知らなかつた。東京に赴任してやうやく知つたがその時には端が遠く滿洲、朝鮮境の鴨綠江に及ぶほど、新彗星の尻つぽは宏大で遼の天空に廣く伸びてゐたこの彗星――不可思議な新人物――といふのはベソブラゾフ氏その人で、同氏は日本との戰爭を誘導した人物の一人だと想定され、世界で知らぬものなきまでに著名になつた。鴨綠江朝鮮岸の森林に手をつければ必然日本を刺戟することになるのだが、ベゾブラゾフ氏は日本との衝突などてんで眼中におかず、同森林地帶

666
219

への利權開發に猛進した飽くなき冒險者群の頭目扱ひにされたのである。この計畫はなんでも高位高官の間にも非常な好意をもつて期待されてゐるとか、皇族をも含む多數のお歴々が特殊の利害關係をもつてゐるとかの噂があつた　これらの噂は革命主義者や各種の不平分子によつて得たりかしこしとばかり競うて吹聽され、また帝政に對する鬪爭の武器として使用され、結局は帝政の覆滅、國家の瓦解とまでなつたのであるが私は私の個人的知識のゆるす範圍で、この何となく不鮮明な事件に說明を加へることにしよう。

ベゾブラゾフ氏の關する限り、私はその人柄、性質、或は政治的目的など私の個人的知識からは何事も云ふことが出來ないといふのは、彼が明かに全能的勢力を振つた短い期間は恰度わたしがセント　ピータースブルグをたつた時と、戰爭となつて日本から引揚げた時の合間にあたるので、私は一度も彼に會つてゐないからである。でも私の知つてゐるかぎりではどんな疑獄が起つても、彼の個人的名譽と威信には指一本も觸れるわけにはいかなかつたのである。どつちかといふと理想主義者肌合の夢想家であつたが、假令非實際的ではあつても、國威の發揮および伸張といふ魅惑的な幻想を追つたからつて彼を非難するには當らないのである。なんでもベゾブラゾフは極東においてイギリスのインド帝國にも比すべき大帝國をロシヤのために獲得する豪華計畫を皇帝に獻言したらしかつた。その順序も當時はすでになかつたが、東インド會社になぞらへた組織を出發點として漸次版圖を擴張するといふにあるらしかつた。鴨綠江岸の森林利權はこれよりさきに或るウラヂオ商人が韓國政府から得てゐたのであるが、云はゞこの利權を足場に使用しようといふのであつた。皇帝はこの夢想的計畫を卽座に採用し、たゞ一人內務大臣プレーウエを除けば、主なる閣員全部の

忠言を却けて、彼の計畫にあらゆる支持を與へたと云はれたものだ。プレーウエ內相と云へばウイツテの敵で彼は極東の事態がこんがらかれば國內に增入しつゝあつた不平や革命不安から一般の注意をうまく轉換し得るだらうと考へてゐるらしかつたのである。ベゾブラゾフの計畫を實現するには、もちろん、莫大な資金を發動させなくては出來なかつた。國庫から引出すことは藏相のウイツテが同意しさうもないので思ひも及ばなかつた。尤もそのウイツテも上からの壓迫で、ちよい〳〵僅かばかりの金はベゾブラゾフに握らしたのであつた。

そこで主なる財政的援助は他の方面、たとへばお歴々の私財からの寄附、それから主として宮廷に關係する金持社會や皇帝御氣に入りの企業に株主となつてその地位を高めようとする野心家に、株式を分配する等の方法によらねばならなかつた。けれども堅實な財政的投機といふよりは、まつたくの政治的冒險だつた。ベゾブラゾフ計畫の株をもつた連中のうちに云はゞと知れた斯んな無鐵砲な計畫から、ぼろい儲けは兎にかく、幾ばくかの利益がもたらされようと本氣に考へてゐたものが、いくたりもあつたとは私は信じられないのである。こんな手合ひは一種の愛國的迷想からか、でなければ紳士氣取りから行動したといふのが私の考へである。と云つても當時、彼らに投げかけられたやうに、我慾のためには國家の利害休戚をも敢て犧牲に供してゐる向ふ見ずの投機屋との非難は當らないのである。

666
219

日本艦隊の威容や如何に

神戸へ着くトタン思はぬ見物

まで日本を去らぬやうに命令をうけてゐたイズウオルスキー君の日と、私のとをうまく連絡させる必要があつたりして、多少遲れてしまつた。三月の初めに私はやうやく出發することが出來た。地中海やインド洋の氣持のよい航海のゝち、一九〇三年四月十二日目的地に着いた。

神戸灣に近づいたとき、日本の全艦隊が投錨してゐた。海軍駐在員で舊友のローシン大佐が私たちを迎へに來てゐたが、同君は日本の艦隊が觀艦式のため神戸に集つてゐること、天皇陛下が日本の舊都、京都に行幸中であらせられることなどを說明した。同大佐はまたイズウオルスキー君からの手紙をもたらしたが、その手紙の中には、われ〳〵兩名の信任狀と退任狀を捧呈するために京都で天皇陛下に拜謁を仰せつけられなければならないこと公使館の事務引繼ぎのため私の東京着任をまつてゐることなどが書いてあつた。そこで私は家族のものは私が引返してくるまで京都に送り屆けておいて、私一人で横濱と東京へ行くことに決心した。家族を停車場で見送つてから、私はローシン大佐と一緒に觀艦式陪觀のため、旅順から派遣されてゐたわが快速巡洋艦アスコルド號艦長を訪問した。

午餐のゝち艦長は私を汽艇に乘せて上陸させてくれたが、其途中で堂々迫るが如き日本艦隊の威容を目のあたり見ることができた。一時間約五、六ノットで艦隊の附近を行つたり來たりしてゐる間に、艦と海岸の間を飛魚のやうに轉廻してゐる二本煙突のスマートな日本汽艇の容姿、その驚くべき快速に私は全く膽を拔かれてしまつたのである。終ひに私はアスコルド艦長に日本艦隊をどう考へるかと尋ねると、日本海軍の兵器は優秀のやうであるが、艦を操縱する兵員の段になると疑ひを持たざるを得ないといふ返事であつた。だがこの同じ艦長が、一年とちよつと後にロシヤ艦隊が不幸にも旅順から出擊した時——これは取りも直さず日本艦隊の操作が下手でなかつたことを示すものだが——中立港にスタコラ逃げだす羽目となつたのであつた。當時、海軍ばかりでなく陸軍當局も一般にさうであつたが、敵國兵力とその能率を見くびり、弱小日本がまさか强大ロシヤを擊てはすまいと高枕でゐたことが、いざ戰爭となつてロシヤが負けた主なる原因の一つではなかつたかと私には考へられる。ローシン大佐は私とアスコルド艦長の會話を、口びるに皮肉な微笑を浮べながら默つて聽いてゐたが、さすがに頭があり判斷力も備へたロシヤ海軍屈指の優秀士官だけあつて上すべりな艦長の見解には與しなかつた。大佐は私に日本艦隊の組織、戰時編成の諸條件、兵員の完全な能率などについて說してくれたが、これらは當時のロシヤ艦隊に行きわたつてゐた口には云へないが明らかに看取される不備と相俟つて、日本との戰爭から招來し得べき結果に關し私に眞劍な、然も痛烈な反省材料を與へ、そして斯んな結末はどんなことをしても極力避けなければならぬとの、私の決意を愈よ堅固ならしめたのであつた。

東京へ着いて私はイズウオルスキー君の迎へをうけ、直に公使館の形式的な事務引繼を行つた。京都へ行

666
219

つて天皇陛下に退任の御挨拶を言上する前に、私がヨーロッパからの赴任の途海上にあつた、五週間中に起つたいろ〳〵の出來事を、同君は何かと知らせてくれた。それから私の着く數日前、云はゞ突然に同君を見舞つた驚くべき性質の情報を傳へてくれた。

若い一人の士官が私用で旅順から着いてゐたが、その士官は、公使にどうしてもお知らせする義務があると云つて、鴨綠江木材會社の手先きが行つてゐるどえらい物語を話した。それによると木材會社は保護が必要だとの名目で、相當の軍隊を派遣してもらつたらしく、その軍隊はすでに土木工事を開始し、それがそのまゝ砲壘その他になり得るやうに見られたのであつた。若い士官は旅順から日本へくる途中、現地を視察してゐるので、その言葉に全く間違ひのないことは判り切つてゐたが、イズウオルスキー君は、私が一兩日中に着任することでもあるから、私の裁量にまかせるつもりで、この問題を本國政府に報告せずにおいたのであつた。私にとつてもイズウオルスキー君にとつても、この報告は全く驚嘆に堪へぬ問題であつた。

鴨綠江へ刻々延びる觸手

緊張のさなか黑鳩陸相訪日

ロシヤのやうにヨーロッパとアジヤに跨る自國領土内に二百萬平方マイル以上の未開拓地を有する國が、朝鮮と滿洲の國境ひ遠い鴨綠江の河口に木材の利權を必要とし、剩へ土木工事やコザック騎兵で防禦しなくてはならぬなんて狂氣の沙汰であるが、これが勢ひ日本人の心に、われ〳〵が日本の權益を押しのけて朝鮮に武力的侵略の準備を進めてゐるとの固い信念を起させるに至つたのは、自明の理といはなければならない。かうしたロシヤ側の挑發的行爲は、日露の慢性的紛爭を武力によつて、乘るか反るか一擧に解決せんことを主張する主戰論者にとつて、もつけの幸ひであつた。だから桂伯と小村男をもつて主力としてゐた當時の政府が鴨綠江岸におけるロシヤの經營に抗議を突きつけるわけはなかつた。私の少しも疑はなかつたほど熱心に平和的解決を希望してゐたロシヤ政府が後刻日本と交渉を開く段になつたとき、ロシヤの經營は却つて私の小股を掬ふ結果とならざるを得なかつた。斯うした考へから、たうとう私は電報で鴨綠江經營に對して痛烈な苦情を進言したのであつた。電報の文句は私としてせい〳〵辛辣できつぱりしたものであつた。この問題に對する日本政府の態度は私の推量通りとなつた。小村外相とは幾度も意見交換を行つたが、同外相は決してこの問題を切りださず、鴨綠江方面の事には遠廻しにも觸れてこなかつた。その後も私は引繼き警告を發したが、鴨綠江の經營は相變らずドン〳〵進められた。小村外相は十分これを承知のはずで、鴨綠江經營については徹頭徹尾無視されてゐたが、私よりも詳しく知つてゐたのであつた。

黑鳩陸相　クロパトキン將軍

666
219

私は非常に忙しい仕事を控へてゐたが、公使館の方は一等書記官コウダチエフ公に任せて、汽車で京都へたつた。コウダチエフ書記官は私が永い生涯でめぐり會つた人々の中でも、最も善良な人のひとり、氣品も高潔で純情、私の親友の中での親友となつた。後に一等書記官として私と一緒にワシントンに赴任し、それから大使館參事官にもなつたので、アメリカの讀者にも同君はよく知られてゐるはずだ。

京都に着くと私は天皇陛下に信任狀を捧呈し、次いで家内と共々で皇后陛下に謁見を仰せつけられた。兩陛下におかせられては、私たちが日本に再任したことに殊のほか御滿足なる旨仰せられ、身に餘る御歡迎を拜受した。前任當時の數多の友人知己や當路の人々からうけた歡迎も、むかし通りに鄭重であつた。だが社會的環境の底を流れてゐる底流が、はつきり敵意とか疑惑をもつてゐるといふのではないが、なんとなく警戒氣味であつた。でも着任後の一ケ月は何等面倒な事件もなく、平和に過ぎた。

そしてロシヤ陸相クロパトキン將軍の來訪が發表されたときには、日露の緊張に多少のゆとりが出てきたかのやうにすら見えた。日本國民は常にロシヤの政情に精通してゐたが、クロパトキン陸相は日本人の間ではウイツテの仲間ではないが、同時に當時旭日昇天の勢ひであつたペゾブラゾフ一派の政策にも反對な人物として知られてゐた。同將軍に與へた歡迎ぶりは、特に際だつて鄭重、親切を極めたが、恐らくは日露親善論を支持する元老階級の政治家の間に、この空氣が再燃してゐたゝめであつたかも知れない。將軍は堂々たる隨員を引き具して到着し、その宿舍には數年前キリル大公御假宿の御殿が豫め準備されてゐた。

天皇陛下に拜謁後、將軍は宮中で催された政府の歡迎宴に招待され、この饗宴には兩陛下出御、皇族方を初め奉り、閣員一同も出席した。また近衛旅團の閲兵、騎兵學校の競技會などを參觀したが、騎兵士官が馬上で演ずる妙技に、將軍も隨分深い感動をうけたらしかつた。

公式の東京滯在期間中、將軍は數人の主だつた政治家と意見を交換したが、その期間もをはり、極東駐屯軍巡閲のため旅順に向つて出發しようとしてゐたとき、セントピータースブルグから一通の電報をうけとつた。將軍は旅順におけるアレキシエフ提督との會議席上でペゾブラゾフと會ふ豫定になつてゐたが、その電報によると、内大臣ペゾブラゾフの着く前に將軍は旅順に到着しては相成らぬ。それが皇帝の御意思であるといふのであつた。すつかり面喰つてしまつたのは將軍で、この思ひ設けなかつた事情は多少の説明を要するのである。むろん今さら豫定の公式滯留期間を延ばして、將軍は東京に留つてゐるわけにはいかなかつたそこで、表面は休養の名目でだが好きな釣りでもやらうかと、將軍は東京から程遠からぬ海岸へ引揚げることになつた。この時の異常事件は、當時セントピータースブルグに起つてゐた或る新事態の中から説明を求めなければならなかつた。

陰謀の府から出馬した怪人

黑鳩陸相、旅順へ行けないわけ

新人ペゾブラゾフの登場、そして官廷における其勢力が全く隣く間に增大し、公の地位と云つても永年國事に盡瘁した顯官功臣にのみ、たまに與へられる純然たる名譽職、内務卿であつた以外にはなん

666
219

の官位も持たぬベゾブラゾフを、皇帝は好んで相談相手にされるやうになつた。云うてみれば全くの外來者にすぎぬものが、こんなにまで恩愛をほしいまゝにしたのだから、官僚者流の目にはベゾブラゾフは氏なくして玉の輿に乘つたホヤ〳〵の皇帝の寵兒のやうに仰がれたのであつた。

彼は自づと政界にも勢力を植ゑつけ、其中で活潑に活躍し得られるやうになつた。そのうちに彼は極東の事物を親しく視察するために出かけることに決心し、クロパトキン將軍が日本を訪問してゐた頃、恰度かれも王侯然と豪奢な特別列車の中にふんぞり返りながら旅順に向つて旅行の途中にあつた。しかるに陸相はベゾブラゾフ計畫の反對者といふことになつてゐたので、もし將軍がベゾブラゾフの着く前に旅順に到着するやうにでもなれば、同將軍はうまくアレキシエフ提督と結託してベゾブラゾフ計畫反對の共同戰線を張り、かくして同計畫を揉みつぶすだらうと懸念された、その結果がクロパトキン將軍の日本出發延期の命令となつて現はれたのであつた。

私がこの關係を氣づくやうになつた事情を説明しなければならない。クロパトキン將軍の隨員中に一人の高級參謀將校がゐた。ロシヤ陸軍部内では確に利け者の一人であつたが、私は前からこの士官を知つても居り極東問題に關する彼の造詣には多大の敬意を拋つてゐた。一行が東京に着いた日に、同君は舊友として私を訪ねてきた。ふた言、みこと親しげにお喋りしてから、同將校は鴨綠江經營なるものゝ興味あり、また重要な物語をかたり始め、この計畫を目隱しにすれば滿洲やその他におけるロシヤの政治的諸計畫が安全に遂行され得ると説明した。この將校も知つてゐるはずの或る問題について、私が確信をもつて斷乎として反對

してゐると述べると、彼はムキになつて抗辯しだしたので、ハ、ア、これはベゾブラゾフ一派の意見に私をも靡かせようとする使命を帶びてゐるのだと、私を疑はせた位であつた。私が反對すれば彼らの計畫に相當邪魔つけとなるので、鋒先をそらさせようとしてゐたのであらう。そこでかれの側ではだまし込まうとしてゐるのを、私の方では彼の私に對する好意に取つてゐる風に見せかけ冗談半分に、國防問題になると全くの明きめくらだから、目隱し論などてんで、私には解らないと云つて笑つてみせた。かれとクロパトキン將軍との關係は一體どんなのか、またその隨員中に彼の加はつてゐたのはどうした譯かなど、當時の私は詮索してみる氣にもならなかつた。けれども彼にはクロパトキン將軍をはじめ、鴨綠江經營に反對する連中を監視する役目も委ねられてあつたと見てよからう。

でも、その後に起つた事柄が、私に一層疑念を起させ、それがずつと後に私の疑念が本物であつたことが確められた。夏のこと、警備隊の若い士官が細君同伴で横濱に到着し永いあひだ滯在した。その細君といふのはセント　ピータースブルグでも極く上流社會の出ですこぶる別嬪でもあり、また上品な淑女であつた。若夫婦はしば〳〵公使館の客になつた。だが當時の私はかれが日本にやつてきて、どうして永滯在したか、またその間に彼がやつてゐたらしい不思議な仕事の内容などについて、どうも諒解しかねたのであつた、が、彼らが東京をたつてからずつと後になつて、若い士官といふのは鴨綠江經營發起人中の有力者のせがれであることが判つたのであつた。また彼の仕事といふのは日本新聞界の動向を探る外に、會社のために主に私の政治的行動を監視するにあつたと怪しみ得る理由が澤山ある。

666
219

遂に極東總督を新設す

これぞ滿韓經營への本據

きはめ、それがロシヤの極東政策にどんなに影響を及ぼしたかを寫したかつたからである。同時に廟議區々として定まらぬ政府の代表として、さらにその直接の上役たる時めく政治家の、お覺えめでたからぬ手先きであり、しかも聯望旭日の勢ひにあつた反對派に睨まれ監視され、その結果、後楯といふものはなく、反古紙にも等しき信任狀と、自身のあるかなきかの信用以外に頼るべきものゝなかつた私の立場がどんなに困難であつたかを明かにしたのである。

たゞ一つだけ私にとつて非常に好都合なことがあつた。それは公使館の構成と私の管轄下にあつた領事館の陣容であつた。これらの忠實な公僕たちが、誰かれの區別なく愛國的で勤直、職務と上司に忠實であつたことを、この紙面で證明することは私にとつてこの上のない滿足である。特に大變わたくしらの手助けになつたのは、陸海軍武官であつた。當時の海軍武官はローシン大佐、陸軍武官はサモイロフ大佐であつたが、局面がすこぶる重大な時に當つて兩君の手腕と熱心な協力のお蔭で、私は日本の陸海軍に關する正確な情報を絶えず握ることができた。クロパトキン將軍出發後、間もなく私たちは夏休みのため日光に出かけ、私はそこで公使館の方と絶えず聯絡をとつてゐた。

上にあげたそれや之れやの事情の説明に長いこと手間取つたが、中心部の意見がまつたく混亂を

日光の絶景の中に惰眠をむさぼつてゐる間に、セント ピータースブルグでは私の舊友の栗野公使とロシヤ外相ラムスドルフ伯のあひだに、或る種の折衝が私を蔭にしながら行はれてゐたことを私はよく知つてゐた。これに反して日本側の方では少くとも表面だけは何事もなく平穏無事であつた。が、さう斯うしてゐるうちにロシヤの方に二つの事件が突發し、新聞の調子から見るとこの事件は日本側に相當の衝動を起したやうに受けとれた。二つの事件といふのは藏相ウイツテの浚落と、アレキシエフ提督を初代總督とする極東總督の新設であつた。

セント ピータースブルグ官界にこのドテン返しを起した直接原因は、陰謀の中心から遠く離れてゐたので、私にはつきり判るはずがなかつた。でもペゾブラゾフが極東政局に關する上首尾の情報を握つて極東視察旅行から歸つたか、でなければ有力な新人物の支持を得てかれの勢力が急に擴大したかにあつたやうだつた。私は後の方の推定が一番ありさうなことだと考へたといふのは、總督を新設したことも、これと同時に特別に『極東外交委員會』を任命したことも、元はと云へば外務大臣の勢力を骨拔きにし、その仕事の邪魔をしようといふ魂膽にでたのであつたから、官界の陰謀に熟練した古つはものゝ參畫した鮮やかな痕跡が認められさうであつたからだ。ウイツテに眞ともから當り得る敵と云へば內務大臣のプレーウエだけであつた。勁敵ウイツテを浚落に導いた『遊戯』には確にプレーウエが加はつてゐると私は初めから睨んでゐた。けれどもこの個人的敵意ばかりがプレーウエを、ペゾブラゾフ一派に加擔させた動機ではあり得なかつた。彼ほどの智慧者が、鴨綠江經營など人騷がせの案件を含む全體としてのわが極東政策が、日本との武力

666
219

抗爭とまで行かなくてはをさまらぬことを見逃すわけはなかつた。從つて國家をむしばむ革命的病狀を治療することを職務としてゐたプレーウエのことだから結果はどうであらうと、この際、極東で血をしぼり出すことが、革命的病狀の效果的な療法たり得るかも知れぬと考へでもしなければ、こんな政策に力を藉さうとは信じられさうもなかつた。たゞ目に見え、世間一般からもさうと信じられてゐる事柄から判斷して、彼がこんな大それたマキアヴエリズムを抱懷してゐると、私が疑つたのは不當であつたかも知れない。でもかれの態度について私が上に述べてきた說明は、人驚がせしたこの官界のドテン返しの內部消息に通じてゐた人々の間では、相當廣く信用されてゐたといふことだけは、はつきり云ひ切り得るのである。

社交界で一度だつて會つたこともなく、私はプレーウエとはまつたく個人的交涉をもたなかつたが、彼は一般に腕もあり膽力も具はつた不敵な人物で、革命黨各派とは徹頭徹尾、鬪爭を敢行しようとしてゐたと考へられてゐた。從つて彼は革命諸團體から最も恐るべき敵と目されてゐたことは內務大臣着任早々、社會革命テロ團が彼を暗殺政策の當面の目標として、附け狙つた事實に徵して十分證明されるのである。

ウイッテの沒落は、積極的極東政策が明らかに勝利を占めたことを意味した、また『極東總督』が設置され、特別『極東關係委員會』が組織されたので——兩者とも廣大な權限をもたされたので、正規

新進日本をアフガン扱ひ
傲然として國際危局へ歩一歩

の外交當局との反噬はいふまでもなく、お互同士の權限爭ひともなつたが——甚だしく複雜とならざるを得なく、從つてその政策を合理的に遂行することを不可能にしたことも爭はれなかつた。

總督のアレキシエフ提督は、その絕對的權限下におかれた廣大な地域內の、行政長官であることはいふに及ばず、陸海軍一切の兵力の司令長官として、半ば獨立の地位に昇任されるに至つた。極東における隣接諸國との外交關係もかれの支配に委ねられ、東京北京および京城の各公使館は或る程度までその隸下に屬し、外交關係の報告をかれに致すやう命ぜられた。これは國際政治に關してはアレキシエフを、ボハラやアフガニスタンのやうな半獨立國との關係におけるトルキスタン總督のやうな地位におかうとする意向に出でたものであつて、日本を中央アジアの隣接諸國並みに扱はうとしたのだから、こんなやり方は日本の自尊心を極度に傷つけざるを得なかつた。一方、極東關係委員會はどうかと云へば、皇帝をその名目上の會長とし、極東政策の全分野にわたつて絕對權をもつといふのであつた。この委員會には外務、大藏、陸海軍の各大臣がいづれも委員といふことになつてゐたが名前だけで、特に皇帝の御覺えめでたかつたアバザ中將が事實上の主宰者であつた。中將は優秀な海軍士官で、人物もなか〳〵出來てゐたが、國際關係となるとずぶの素人であつた。從つて外交上の經驗では海千、山千の外相ラムスドルフ伯に比べると、國家の重大危局に當面して輔弼の任に堪へ得ないことは云ふまでもなかつた。

一九〇三年八月、日本政府が近代日本を建設した最有能政治家たちの采配の下に、上や下からの壓迫にも屈せず、結局、戰爭にまで導いた外交々涉を始めるに至つた當時の情況といふのはざつと上に述べたやう

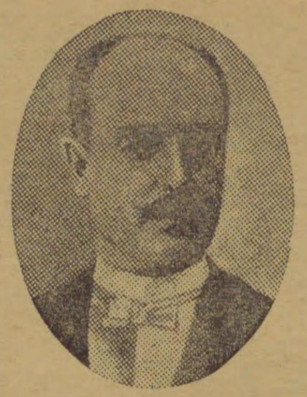
666
219

なものであつた。日本の政策はその當時において實際に掴み得る限度に、その手段も分相應といつた具合に、すべてが確然と定つてゐた。そして日本の當面の目的といふのはロシヤの勢力を滿洲から、できれば韓國からも驅逐し、韓國の併合とか、滿洲の漸進的掌握とか、支那に關する他のいろ〳〵　野望とか、かうした窮極の目的は一切將來の成行きに委せるとして、差當り韓國に對して日本の保護權を設定するといふにあつた。日本はロシヤが韓國や支那の獨立および保全を脅かしてゐるからこれに對抗し、またロシヤが滿洲の門戸を閉めやうとしてゐるから、門戸開放のために戰ふのだと云つたりしてゐたので、同盟國たるイギリスばかりでなく、アメリカからも道義的および外交的支持を與へられてゐた。また日本は完全な陸海軍の軍備に賴ることが出來た。私が偶然に發見したのだが、日本はすでにニューヨーク財界の一部から財政的援助を確保し得られるといふ順境にもあつた。だが、それよりももつと重要なことは、目の前にブラ下つてゐるロシヤとの激烈な爭覇戰の眞意を十分認識し、猛烈に愛國的で完全に一團となつてゐる日本國民の壓倒的支持に、政府が賴り得るといふことであつた。

強大帝國が亡びゆく道

國情の不一致、恰も三頭の蛇

般の政治的必要や國家の利害と調和し、國家の資力にも十分の基礎をおくやうな確固不動の國策はない。あつたものは漠然たる支配慾、覇權然だけだ。お偉い筋には洞察力もなければ、確固たる方針もない。ロシヤの極東政策は、大體たがひに獨立し何事でもあれ、決して完全に一致することのない、三つの機關が割據しながら行つてゐた。唯一の正規の機關だが皇帝から殆ど公然と不信任をうけたがために最も微力な外務省、一番に有能で或る程度まで最も判りがよいが皇室に對する氣がねからちゞこまつてゐた總督、最高權力に最も近い關係でもつとも、有力な極東委員會の三機關がそれであつた。次ぎは極東に軍隊を送ると、それ攻擊の準備だ、やれ開戰を急いでゐるなど〻、猜疑の一齊射擊をうけるので、適時適當に陸海軍の增援ができなかつた關係から、手のつけられやうのないまでに準備の行き屆かぬ陸海軍。唯一の同盟國たるフランスからは、全く嫌々ながらのお附合ひ程度の支持しか期待できなかつたことを考へると、外交方面の不用意さもお多聞には洩れなかつた。フランスがかうした態度に出たのは極東方面にロシヤの政治的利害を釘づけにさせ、ロシヤ軍隊を遠退かせておくことはヨーロツパ政局において、同盟國としてのロシヤの價値を下落させることは、特にドイツとの戰爭の危機にあつた際でもあるから、どうみてもフランスの利益ではなかつたからであつた。



ラムスドルフ外相

極東貿易にもつとも利害關係の深かつた二大强國、イギリスとアメリカに到つては滿洲におけるロシヤの向ふ見ずな意地惡政策には極端なむかつぱらをたてゝゐた。それよりも、もつといけなかつたことは、無智相手側が何もかも好條件を備へてゐたのに對して、われ〳〵の方はどうであつたか？といふに一

666
219

蒙昧な國民大衆が、日本との衝突がどうして起つたかの眞相を解さぬから、ロシヤのために唯々諾々として血を流すだらうと高をくゝつたことであつた。だが、一つにはロシヤの第一利益は平和であると信じ、二つにはヨーロッパにおけるその政治的夢想の實現に躍起となつてゐたがために極東における冒險政策には何でも反對してゐた大部分の知識階級から、道德的援助をすら期待することが困難な實情にあつた。革命諸黨に至つては、例によつて祖國の廢墟の上に社會主義的理想境を打ちたてるためには、戰爭に負けて、人民の不滿が爆發し、現在の社會秩序が壞滅すれば、よいと虎視耽々機會の到來をまつてゐるばかりであつた。

かうした狀態のもとにわれわれは極東の危機に向つてゐた。まさに始められてゐた外交折衝の結果も、そのあとに續いた戰爭の結末さらにまた一大帝國の沒落、瓦解といふ凄慘な悲劇の序幕がまさに開かれようとしてゐることを、當時にあつて豫見することも困難ではなかつた。

外交々渉は一九〇三年八月の初めに日本側の口火で開始された。日本政府がこれをセント　ピータースブルグでやらうと云つたのは當然のことであつた。だがラムスドルフ伯は、なんだかんだと口實を設けて反對し、交渉はぜひ東京でやるようにと云ひ張つた。とゞの詰り日本政府がしぶ〳〵折れることになり、その結果交渉の終り頃には、わたくしがロシヤ政府の意向を傳へる機關となり、その間にセント　ピータースブルグ駐劄日本公使はラムスドルフ伯と無駄な豫備交渉をつゞけてゐたわけであつた。どうも私にはラムスドルフ伯のうしろには、アバザ提督がゐたと信じられるのである。

こゝで私は長交渉のこま〳〵した內容を說明するつもりはない。外交の取つ組合ひには避けがたいお喋りと、廻りくどさを拔きにすると、全問題の要點は次のやうな命題に壓縮することができた。すなはち、日本政府は韓國における日本の獨占的優越權を默認するよう手心を加へる序に、滿洲に關してもしか〳〵の契約をして欲しいとロシヤ側に要求したのに對して、ロシヤ側の方ではあべこべに韓國に對するその權益に頑强に喰ひ下つた。恐らくは滿洲に關してロシヤ側から一札を取らうとしてゐる日本の要求を、撤回させる魂膽からであつたらう。雙方とも初めの立場から一步も引くまいとがつちり構へてゐるので、この難關を切り開く方法がなかつた。だが日本の立場は英米といふ有力な支持者があつたので遙に有利であつた。これに反して韓國に對して權益を主張し、韓國における日本の政策に干渉しようとするロシヤ側の云ひ分は、ラムスドルフ伯の政策に逆戻りして、アジヤ大陸には一步も日本の足を踏み込ませまいとするならいざ知らず、てんで成りたゝなかつたので誰の助けも望めなかつた。でも斯んな羽目になつても、まだ機會があつたのだから、云つてみれば日英同盟の締結される前にでも、この政策に英米の支持を得ておくやうにわれ〳〵は盡力すべきであつた。最近の情勢にみても、恐らく英米は極東政策に關して、自分の政府はいつも負け馬ばかり量屐にして來た嫌ひはないか、どうか反省したかも知れなかつたのである。そればかりではなく、ロシヤ政府が劍呑な韓國政策の遂行を思ひ切つて斷念せず、どうしてあんなに頑ん張つたか、私にはまつたく諒解できなかつた。

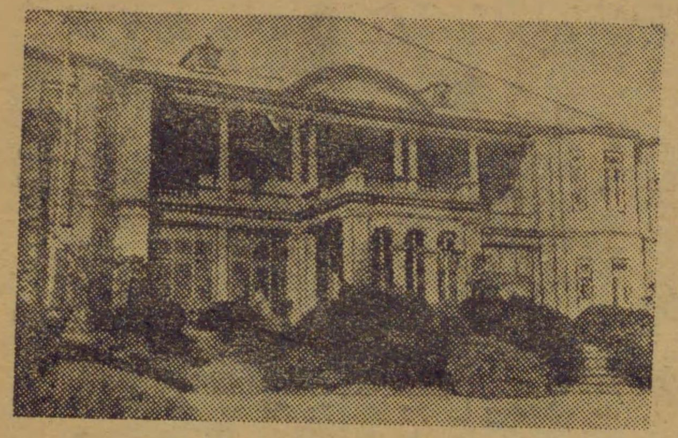
666
219

彼我の戰意に格段の差

東京交渉の遷延を恐れる日本

たわけではなかつた。ロシヤ政府の態度には、皇帝の個人的な見解や意思によつて支配されたもつと根柢のふかい動機がたしかにあつたはずであつた。韓國に對する保護權の設定に、皇帝が同意の口約をあたへられたことは前にも觸れておいたが、それと之とには何らかのつながりがあつたかも知れない。私が目を通し得たロシヤの秘密文獻の中に、たしかに斯うした口約があたへられた事實を、確證し得られるやうな文書は一つもなかつたので、わたしは之を確認したり、否認したりする立場にはゐないでも、この種の證據が韓國公使からその本國政府へ送られた報告中にあつたらしい。そしてそれが日本政府の知るところとなつて、日本は韓國問題を焦眉の問題とし、ロシヤの保護權設定の先手をうつて自分で韓國に保護權を、設定すべく決意するに至らしめた有力な原動力となつたのかも知れない。このロシヤ側の秘密な動機は、勢ひ西洋の同情國にもヒタかくしに隱してゐたのだが、これは明らかに日本政府の政策にとつては絶好の附け目となつた。これに反して同じ秘密の動機が皇帝の心に絶えず去來して――あくまで斯うした約束が實際になされたと假定してのことだが、右の口約は不用意になされたのだから、ぜひこれを取消してしまひたいと焦心して――それが皇帝の行動に影響したといふこともできるだらう。

ロシヤにはまさか戰爭の危機を冒してまでも、鴨綠江經營の利權を確保しようとする考へがあつ



東京の露國公使館（當時虎の門にあり）

セント ピータースブルグでは相變らず無駄な下相談が進められてゐたが、九月の初めになつて日本政府はたうとう栗野公使の進言に從つて、交渉を東京に移すことに同意した。日本政府が東京交渉說に、永いあいだ同意しかねてゐたのは主として私が本國外務省の評判惡しく、外相に十分の信任をうけてゐないことを知つてゐたゝめであつたと、信ずべき十分の理由があつた。それでラムスドルフ伯が、東京交渉說を云ひ張つたばかりでなく、日本公使との會談に際して、いつも一切の問題について私か、でなければ總督に相談する必要があると口癖のやうに云つたので、日本政府の方では時間を延ばしておいて軍備を完成しようとする、ロシヤ側の手だと邪推したのは、時間を引きのばすことは明らかに日本側の損になるのだから尤も千萬なことであつた。でも結局東京說に同意したのは、シベリヤ線の輸送速力を調査するといふ名目で、滿洲國境へ歩兵一ケ旅團を派遣したほかは、別段ロシヤ側には眞劍に滿洲へ增兵しさうな計畫がありさうもないと知つたゝめらしい。

最初の日本提案に對するロシヤ側の對案は總督が作成することにな

666
219

つてゐたが、私はそれから間もなく、來るべき日露談判に關して總督が私と相談する必要があると認めた場合のために、いつでも旅順に出かけられるやうに準備をしておけとの勅命を拜受した。その月の終り頃、果して總督から招致命令をうけ、私のため巡洋艦リツク號を長崎まで派遣した。私はこゝでちよつとロシヤ側には戰爭に對して全く準備などある譯なく、從つて戰爭をやらうなどゝいふ氣持が徹頭徹尾なかつたロシヤ側の情況を暗示させる小話を述べなければならない。もうぢき旅順港に着かうとしてゐたとき艦長が私に總督は、竹馬の友だつた私をぜひ上陸の場所まで出迎へたいと云ふので、豫定の到着時間を今しがた無線電信で知らせたばかりだと傳へた。私がなにも云はずにアレキシエフ提督の書齋に入つて行くと、同氏は少なからず面喰ひ、さつきの無電が屆いてゐなかつたのでブリ〳〵してゐた。たゞちに事情を調べさせると無線電信受信所の器械が狂つてゐたといふのであつた。

私の旅順滯在期間は四十八時間しかなかつたので、私たちは時間の無駄がないやうにと直ちに政局の討議に入つた。私は單刀直入に總督に次の諸點を報告した。すなはち私の判斷し得るかぎりでは、日本政府はまづ出來るだけ外交折衝によつて、それで出來なければ武力に訴へても韓國の絶對的支配權を獲得すべく決意を固めたこと、日本は西洋諸國の利益のためにロシヤの侵略に對抗し、韓國と支那の獨立および保全を防衛しよう、としてゐるのだと云ひふらしてゐるので、西洋諸國の道義的支持を確保してゐること、われ〳〵には韓國ばかりでなく、滿洲においてもわが地位を保持する望みのないこと。私の意見ではこの際われ〳〵のなし得る唯一の合理的な事は滿洲に膠着し、韓國は早々引揚げることであるといふこと、この上、遲らせ

るとロシヤは陸海軍を增員し、砲壘を强化するためだと邪推し、日本は事を一擧に解決しようと急いでゐる時だから、愚圖々々してゐるのは決してロシヤの利益にはならないこと、われ〳〵は調印するか戰爭するかの最後通牒を何日突きつけられるか、もつと惡くすると何らの準備もないところへ無警告にグワーンと喰らはせられるかも判らないこと、等々。私はうまく總督を說き伏せ得たかどうか私にも判らない。けれども私はかれも多少わたくしの意見に傾いたのだが、たゞそれを實行に移す自由がなかつたのではないかと思つた。たしかに誰も自分に降りかゝつてゐた重大な責任にふかく氣づき、しかも不十分な軍隊でこれを防衛しなければならぬやうな危險な地位に、ズル〳〵ベツタリはめ込まれてゐたことも十分承知してゐた。

『某國』と云へば即ちロシヤ

身邊を押包む重苦しい氣流

アレキシエフ提督は頗るあけすけにあらゆる手段をつくして逃げたが、のつぴきならず總督に祭りこまれてからは、本國政府の各省と喧嘩のしどうしであることなどを話した。彼はまた總督の地位に話があつたとき、皇帝に奉つた回答電文や愛國心に訴へて就任を口說かれた要請書翰などを示した。その返電をみるとアレキシエフ提督は忠誠のあふれた、そして尊敬と熱心をこめた文句で、その器ではない地位に自分を任命なさらぬやうにと哀願してゐた。總督はこの事について私がどう考へるかと尋ねた。そこで私は紋切型の、非才その任にあらずと御辭退するばかりが能ではな

666
219

いのだから、極東總督を新設することによつて、一層拒車をかけられることになつた極東政策を遂行するには、まづ適當な兵力、云ふてみれば三十萬の陸軍とバルチツク艦隊大部分の最優秀戰鬪艦隊のうしろ押しを必要とすると述べ、次ぎに自分の誠心誠意お受けすることのできないやうな責任を、押しつけないやうに皇帝にお願ひすれば、提督自身の爲めばかりでなく愛國的見地から云ふても、どんなによかつたか知れぬと私は率直に答へた。二日の旅順滯在期間、わたしが親しく見聞し得たものからは、ロシヤの軍備の程度が、どんなであつたかの確な結論を引きだすことはできなかつた。

日本側に出すことになつてゐたロシヤ側の對案について、總督と私の間に協議されたが、當時の事情として既に豫想されてゐたやうに、實際に價値のある結果は少しも得られなかつた。ロシヤ側の原案に從つて、滿洲に觸れるものは一切協定範圍から除外するといふ點はあくまで頑張り、たゞ朝鮮に關して多少の讓歩をするといふのであつたから、この對案が滿足に考慮されなかつたのは已むを得ぬ仕儀であつた。それで日本側の案は大抵、栗野公使を通して直接にラムスドルフ伯に手交され、ロシヤ側の對案は全く私の手だけを經て日本の外務大臣に通達されるやうにして、日露の折衝は相變らず進められた。

私が旅順から歸つて意外に思つたことは、日本の新聞の論調がすつかり變つてゐたことで、政府のその時々の主張に常に調子を合せるやうになつてゐた。この點で日本の新聞は愛國的な、また擧國一致的な態度を示し、政府の指導に從つてゐた。そしてまた、亂暴な言葉や挑戰的な文字は一切避け、ロシヤは減多にそのまゝ名指しされるやうなことがなく、大抵『某國』と稱せられた。も一つ、一般國民が政局の緊張に漸く氣

づき始めたと私に思はせたものがあつた。初めのうち全く私の氣にも留まらなかつたことだが、私の身邊を安全にするために物々しい警戒が行はれてゐたといふことであつた。私は毎日、夕方五時ごろ、東クラブに出掛け、日本の友人だちとお喋りしたり玉突きをしたりする習慣になつてゐた。公使館はちやうど乘物もなく、人つこ一人通らないやうな街の突き當りにあつて、クラブのある場所までは小半哩も離れてゐたので、私は往きも歸りも徒歩で通ふことにしてゐた。ところがクラブの行き來の道すがら、三四人のそれも大抵おなじ顏觸れに、同じ場所で會つてゐることに氣づくやうになつた。勞働者の着物を着てゐるものもあつた。人力車夫の姿のものもあつた。日本服もあれば洋服もあり、中にはフロツクコートにシルクハツトといふのもあつた。そのうちに私の方でも誰がどんな顏か見さかひがつくやうになり、彼らの側を笑顏をみせて通ることもあつた。さうすると彼らは丁寧にお辭儀をしたり、ゲラ〳〵笑ひながら敬禮をするものもあつた。玉を突いてゐる折、日本の友人のひとりに何心なく、右の次第を話すと、かれは笑ひながら『あなたが、とうに氣づいてゐられるやうに、こゝからの歸り途で毎日お會ひになつてゐる從順な友人たちといふのは、ありや、みんな刑事なんですヨ、ですがネ、連中は警視廳の腕つこきの中からすぐつたものばかりですから、どいつも物判りがいゝ筈です。それであなたの身邊を警戒することが、連中のお役目なんですヨ』と說明した。

666
219

小村外相の眼が物を云ふ

最後の日、最後の言葉を聽く

ふことに、思ひつき、數隻の軍艦がウイレニウス少將指揮の下に日本に向けられることになつた。そして一九〇四年一月初めには、その小艦隊がスエズ運河を通過した。ところがこれより先きアルゼンチンの註文でゼノアにおいて造られた二隻の新巡洋艦が、途中で日本に買ひ取られ、それがロシヤ艦隊に先行してイギリス士官が指揮し、イギリス水兵のもとに日本に向つて急行してゐた。わたくしの目には、日本がウイレニウス提督麾下の小艦隊の到着をまたず、戰端を開かうとしてゐることが明らかであつた。

日本の戰備情況を私につぶさに報告してゐたわが海軍機關の意見も亦さうであつた。この事に關しては私はそれでもなほ半信半疑の氣持ちでゐたのであつたが、小村男が例によつて例のごとく、至極ゆつたり、措辭も鄭重に私と意見交換をしてゐるとき、突然癇癪玉を破裂させ、ちようど男爵が出したばかりの提案を、ロシヤ側はどうしても受諾できないと私が述べると、小村外相は『いや、日本側はどうあつてもロシヤ側に受諾させるやうになるかも知れんです』と吐き出すやうに云ひ切つた。そして外相の眼は、私にもはや最後の斷案が下されたことを告げてゐるかのやうにすら見えたので、私の半信半疑はたちどころに氷解したのであつた。

この場に臨んでは、もはや唯一つの機會が殘つてゐるだけであつた。戰爭か平和かの當面の問題に關して、政府と元老の間に、また元老同士のあいだにも、事毎に重大な意見の扞格をきたしてゐることが明らかであつた。そして最後までロシヤと友好的諒解を遂げなければならんと、主張する强硬な一派があつたことも明瞭であつた。小村外相の態度で私はさう思ふやうになつたのであつたが、よし開戰といふことに既に最後の決定が下されたとしても、平和的解決論を主張する一派を勢ひづけることによつて、之を覆へさせ得ないものでもなかつた。私の見當では平和論者の頭株には伊藤侯、井上伯のやうな二大政治家も居るやうに思はれた。でもこんな事は、これまで頑强に固守してきた朝鮮に關するロシヤの態度を完全に放棄することによつてのみ、成し遂げ得られるものであつた。まつたく絶體絶命の機會であつた。けれども、日本はロシヤの軍事上の弱點にうす〳〵氣づいてをり、大丈夫勝てると鼻息もなか〳〵荒かつたが、底知れぬロシヤの潛勢力をなんと云つても薄氣味惡く思つてをり、その上に、戰爭の全運命は一本のか弱い細絲――すなはち最初の一擊で、制海權を握るかどうかにあつたといふ事實を忘れてはならなかつた。そこで私は最後のこゝろみとして本國政府に局面のいよ〳〵重大となつたことをぜひとも諒解させなくてはならぬと決心した。それで同日夕方、ラムスドルフ伯宛てに打電し、一八九八年三月、日本側から出た原案に還元すべきことを卽刻提議することが絶對必要であると進言した。進言の意味は、この期に臨んで開戰を避けようとするなら、朝鮮に關するロシヤ側の云ひがゝりを一切合財、放棄すべしといふのであつた。なんの音沙汰もないところを見ると、私の電報は一顧もあたへられなかつたことが明らかであつた。

666
219

迅雷の如く仁川・旅順の戰報

敵國公使を見送る『武士道日本』

その後、二週間あまり、提案、對案の無益な交換がくりかへされたのち忘れもしない、一九〇四年二月六日、土曜日の午後、わたくしは小村男から外務大臣官邸に四時に來るようにとの書面をうけとつた。私たちが座につくと、小村外相が、日本政府は永い無駄な折衝をこの上つゞけても、無益であるといふ結論に達したので、ロシヤとは外交關係をも同時に決裂させることになつたと切りだした。セント ピータースブルグ駐劄日本公使は、同時刻にロシヤの外務大臣にこの日本政府の決定を傳達してゐること、栗野公使は公使館員や領事館員を引きまとめて、できるだけ早い時期に、引揚げるやうに訓令をうけてゐること、あいにく差當つて出帆する汽船がなく、私が家族や公使館員、領事館員などを纏めて引揚げるのは、どうしても數日は遲れなければならないこと、たゞし私たちの安全を圖るやうに手續きが取られてあるから、この點に關しては少しも懸念がいらぬことなどを、小村外相は次ぎ〳〵に話した。小村男の話がをはると、私はスツクと立ち上り、そして日露の談判が失敗に歸し、日本政府が開戰を決意する仕儀にたちいたつて甚だ殘念だと述べた。小村男は私 言葉をさへぎりながら、自分は外交關係が決裂したと申しあげるだけだと語つた。そこで私は型通りの御辭儀を交換して引き取つたのであつた。

公使館に引き返すと、海軍駐在武官が出迎へ、わたくしの鼻つ面で、その朝の午前六時に日本の艦隊が二つに分れて、いづれともわからぬ方面に向つて出動したと報告した。その報告によると一方の艦隊は二箇師團の陸軍を乘せた運送船を護衛してをりその陸軍は恐らくは朝鮮半島西海岸の或地點で上陸するものと確められたこと、他方の艦隊はロシヤの艦隊が旅順港外に碇泊してゐることは日本側にも知られてゐるので、之を攻擊することを目標としてゐることも同樣に明らかであるといふのであつた。

これではどうしても卽刻、總督に對して、攻擊をうけることを覺悟しなければならぬと警告する必要があつた。もちろん直ちに暗號電報に組まれ、旅順とセント ピータースブルグに打電した。けれども一切の運命は、この攻擊の如何に懸つてをり、攻擊は奇襲によらなければ成功しなかつたので、日本政府は一時外國行きの電報はなんでも差し押へてゐたのであるから、これも亦むろん私の打つた電報は一通も目的地に着かなかつた。全體としての戰爭の運命が決定されようといふぬきさしならぬ。危機に當面して、手も足も出ぬまでに賴るべなき人間のことを思ふと、心がかきむしられるばかりであつた。

次ぎの月曜日にロシヤの小型巡洋艦二隻が、仁川沖で日本艦隊のために擊沈されたとの報道をうけた。その次ぎの火曜日には、旅順港碇泊中のわが艦隊が、日本水雷の夜襲をうけ、その結果、わが最優秀艦中の三隻が艦隊から脫走し、殘りの軍艦は全部、內港に避難したとの運命的な報道が入つた。日本側の奇襲がどうしてうまくなし遂げられたかの理由は、セント ピータースブルグに歸つてから始めて私は知つたのであつた。

いよ〳〵引揚げが叶ふまでの、五日間の待ち遠うしさは、何にも譬へやうがなく、それに斯うした殘酷な

666
219

知らせがあつたりしたので二重の苦しみをうけた。そのあひだ興奮した群衆が、口々に罵詈讒謗の言葉を叫びながら、ひつきりなしに公使館の外側に集つてきたが、私たちを嚴重に護衛してゐた警官や軍隊のために、直ちに追ひ散らされるのが常であつた。

私が小村男と最後の會見談を行つた日の、次ぎの日曜日に感激すべき出來事が起つた。私の家内が、客間にたゞひとりでゐたところへ、皇后職の女官が到着したとの取次をうけた。女官は皇后陛下におかせられては、かうした悲しむべき狀態で訣別することを殊のほか遺憾に思召された旨を述べ、そして日本滯在の記念として、皇后陛下より下された御下賜品を受納されるやうにと述べた。御下賜品は皇室ノ御紋章入りの一對の銀製花瓶であつた。家内は初めのうちは多少躊躇したが、もちろん思召しのほどを拜察し、この可愛らしい御下賜品を拜受したうへ、御鄭重な御記念品を下しおかれ感激の極みである旨、皇后陛下に御傳達下さるやうにと女官に依頼した。

私たちの出發はいよ〳〵十一日午後十一時といふことに決定した。その日の朝、私の知合ひで古くからの友人の一人が、伊藤侯からの言傳をもたらし、伊藤侯はお役目柄したしく、訣別の辭を述べられぬこと、伊藤侯が最後のドタン場まで平和のため奮闘した事實を私に知らせたいと思つてをり、またできるだけ近い將來に私たちの友情關係が復活せんことを衷心から希望してゐることなどを話した。ダヌタン男爵につゞいて榎本子爵が訪れた。榎本子は數年前初代日本公使としてセント ピータースブルグに駐劄してゐたので私とは同地以來の別懇の間柄であつた。子爵はすでに非常な老體となり、東京から數マイルも離れた田舍に住んでゐたが、病床を拔けだして私に生前、最後のお別れの言葉を述べるためにやつてきたのであつた。

指定された日の夜十一時、わたくしたちを停車場へ見送るための馬車と護衛が、すでに公使館の前庭に現はれた。私たちの通つた街々は、騎兵隊で固められ、侮蔑や邪魔物が飛びださぬやうにと、嚴重に警戒された。停車場の入口は軍隊によつて遠巻きにされ、政府關係者の乘物以外には、人つこひとりも通さぬやうにされてゐた。驛の構内には全部の外交團關係者が訣別の挨拶のため私たちの到着をまつてをり、――また官廷の顯官たち、女官たちの姿も見えた。

これが交戰國の代表にあたへた武士道日本の見送り振りであつた。世界はこの時より進歩したと見えようか！

＝（完）＝

666
219

昭和十年五月廿七日印刷
昭和十年五月卅一日發行

定價金十錢

編輯兼發行者　東京市麴町區丸ノ内二丁目十八番地　株式會社時事新報社

右代表者　東京市麴町區丸ノ内二丁目十八番地　榊原福壽

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十二番地　太田米吉

印刷所　東京市神田區錦町三丁目十二番地　合名會社太田印刷所

發行所　東京市麴町區丸ノ内二丁目十八番地　株式會社時事新報社

（版權所有）

666
219

時事パンフレット

第一輯　圓は果して何うなる？　定價五錢　送料二部迄二錢

第二輯　尨大豫算の財界に及ばず影響　定價十錢　送料二部迄二錢

第三輯　日印通商條約廢棄と其影響　定價十錢　英文二十錢　送料二部迄二錢

第四輯　東支鐵道の解剖　定價十錢　送料二部迄二錢

第五輯　日英綿業戰　定價十錢　英文二十錢　送料二部迄二錢

第六輯　五・一五事件陸軍大公判記（大好評賣切）

第七輯　血の叫び　田中中尉作　太田上等兵畫　定價十錢　送料二錢

第八輯　『番町會』を暴く（帝國人絹の卷）　定價十錢　送料二錢

第九輯　『番町會』を暴く（神鋼乘取の卷）　定價十錢　送料二錢

第十輯　産業外交と日蘭會商を語る　定價十錢　送料二錢

第十一輯　日露戰爭を語る　其ノ一（陸軍ノ卷）　定價四十錢　送料

第十二輯　日露戰爭を語る　其ノ二（海軍ノ卷）　定價四十錢　送料

發行所　東京市麹町區丸ノ内
振替口座東京四三九九
時事新報社

666
219

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black